74456
五衣

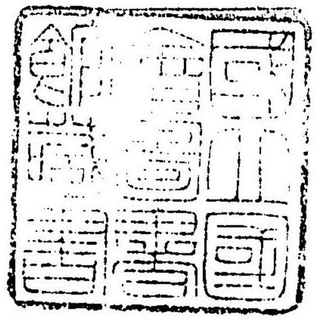
大野洒竹
治波瓊音 校訂

芭蕉句選年考 下卷

東京
文成社發兌

芭蕉句選年考下卷目次

秋上……一—一〇五
秋中……一〇七—二一
秋下……二二三—二九二
冬上……二九四—三六八
冬下……三六九—四五四
雜部……四五五—四六四
索引



91.32
I642h
a

282097

芭蕉句選年考索引

あの部

	巻	頁
足駄ばく	上	一〇五
扇にて	上	一一三
明ぼのや	上	一二五
鮎の子の	上	一二六
青柳の泥に	上	一三一
あら尊と	上	一三五
青葉して	上	一四七
有がたき	上	一三一
海人の顔	上	一六〇
菖蒲草	上	一六八
青ざしや	上	一三五
紫陽花や幡子	上	一三三
紫陽花藪を	上	一三三
朝露に	上	一三二
あつき日を	上	一六九
あつみ山	上	一四四
秋近き	上	一四六
有がたや	上	一四四
あら海や	下	六
あの雲は	下	一〇
朝顔に我は	下	一二
朝顔は酒もり	下	一四
朝顔や盃は	下	一四
朝顔は下手の	下	一四
青くても	下	一七
海耶の家は	下	一九
粟稗に	下	一〇
明ぼのや	下	一五
あさむつや	下	一六
秋もはや	下	一三
あの中に	下	一九
秋を經て	下	一八
秋風の吹とも	下	三一
秋風や藪も	下	三一
秋風に折れて	下	三三
あか〳〵と	下	三一
朝寒も雛松島の	下	二四八
秋の夜をうち崩し	下	二五〇
秋十とせ	下	二六四
秋深き	下	二六七
秋に添うて	下	二六八
秋涼し	下	二七一
有難や	下	三三八
あら何ともなや	下	三九四
あそび來ぬ	下	三九五
有明も	下	四二七
あさよさを	下	四六一

いの部

	巻	頁
凍解けて	上	四八
命二つ	上	三
いろ〳〵の	上	一六八
烏賊賣の	上	二三一
石の香や	上	三四

いざともに　上三四
稲妻や闇の　下一四
稲妻にさとらぬ　下一四
稲妻を　下一九
稲妻や顔の　下三三
家はみな　下三六
稲雀　下九
十六夜は　下一四〇
いざよひも　下一四一
いざよひや　下一四一
いざよひの　下一四一
入月の　下一七四
稲こきの　下一九五
石山の石より　下二三五
芋洗ふ女　下二三五
いかめしき　下二四八
いざさらば　下二五八
市人に　下二五九

うの部

鷺や餅に　上三六
鷺や柳の　上三七
梅が香にのつと　上三四
梅白し　下一四
梅若菜　下一九
梅の木　下三三
梅が香に昔の　下三六
鷺を魂に　下九
梅柳　下一四〇
鷺の笠　下一四一
打寄りて　下一四一
疑ふな　下一四一
うらやまし　下一七四
卯の花や　下一九五
うき我を　下二三五
うき人の　下二三五
鷺や竹の子　下二三五
鵜鶘もて　下二四八
瓜の花　下二五八
瓜の皮　下二五九
卯の花も　上二八
馬に寝て　上二三
牛部屋に　上二三
馬方は　上二五
馬ほく〳〵　上二五
馬をさへ　上二五
海暮れて　上二七
埋火や　上二七
埋火も　上二七
魚鳥の　上二八
打寄りて　上二九
梅椿　上三三
叡慮にて　上三三
枝ぶりの　上三三
榎の實散る　上三六
えびす講　上三六
大津絵の　上三七
大比枝や　上三八
御子良子の　下三八
おとろひや　下一八四
起きよ〳〵　下二三四
阿闍陀も　下二九
落ざまに　上二〇四
已が火を　上二六四
笈も　上三〇六
大井川　上三五四
おもしろうて　上三八一
老の名の　下九五
俤や　下一五八
起きあがる　下一九六
おもしろき秋の　下二四九
送られつ　下二六四
お影講や　下二六九
面白し　下四〇五

かの部

香を探る(瓜出)　上四二　下四三
香に句へ　上四三
神垣や　上五三
傘に　上五四
歌へ來ぬ　上五三
陽炎の我肩　上五五
陽炎や　上六六
枯芝や　上六八
唐崎の　上七三
樋の木の　上八〇
紙衣の　上八五
景清も　上八五
蝸蝸も　上一〇〇
顔に似ぬ　上一〇〇
蝸よりは　上一〇〇
杜若　上一一三
蝸牛　上一一三
裝束て　上一一五
笠島や　上一二六
風瀟る　上一二六
松魚うり　上一二六
鎌倉な　上一二六
川中の　上一二六
唐破風の　上一二六
川風や　上一二六
語られぬ　上一二六
歌ならぬ　上一二六
刈あとや　上一二六
棧や先づ　上一二六
川上と　上一二六
かゞり火に　下二八七
かくさぬぞ　下二九一
かくれ家や　下一九六
棧や命を　下二一三
枯枝に　下二一三
寒菊や粉糠の　下二三四
厘さわぐ　下二六六
から鮭も　下二四〇
かくれけり　下二四四
かちならば　下二四七

きの部

木曾の情　上一六九
木啄も　上二二六
京にても　上二三四
清く咽かん　上二四三
泉湯の　上二四三
清瀧の　上二四三
霧しぐれ　上二五二
霧雨の　下二六六
桐の木に　下九七
木曾の痩も　下一〇三
木曾の　下一四五

砧打て　下一八五
菊の香に　下一九三
菊の露　下二五五
京に倦て　下三一三
金屏の　下三〇三
菊の花　下一九九
菊の後　下二〇〇
菊の香や庭に　下二〇三
菊に出て　下二〇四
菊の香や奈良は　下二〇五
菊の香や奈良には　下二〇八
木曾のとち　下二一九
梧うごく　下二三〇
京までは　下三五四
君火たけ　下三六〇

くの部

元日に　上五
観音の　上八四
草の戸も　上一三〇
草臥て　上一八二
薄佛の　上二三〇

愚にくらく　上二六三
草の葉を　上二七二
椹の實や　上二二三
水鶏啼くと　上二四四
雲の峯　上三五九
熊坂が　上二四
草いろ〳〵　上四七
草の戸を　上九〇
雲なり〳〵　上一一〇
草の戸や　上一三
草枕　上一九八
葛の葉の　上二〇一
藥のむ　上二三一
鞍つぼに　上二三五
口切に　上四〇三

けの部

今日よりは　下一一
鶏頭や　下七〇
けふばかり　下九三
蛭に　下一一七

この部

蒐翁に　上二六三
蒐翁の　上二七二
子供等よ梅　上二二三
紅梅や　上二四四
此こゝろ　上三五九
木のもとに　上四七
鶴の巣に　上九〇
子に飽くと　上一一〇
鶴の巣も　上一三
木がくれて　上一九八
此宿は　上二〇一
子供等よ霞顔　上二三一
此あたり　上二三五
小はぎ散れ　上四〇三
御廟年を經て　下一一
小蝶にも　下七〇
こよひ雎　下九三
こよひ雎　下一一七
米くゝる　下一三〇
九たび　下一八〇
此寺は　下一八九

琴箱や　下一九四
籠り居て　下二一八
こちら向け　下二五五
此道や　下二六八
此秋は何に　下二六六
木枯に匂ひや　下二三三
木枯に岩吹き　下二三四
木枯や頬はれ　下二三四
木枯の身は　下二三五
氷苦く　下二三五
こを燒て　下二三八
米買ひに　下四四七
これや世の　下四七七
此わすれ　下四三一

さの部

嵯な都　上八四
淋しさや花の　上一八六
四行の　上八六
酒のみに　上一〇七
最中の　上二一三
櫻狩り　上二一七

さま〳〵の事　上一九
さかづきに　上一二五
草履の尻　上一〇三
篠の露　上二二五
寒からぬ　上二二三
櫻想ひて　上二三四
早苗にも　上二七八
早苗とる　上二九四
五月雨にかくれぬ　上二九五
五月雨や蠶　上二九六
五月雨に鳴の　上二九七
五月雨の空吹き　上二九八
五月雨を　上三〇一
五月雨の降る　上三〇四
五月雨や色紙　上三六〇
さゞ波や　上四一九
さくらより　上四二八
さゝれ蟹　上三三
四行の　下一四〇
坐頭かと　下二九〇
猫虫は　下三三五
猫をきく人　下三三五

さびしさや須磨に　下二六二
三尺の　下三三五
さればこそ　下三二九
雜水に　下二四八
酒のめば　下二二七
寒けれは　下二二九
霜の後　下二二九

しの部

四方より　上八九
しら魚や　上二二七
鹿の角　上一五六
しばらくは　上一八〇
白魚に　上二〇一
白芥子に　上二六一
閑さや　上二四七
城あとや　上二九一
汐こしや　上四〇四
白芥子や　上四二八
白露をこぼさぬ　下四八
しほらしき　下五七
白髮ぬく　下八五

鎖あけて　下一六三
柴の戸の　下一六六
白菊の目に立てゝ　下一九七
死にもせぬ　下二五一
秋海棠　下二八四
時雨るゝや田の　下三〇一
しのぶさへ　下三三七
鹽鯛の　下三六〇
しぐれ行くや　下四四五

すの部

雀子と　上一三七
須磨寺に　上二一八
須磨の海士の　上二三三
すゞしさを給に　上二九七
すゞしさやほの三日月　上三九八
涼しさを我宿　上四〇〇
涼しさを飛驒の　上四〇一
涼しさや直に　上四〇三
硯かと　下三五
水仙や白き　下三三三
すくみ行くや　下三四七
其方を　下三六八
住みつかぬ　下四〇三
煤掃や暮れ行く　下四一五
煤掃は杉の　下四一六
煤掃は己が　下四一六

せの部

芹燒や　上五
節季候を　上九
節季候の　上一〇
せつかれて　上一三〇

その部

僧朝顔　上一六一
蕎麥はまだ　上一七一
其の玉を　上二八一
そのまゝに　上二九七
そのかみや　上三三〇
其匂ひ　上三五
其方を　下三三三

たの部

雎やらが　上五
雎人か　上九
旅鴉　上一六
稲孝や　上一八
大徑雛　上一一〇
當歸より　上一三〇
竹の子や　上一六一
田一枚　上一七一
旅人の　上二八一
旅人の　上三三七
蟾蜍や　上三三〇
七夕や　下一
七夕に　下二
高水に　下九
魂まつり　下二四
玉川の　下二八
鷹の目の　下九八
たふとさに　下一六〇
たうきびや　下一九一
旅人と　下二六三
たふとかる　下三三三
旅に病て　下三四〇
たゞつけて　下三六二
たわみては　下三六三
鷹一つ　下三六九
旅寢して見しや　下四一六
雖が婿ぞ　下四四二

ちの部

丈六に　上六六
散る花や　上九三
父母の　上一三五
粽ゆふ　上三一〇
菖はまだ　上三三七
長嘯の　下四〇九

つの部

鶴下りて　上八九
鄙躅生けて　上一八二
撞鐘も　上二四六
月はあれど　上三五六
露とく〳〵　下三三
月見せよ　下一三八
月に名か　下三四〇
月清し　下三六二
月さびよ　下三六三
月澄むや　下三六九
月しろや　下四一六
月のみか　下四二二
月影や四門　下四三二
墓植ゑて　下四三三
塚も動け　下四〇六
月花の愚に　下一三二
月白き　下一三五
月露と　下一三七
月花も　下一三七
月花の是や　下四〇九

ての部

蝶の飛ぶ　上八九
寺に寢て　上一八二
蝶も來て　上二四六
手に取らば　上三五六

との部

年々や　上三
年立つや　上一五
とんみりと　上二三七
床に來て　下八四
蜻蛉や　下九三
冬瓜や　下一七二
ともかくも　下二六六
年の市　下四二六
とぎ直す　下四三六
年暮れぬ　下四四七

なの部

なほ見たし　上三
何の木の　上九
奈良七重　上一三
永き日を　上一三
楽島に　上一六
夏來ても　上二〇八
なでしこに　上三一
夏草や　上三三
夏の月　上三三
なまぐさし　上三八四

なき人の　上　三九四
夏の夜や　上　四一七
夏ごろも　上　四三
夏山に　上　四三
七株の　下　五三
波の間に　下　五五
夏かけて　下　一三〇
何事の　下　一五一
雛波津や　下　三〇七
納豆切る　下　四一三
何なこの　下　四二五

に の部

庭掃て出るや　下　八〇
西東　下　二四一
乳飲の　下　二四九
庭掃て雪を　下　三五六
によき〳〵と　下　四三三

ぬ の部

ぬれて行く　下　五〇
盗人に　下　四四〇

ね の部

涅槃會や　上　四一七
猫の妻　上　四三
猫の恋　下　五三
合歓の木の　下　五五
恋白く　下　一三〇

の の部

暖簾の　下　一五一
野を横に　下　三〇七
蚕虱　下　四一三
野々宮の　下　四二五
野ざらしを

は の部

春立て　下　八〇
春なれや　下　二四一
春もやゝ　下　二四九
初午に　下　三五六
春雨や　下　四三三
春雨の　上　五三
八九間　上　五五
はれ物に　上　五八
花の雲　上　六九
花盛り　上　七〇
花の陰　上　七六
花も宿に　上　八五
花に寝ぬ　上　九九
花に遊ぶ　上　一〇三
花にうき世　上　一〇九
春の夜は　上　一一
原中や　上　一三三
道ひ出でよ　上　一四〇
はだかには　上　一四九
花と寳と　上　一六六
はつ真桑　上　二六六
蓮の香に　上　二八八
破風口に　上　三一三
はつ秋や　上　三三
萩はらや　下　四九
芭蕉野分して　下　六一
花むくげ　下　八〇
橘桁の　上　一五二
はやく咲　下　一九一

はつ芒や　下　二一六
蛤の　下　二九一
はつ時雨　下　二九四
花みな枯れて　下　三二六
初雪や水仙の　下　三四九
はつ雪やいつ大佛　下　三五〇
初雪やとけかゝり　下　三五二
はつ雪や聖小僧　下　三五三
初雪や幸ひ　下　三五四
箱根越す　下　三五四
蛤の　下　四四一

ひ の部

一年に　上　三三
人も見ぬ　上　三〇
一里は　上　八〇
雲雀より　上　一三三
雲雀鳴く　上　一三五
ひとつ脱いで　上　二〇五
日の道や　上　二三〇
一聲の　上　二三六
ひら〳〵と　上　三五八
蜜顔に蜜脛　上　三七
蜜顔に米つき　上　三七
蜜見れば　上　四九
一家に　上　一五六
ひよろ〳〵と　上　一五七
ひいと鳴　上　一五七
ひや〳〵と　上　一五七
一屋根は　上　一七九
人聲や　上　二〇四
颮風を吹いて　上　二〇五
百年の　上　二〇五
貧山の　上　二〇五
一露も　上　二〇五
日頃にくき　上　二〇五
比良三上　上　二〇五
人に家を

ふ の部

二日にも　上　二〇七
不性さや　上　二一三
古池や　上　二一三
二股に　上　二一三
古畑に　上　二一三
富士に行　上　二一七
降らずとも　上　二一七
風流の　上　二四九
藤の實は　下　五八
文月や　下　九
船となり　下　二六
吹飛ばす　下　二九九
冬籠　下　三〇八
冬枯の　下　三一
冬牡丹　下　三三
二人見し　下　三三
ふり實りの　下　三四六
ふる里や　下　三六一
分別の　下　四二九

へ の部

蛇喰ふと　上　一六八
渺々と　上　二一七

ほ の部

蓮菜に　上　一

ほろ〳〵と　上一八五
牡丹蘂深く　上二三三
時島壁よこたふ　上二四一
ほとゝぎす正月は　上二四一
獨魂まれくか　上二四三
ほとゝぎす大竹原　上二四三
ほとゝぎす消え行く　上二四四
ほとゝぎす鳴々　上二四六
郭公なくや　上二四七
ほとゝぎす啼く音や　上二五四
螢見や　上二六三
郭公うらみの　上四二八
鬼灯は　下七三
盆過ぎて　下八四
星崎の　下二七四

ま の 部

まづたのむ　上二九
眉揃ふ　上三一五
秣負ふ　上三一九
松杉を　上二六二
またたぐひ　上二八三
惣なりに　上二九
升買うて　上三一五
松茸や知らぬ　上三一九
松風の軒か　上二六二
松茸やかぶれた　上二八三
先祝へ　上二九

み の 部

湖や　上二七
水無月や　上二三
逆のべの　上三〇
裝束の　下三〇
三井寺の　下八六
三日月や　下四三五
三日月の　上二七
見しやその　上二七
見る影や　上二七
見所のあれや　上二七
身にしみて　上二七
見渡せば詠むれば　上二七
晦日月なし　上二七
道細し　下三一
宮人よ　下一四六
水鳥や氷の面の　下二六
水ばなに　下二三
都出て　下二八八

む の 部

蓼仮に　上一五七
むぐらさへ　上二三
蓼の穂を　上三〇
むかし聞け　下三〇
むさんやな　下八六
蓼はへて　下四三五

め の 部

目にかゝる　上三〇五
めづらしや　上三一八
仮あふぐ　上四三
名月の　下一〇九
名月に　下二一
名月や門へ　下二一
名月や池を　下二一三
名月や北國　下二六
名月や坐に　下二七
名月や二つ　下二八

も の 部

物の名を　上二四
もろき人に　上三一七
もの書て　下一二
門に入れば　下六五
桃の木の　下三三
物いへば　下三五六
物ほしや　下四五五

や の 部

山里は　上二九
山櫻　上二三
山路來て　上一五八
山寺の　上一五六
山吹や　上一八五
山吹の　上一八五
藪つばき　上二一〇
やどりせん　上三一六
やがて死ぬ　上三四五
柳骨柳　上三六八
山陰や　上三七一
山吹の　上四二七
藥園の　上六五
病雁の　下一〇八
やす〳〵と　下一四四
山寒し　下一五七
山中や　下一四
山はみな　下三一
痩せながら　下二九
山城へ　下三〇一
宿かして　下三四三
闇の夜や　下三四三

ゆ の 部

行春を　上三六八
ゆく春や　上三七一
行春に　上四二七
柚の花に　下六五
行末は　下一〇八
行駒の　下一四四
夕にも　下一五七
夕顔の白く　下一四四
夕顔や秋は　上三七一
夕顔や醉ふて　上四二七
湯をむすぶ　下六五
夕晴や　下一〇八
行や我　下一四四
夕顔に干瓢　下一五七
行秋の猶　下一〇九
行秋や身に　下三一〇
行秋や手を　下二九
雪散るや　下三一
雪ごとに　下二九
雪の朝　下三〇一
雪と雪　下三四三
沙よりも　下三四三
雪の中に　上一八六

よ の 部

四五器の　上一九六
吉野にて　上二五九
よく見れば　上二三
世を旅に　上三四五

世の人の　上 三四一
義仲の　下 一三
義朝の　下 二四一
よき家や　下 二六一
夜着は重し　下 三六六
夜着ひとつ　下 三七七
世の中は　下 四三一

らの部

闌の香や　下 六六

りの部

龍門の　上 一四六
兩の手に　上 二八

るの部

留守の間に　下 三三一

ろの部

六月や　上 三六〇
櫓の聲　下 三四七

わの部

忘るなよ　上 四一
我衣に　上 一三八
我宿は蚊の　上 二六六
我に似な　上 三六九
忘れずば　下 四〇四
早稲の香や　上 四九九
我宿は四角な　上 一四
佗て住月佗編笠　下 一二
綿弓や　下 三三一
佗びて住め月佗寮　下 二七八
わすれ草　下 二八六
　　下 四四四

ゐの部

ゐのし・猪も　下 二四六

をの部

折ふしは酔になる　下 一九四
折々に　下 三〇六
幼な名や　下 三八五

芭蕉句選年考索引　終

芭蕉句選年考　下卷

石河積翠園著
大野洒竹
沼波瓊音　校

秋之上

はつ秋やたゝみながらの蚊屋の夜着

元祿五年の西の雲集に見えたり○小文庫にもあり。

七夕や秋を定むるはじめの夜

元祿七年の有磯海集に見えたり○笈日記に草庵と有り○泊船集には野童亭と前書あり○そこの花に、七月十日洛の去來

定家卿花月百首に
さえのぼる月の光にこ
とそひて秋の色なる星

合の空
そこの花は元祿十四年
風化支考選

長明方丈記に災難天變の事を記せり

勵詠集に後江相公、風從二昨夜一聲彌怨、露及二明朝一淚不レ禁
評林に後相とあるは江の字落字なるべし

文通に、六月二十日平旦より辰刻まで洛中迅雷大雨珍事云ふ可らず就中なにがし野童院の御所宿直所に有つて雷難にあたり相果申候數年の心友今朝相とむらひ候得ば、老母の歎き稚子の悲しみ行衛おもひやられ落涙仕候誠に無常迅速其許にも御驚可被成候此一難は鴨の長明が思案にも落申間敷、と有りて、野童芭蕉の門人なり○評林に文月なれば秋の夜なれども秋の夜の初めは七夕の夜にこそあれと、秋情を申されたるなり。銀河風流露初結と詩にも見え、後相も風從二昨夜一聲彌怨とあり。しからば昨夜の詞もあふべし。猶考ふべし○按ずるに此詞當れるや知らず。爰に杜律天河の詩に、常時任二顯晦一、秋至最分明。注曰咏二天河一詩、常時雖レ有二明晦一、秋至則愈明而不レ可レ掩、これらの風姿も思ひ出でられ侍るか。

七夕にかさねばうとし紺合羽

越後高田にての吟、今町に眞蹟所持の者あり文月や六日も常の夜には似ず
あら海や佐渡へ横たふ天の川
二句一紙、呂叟と見えたり、
其袋集は嵐雪選、
俳鳩觜に此句は聽心寺といふ寺にての吟なり、聽心寺の僧は俳名眠鷗といふ、此名芭蕉の付けられたりと、彼寺に眞蹟あり、脇は眠鷗の書蹟なり、
按ずるに宿せぬ寺にはあらじ、別の寺なるべし　※

此句芭蕉にあらず、杉風が句なり、事は高水の句の所に記す

文月や六日も常の夜には似ず

元祿二年の吟なり。奥の細道に出でたり。何れの地の吟にや、其文なし。加賀越後越中等に到る間、九日病起りて事を記さずと有りて此句見えたれば、何れ其頃の句なるべし○其袋集に北國何とやらいふ崎にとまりて、所の夷もおし入りて句を望みけるに、と有り○猿蓑には前書あらず○泊船集には、文月のと見えたり○秘間集に曰、翁一とせ文月ばかり陸奥行脚を經て、越路へうつられけるが、直江津とやらんいふ所の或る寺に立寄りて、此寺に知音の人の添書持ちたりとて宿を乞ひ給へるが、旅のつかれの笠は雨風に吹破られて見る影もあさましかりしを、主の僧物陰に窺ひ見て、よしなくや思ひけん、宿なりがたきよし申しければ、翁何となき風情にて佛前に一禮して立

出で給へるを伴僧ども引とゞめて、俳諧の上手なるよし發句してたべと望みあへり。翁安き間の事よと、筆うちしめして、餞付け給へる事數多に及べり。曾良大きに腹を立てゝ、引立てまゐらせける。曾良申しけるは、誠に時こそあれ、秋の日のいと短く、山の端遠く暮れかゝるにぞ宿借るべくもなき所に、無用の振舞にこそと腹立ちける時、翁門前の石に腰かけながら曾良を制して云、左樣の心底にては行脚の一宿も覺束なく候、はじめ思ひ立ちぬるより、何の木のもとにも一夜を明し、由緣にまかせて行脚すべき覺悟ならずや。かゝる折にこそいとゞ佛說の高恩も尊まれ、娑婆の哀れも我身にふれて、俳諧の大道には入るべきなり。其の宿せぬあるじの心と、發句望める僧達の心と、人も心も格別なり。大節に臨んで奪ふべからず、造次もよくし顚沛にも能くするとこそ見え侍れと、杖引きながら立出で給へり。折から竹風といへる者とゞめ參らせ、茅屋にも休ひ給

論語に君子無二終食之間違一仁造次必於是顚沛必於是

へやと云へりければ、翁云、御志は有がたく候得共、添狀も有りける方を空しく過て、外に一夜を明さんもいはれがましく覺え侍れ、とても成るべき筋ならば、初のあるじの軒のつまにても立明したきやう申されけるを、竹風聞ていと安き事なり、幸ひ我菩提寺なれば、いかやうにもと誘ひける時、石鉢の水を手づから汲かけて足なんど洗ひて、佛前の側に安座し給へり。一間の次に曾良がかしこまりたる有樣、世の常の人とは見えざりしよし。「文月や六日も常の夜には似ず」といふ句も此時なるべし。奥羽行脚に曾良を俱し給へる事は、曾良が生質腐たゆまず、目まじろがず、いかさま岩頭に倒れ死なんに、容易く介錯して去るに客ならざる彼が勇あるをたのみてやと見えたり○粟津が原に、七夕の發句古來より手向けたるは、げに星の數も及ばず、しかれども多く七夕の夜の事のみさま〴〵にいひかはりて侍る、其中に師の句の「文月や六日も常の夜には似ず」是

粟津ヶ原桃隣逝なり、桃隣は伊賀の産にて芭蕉と同じく桃地藏なり

らも吾妻路にはしらず、上方筋にてはうけとりたる句なり○雪丸に、直江津にて、と有りて、此句に「露をのせたる桐の一葉左栗、朝霧に食たく煙立分けて　曾良」と脇第三有りて、眠鷗、此竹、布蕣、右雪、義年と共に八吟の歌仙のしかけあり。

「あら海や佐渡に横たふ天の川」

元祿二年の吟なり。奥の細道に「文月や六日も常の夜には似ず」の句にならぶ○其袋集に、文月やの句の次に、其夜北の海原にむかひて、と有り○勸進帳に、出雲崎にて、と前書あり○類柑子に前書同じ○評林に、詞書にくはし、略す。あら海やときびしく上に置きて、佐渡に横たふ天の川の強き事は西行の高根の雪にもくらぶべし。其夜の星きら〳〵として、荒海の音波をはこび、佐渡も眼前に見ゆるが如し。やさしき星のかり寢にかゝる風情の手づよき事誠に遠國波濤の風景といふべし。其折を見

新古今集、四行
降りつみし高根のみゆきとけにけり清滝川の水の白波

すとも歌人は居ながら、名所といへる俗語にもかゝる風情を○風俗文選に、銀河序、北陸道に行脚して、や申さん、尙あるべし越後國出雲崎といふ所に泊る。彼佐渡が島は海の面十八里、滄波を隔て東西三十五里によこをりふしたり。峯の嶮岨、谷の隈々まで、さすがに手にとるばかりあざやかに見渡さる。むべ此島は黄金多く出て、あまねく世の寶となれば、限りなき目出度島にて侍るを、大罪朝敵の類ひ遠流せらるゝによりて、たゞおそろしき名の聞えあるも本意なき事におもひて、窓おし開きて暫時の旅愁をいたはらんとする程に、日既に海に沈んで月ほのくらく、銀河半天に懸りて、星きら〳〵と冴えたるに、沖のかたより波の音しば〳〵はこびて、魂けづるが如く、腸ちぎれてそゞろに悲び來たれば、草の枕も定らず、墨の袂何故とはなくてしぼるばかりになん侍る、と有りて此句見えたり○泊船集勸進帳と同じ○師走袋に、七夕に夜を更したる句なり。出雲

崎より丑寅にあたりて見ゆれば、七夕の夜の明方に佐渡の方へよこたふなり、一句の仕立尤も巧なり○雲丸に越後國出雲崎といふ所より、佐渡の島へ十八里となり、初秋の霧立ちもあへず、流石に浪も高く、さればたゞ手の上の如くに見渡さる、と有りて此句見えたり。

合歡の木の葉ごしもいとへ星の影

元禄四年の猿蓑に見えたり○泊船集に七夕と題見えたり○句解に新後拾遺集「七夕の戀も恨みもいかにして一夜のうちにいひ盡すらん」、合歡はあしたに葉ひらき、夕にしぼんで眠るが如くなれば、俗にねむりの木とも云へり、一夜のちぎりなれば、此葉もいとへとなり、能くこの歌の心に通へり○按ずるに、此歌の心に通へるや知らず、星の影と有るからは、見る人に對しての吟にや。しからば他の木は勿論の事、夜葉を合す此木の葉をも厭へ、合歡はあひよろこぶの木と若き侍れば、今宵に似合しき名なれどもとかや○師走袋に、七夕の夜なれば合歡の木の葉越も厭ふべしとなり、眠らずとも明すべしと合歡の木に寄せたり○說叢に、合歡（ヨロコビアハス）とよむ、其葉のゆふべにあへる形容なり、葉は到つて細やかに重り茂りて、寸の間もなく、翠簾を八重にも掛けたる如きその葉越しをも尙いとひてまねらせよ、一とせ一度の契りなるほどにと、此方より遠慮しておもひを述べたる句なり。

新拾遺
入道二品親王　一夜のほど〻有り、
元禄五年の一字幽閑集に、木根川に遊びし時農家の夜合をもらひて弊居にうつし侍るとて、市に出てれるを我名ぞ合歡の花　沾德

高水に星も旅寢や岩の上

元禄六年文月七日の吟なり。泊船集に弔初秋七日兩星文あり。曰く、元禄六文月七日の夜、風雲天に滿ち、白浪銀河の岸をひたして烏鵲も橋杭を流し、一葉梶を吹折るけしき、二星も屋形を失ふべし、今宵なほたゞに過さんも殘多し、一燈かゝげ添ふる

折ふし、遍昭小町が歌を吟ずる人あり、是に依つて此二首を探て兩星の心をなぐさめんとす。小町が歌「高水に星も旅寢や岩の上　芭蕉」遍昭が歌「七夕にかさねばうとし紺合羽　杉風」と見えたり○小文庫泊船集に同じ○後撰集に雜歌の上に、いそのの上といふ寺にまうでて、日のくれにければ、夜明けてまかりかへらんとて、といまりて此寺に遍昭が侍ると人の告げければ、ものいひ試みんとていひ侍りける、小野小町「岩の上に旅寢をすればいと寒し苔の衣を我に貸さなん」返し遍昭「世をそむく苔の衣はたゝひとへ貸さねばうとしいざふたりねん」○評林に曰く、銀河雨中の吟なり、前書あり、遍昭小町が歌をよむと有りて、曾良も發句有り、遍昭小町が事は隣家に泊り合せて、遍昭小町に閉口の歌あり、夫にもとづくや、世を厭ふ苔の衣はたゝひとへと聞えしなり。有家の歌「岩が根の床にあくりをかたしきてひとりや寢なん小夜の中山」かゝる歌にもよるべしや、猶考ふべし○按ずるに曾良が句ありし事いづれにや、杉風が覺え違ひならん。また遍昭小町に閉口の事知らず、遍昭返歌有りし事後撰集のおもて前に記す。又有家の歌引くに及ばざるか。

金澤の北枝といふものかり
そめに見送りて此所までし
たひ來る今既に別れに臨み
て
もの書て扇引さくなごりかな

元祿二年の吟にして、奥の細道に、越前國丸岡にての事なり。其文に、丸岡天龍寺の長老古き因あれば尋ぬ、又金澤の北枝といふ者かりそめに見送りて、此處まで慕ひ來る、所々の風景過さ

す思ひつゞけて折節あはれなる作意など聞ゆ、今既に別に臨みて、と有り○古今抄に云、故翁の發句も附句一字の奇言怪語無ければ、尼も入道も聞き易からんに、今いふ不案のみならで、滅後に胡亂なるものも指をたふすに五七章もあらん、夫が中にも奥の細道に「田一枚植ゑて立ち去る柳哉」もの書て扇引さく名殘かな」されば此言奥の細道は故翁の紀行にて、武の素龍といふものに寫させ、湖南の木曾寺に持ちおはして、東武のみやげにと自ら讀みて、外題は其の時に自筆せられしが、滅後六年の秋に到りて、四半なる本紙のまゝにその一冊をすき寫し、去來奉行にて板にちりばめ侍りしものなり。しかるに柳の一章は奥の須賀川なる人の便りに、植ゑて立よる柳かなと其頃の文通に書き傳へ、次に扇の一章は加府の北枝が山中の見送りに橋の茶店にてそれが扇に書てたびけるよし、今も金城の家珍に傳へしが、扇へき分る別れかなと有り。ひそかに是等の優劣を評せば、前の立寄は後の立去るに優りて、西行の歌の意をはこび、田植の姿も涼しげにといはんか、前のへき分るは、後の引さくにまさりて離別の詞のしほらしく、別るも名殘も秋の扇ならん、さるをいみじと思せばや、清寫にかくは定りけらし。凡そ故翁の再思の句は、人を驚かさずといふ事なきに、今はた此章の惑解けず、下略○菅菰抄に、北枝は加州金澤の住、刀磨を產とす、翁門人、到て風流洒落なるものにて、奇談人口に殘る○按ずるに、へき分る別れ哉とは、別の字と分の字、いづれもわかるの聲同じ聞えといひ、又扇をへき分るはたやすくわかるものにあらず、旅中のわかれには手ばやく引さく方やすからんにや、又柳の句の立寄るは、西行の歌の意といへども、西行のしばしとて立寄りしが時をうつしたりといふ心のよし、盤齋が增抄にも見えたれば、かの歌の意をうけていふ時は立去るの方ならんか、されども直弟といひ、此道に高名の逸二が評せ

し所を今更未練の身として評すべきや。

稲妻や闇のかたゆく五位の聲

元禄七年の續猿蓑に見えたり○泊船集にも出たり。

稲づまにさとらぬ人の尊さよ

元禄五年の己が光集に、此句の前書に言、或智識ののたまはく、禪大疵のもとひとかや、いと有難く覺えて、と見えたり○十論爲辨抄に曰、獅子庵の遺稿に、三性の圖といふものは、圓相の中に三人の像有り、畫は五老井許六にして、賛は先師の筆なり。今の三類の圖の類なり「稲妻にさとらぬ人の尊さよ　芭蕉翁」取つかぬ力で浮ぶ蛙哉　僧丈艸」虻の目の何かさとりて早合點東花坊」按ずるに、此三章は三老の本性を寫せるならん。誠に祖翁の本性は闇中に例の智德をつゝみて、明處の人を看破すれば、閃電の變にも慈き給はず、是等に溫厚の二相をも知るべし。

丈草はもとより無依の道心にして、詩に遊び文に遊び、俳諧も人の好惡にかゝはらず、世は只其日くらしと思へり。さて東花坊は師命を忘れず、難波の遺帖を笈にして古今に俳諧の名を說破して、天下の舌頭を斷せんとす、道に建立の定法なればなり。然れば此圖は識文にして、爰に祖翁の陰德を知れとなり○秘問集に、此句は我身をいましめたるなり。石火電光是鈍しと死の火急なるを大悟して、今はの時も覺悟過ぎて力の有難からんはよしなき振廻なり。あはれに穩かならんこそ風雅なるべし。稲妻に張臂せんは力の有て眞に正見とはいふべからず。稲づまのもろく哀にしてさびしきと見るべきは正直なり。たとひ正見するとも、形脫却せざるほどは、いまだ火宅は遁れず。眼光落脫の眞の正見とやいはん。道は自在にして到る、外より來るにあらず。其人よく其人を知る。寶積禪師臨終の時、門人の

没に先師と云ふは支考をさす、支考門人蘆二が作としたるものなり實は支考も蘆二も一人なれど、かゝる趣向支考が思ふ所有りてせし事なり。三類の圖とは、古今抄にある所の圓相の中に東花白狂蘆二の三人の像を書きたるものなり

悟道を試みんといへり。其時普化和尚末座より立ちて筋斗を打飜す、俗にとんぼうかへりの事なり。是いづれの處に悟道有りや。禪師笑つて普化に附屬すと云へり。翁生涯五十四年、花實一期の嵐に吹かれて夢の如く泡の如し。生前の心に任せて、都の華やかなる地を避けて、見る人もなき木曾寺に遺骨を收めたり。沒後其所々に殘りたる短冊文章などは許六が買ひ求めて煙と失へり。其趣向は遠き國々へ流れ散て、彼はよし、是はあしゝと、恐味の口に評弄せられんは口惜し。人去つて速かに跡なきにはしかずと、誠に翁の志を知りたりと譽むべし。老子曰く、德の德とすべきは常の德にあらず、名の名とすべきは常の名にあらず。上德は德あらず、是を以て德あり。下德は德を失はず、是を以て德なしといふ。されば大德は音もなし、香もなし、今の世の人を見るに、俳諧を以て却て名利の種となす事、古翁の本意にはあらず。かゝる人は終に其大道を知らず、俳諧を藝の

やうに覺えて上手下手と批判して其心の到るいたらぬを知らず、其名の世上へ聞え、人にも敬はれて一座の上に立たん事を好みて、我門人と呼び、物にも記し、巧言令色を專とし、大欲無道の輩あり、恐るべきの至極なり○句解に曰く、或禪師曰く、吾悟れり會せると思ふ心、米一粒を百分となして、其一分有るだにも、いまだ實情にあらず、三十棒の徒なり。實大悟その人は悟れりと思ふ心念底をつくして一點なしとぞ○說叢に句解を難じて曰、句の解にあらず、悟心法の夜話ともいはん。此句は悟道を作りし句ならず、稻妻の觀想にして、悟らぬ人の事を言ひたる也。さあれば悟道の論は枝道に蛇足を添ふるとも云ふなるべし。斯くの如きは初學の耳に入らず。しかれば句解を思ひ立ちし本意には叶はざるといふべきか。又秘問集を難じて曰く、句の評には迂遠なるものなり、悟道にはかゝはらざるにはあらねども、兩品の評の如きは情に落ち理に凝つて俳諧の意

地なしとやいはん。一層に面白味あるべき句にやと、予は思ひ侍りぬ。つら〳〵按ずるに、此句に翁の骨折られし所は言はずして、悟りの字の理窟理論のみを附會する故に、一向句の正味に遠ざかるなり。生死の大事は電光石火を待たず、其中にもいや果敢くゆふべ〳〵見る稲妻なるを、人は百とせも生の松原に子孫の榮えを數へて、一夢の假りの露の舍りに金銀を貯ふも果敢き心なるを、夫をさへ辨へ知らぬ人を却て翁きと申されし處、深長の意味玄々妙々、是許六が云へる俳諧の國ぶりなり。知らざる人こそ翁けれ、慇ひに知りたる身は却て苦しと、こに千萬の腸を碎いてみるべきなり。凡そ上一人より天下の人皆擧つて聖人ならんには、孔子出でゝ何の役にか立たん、釋尊現じて實の袖乞ならまし。世上一まい恐人にてこそ聖人も君子も賢人も別れて其道行はれぬれ。少し悟りたて知りぬれば日暮に一大事の念もあれ、只管知らぬ人は何の思案も無ければ、却て餘くも羨ましきと也。一轉してすりあけ俳諧の花咲かせ俳諧の實ならせたる所なり。容易く解し難かるべし。日日に沈思してハヽアッと云ふ時解する句也。僧めきたる說の如きは物に縛せられたるの實事なり。物を轉ずるにぞ我家の滑稽の心骨ともいふらめ。（但し底なぬかぬ俳人は實事に落つる事也）此句上の意と一懸して電光朝露は果敢なきものゝ限りにて、維摩經にも法華經にも、世の無常をたとへられし故、悟るべき初なるを、夫をつれなく見過して悟らぬ手强きを述べたるは、上の句に全く一對なり、悟らぬ處面白し。○按ずるに己が光の前書にて濟むべきにや。秘問集は芭蕉直弟浪化の述作、夫を難ずる說據いかに侍るべき。

稲妻を手にとる闇の紙燭かな

貞享四年の續虛栗に前書、寄李下とあり。又李下の事は同集の

中に句有り、其前書に一年三百六十日開口笑無三日「他やこと
しこゝろと臼の蘊と」といふ句、李下なり○泊船集にも續虚栗
に同じ○赤草紙に、此句師の曰く、門人此道にあやしき所を得
たるものに云ひ遣す句なり、とあり。そのあやしきをいはんと
取物斯くの如し。萬心遣ひして思ふ所を明すべし○無門關に
直下明得眼似流星機如掣電

あの雲は稲妻を待つたより哉

元祿四年の曠野集に見えたり○いつを昔にも有り、泊船集に
も有り○評林に曰く、終日に雲を望めば心緊がれずといへる
詩の心にや叶ふらん。又來る雲のたゞずまひ浮雲の果敢なき
も待たるゝ暫ひも有りし稲妻の果敢なきをはかなき雲にて
待つもをかしみの一つなり。あの雲と云へる五文字に無量の
深意をこめて妙なり。「稲妻に悟らぬ人の尊さよ」と聞えしも、電

崩詠集
望雲心不繫、有時見月夜方閑　元稹

光石火の影によする人間の觀念にや。たゞ壯年の人血氣の盛
んなるを羨みたる老の衰へなるべし。右二句をひとつに評し
て後人を待つのみ○按ずるに、此評當れるや知らず。稲妻見ゆ
れば稲の花咲き實のると云へば、田家に是を待つにや。妻と有
る故に待戀の緣語ならんか。貞享の末、元祿のはじめの句にか
かることまゝ有り。草履の尻折て（山櫻の句貞享四年つゞきの原）さくらを折の
緣語、又笠嶋やの句（元祿二年奥の細道にあり）雨に笠の緣語なり。是などのた
ぐひか。

本間主馬が宅に骸骨共の笛

皷をかまへて能する所を畫
て舞臺の壁にかけたり、まこ
とに生前の戯れなどは此あ
そびに異ならんや、彼髑髏を

枕として終に夢うつゝをわ
かたざるも只生前にしめさ
るゝものなり

稲づまや顔のところがすゝきの穂

元禄七年の嶺猿裁に前書ともに斯の如くあり○行狀記に元禄七年の句の趣あり○句解に曰く「秋風の吹くにつけてもあなめ〳〵をのとはいはじ薄生ひけり」此歌の心も侍るにや○袖中抄に曰く「秋風の吹くにつけてもあなめ〳〵をのとはならしすゝきおひけり」顕昭曰、あなめ〳〵とはあなめいた〳〵と云ふなり、凡そ此歌の心は、江記曰く、在五中將爲嫁件后二條后出家、相搆、其後爲生髮到陸奥、留八十島、求小野小町尸、夜宿件島、終夜有聲曰、秋風之吹仁津氣天毛阿那目々々、後朝求之、髑髏之目中有野蕨、在五中將涕泣曰、小野止波不成薄出計理、即發葬云云、童蒙抄に曰く、この歌小野小町集に有り、昔野中を行く人あり、風の音のやうにて此歌を詠ずる聲聞ゆ、立寄て（落字か）其頭を清き所に置て歸りぬ、其夜の夢に、我は昔小野小町といはれし者なり○うれしく恩をかふぶりぬといへり、さて此歌を後集に入れたるとぞ、私曰く、此兩說相違す、江記には到陸奥留八十島求小町尸、童蒙抄には野中を行く人風聲の吟を聞き夢想に示すと、江記は連歌なり、終夜有聲唱上句、後朝に業平附下句、童蒙抄には一首聞于風聲、江記には髑髏有野蕨、童蒙には薄生ひたり云云、古今目錄曰、小野小町は出羽郡司女なり云云、數年在京好色也、然而歸本國死去、故屍在八十島歟、小野者姓歟住所歟、古今有小町姉、其歌に「時過ぎて枯れ行くをのゝあさ地には今は思ひぞたえずもえける」、此歌に小野の詞あり、舉我名只又自然に出でたるか○九相詩、骸骨歌、露の命消えにしあと

綱雲曰く、小野は姓なり。孝昭天皇第一皇子天足彦國押人命裔、大職冠妹子より六代小野篁、篁二男出羽守良實女小町なり。小町が姉系圖になし、妹有り、名を越前と云ふ

を見よがほに尾花がもとに殘るかばねを。」

加賀の國を過ぐるとて

熊坂がゆかりやいつの玉まつり

何れの年にや未知。笈日記、岐阜の部に、瓜畠集に加入す。其集中前書とも此の如く見えたり○按ずるに芭蕉七月加州行脚の事は、元祿二年奥の細道に、金澤は七月十五日なり、爰に大阪より通ふ商人何某といふものあり、それが旅泊を共にすと見えたり、此頃にや、扨熊坂が事は諸に、偖北國には越前の阿取波の松若、三國の九郎、加賀の國には熊坂の此てうはんを始として、究竟の手がらの者七十人、と見えたり○翁草に、加賀の國にて、と前書有りて「熊坂をとふ人もなし玉祭」と見えたり。

魂まつりけふも燒場のけふり哉

發句集元祿二年とす

發句集元祿三年として前書木曾塚草庵墓所近しと有り、四閑集は元祿十四年豐後住釣雲選白氏に何事不レ隨東洛水、誰家又葬北邙山、唐詩選北邙山上列二墳塋一

何れの手にや未知。笈日記京の部に、是もいづれの秋にや侍らん、人間唯一日朝暮鐘聲を隔つといへる觀想なるべし。前書は鳥邊山とあり○泊船集にもあり○西詞集に魂祭りと五文字に假名あり○つれ〳〵草に、あだし野の露消ゆる時なく、鳥邊山のけぶり立ちさらでのみ住み果つるならひならば、いかに物の哀もなからん、世は定めなきこそいみじけれ、

尼壽貞が身まかりけると聞て

敷ならぬ身となおもひそ玉祭

元祿七年の有磯海に前書とも此の如く見えたり○泊船集にも出でたり○按ずるに「世を厭ふ名をだにもさはとゞめ置きて數ならぬ身の思ひ出にせん」是は山家集に有りて、西行の世に在らじと思ひける頃よみたるよしなり、それにはあらでと

にや○眞蹟集に、齋貞無仕合まさおふう同じく不仕合とて難申盡候好齋老へ別紙可申候へども、急便候間此書一所に御覽被下候樣存候、萬事御肝煎御精御出しの段々先書にも申來、扨扨誠に不思議の緣にて此御人賴置候も箇樣可有端と被存候、何事も〳〵夢幻の世界、一言理窟は無之候、兎も角も能樣に御計可被成候、理兵衛もうろたへ可申候間とくと氣をしづめさせ取亂し不申樣に御しめし可被成候以上、六月八日、猪兵衛樣　桃青○按ずるに此帖上方遊杖の時と見えたり。

甲戌は元祿七年なり

甲戌の夏大津に侍りしをこ

のかみのもとより消息せら

れければ舊里に歸りて盆會

をいとなむとて

家はみな杖にしら髮の墓參

東花坊は京一條の坊名

元祿七年七月十五日古郷伊賀にての吟なり。續猿蓑に前書ともに句選の如く見えたり○笈日記伊賀の部に、去年元祿七後さみだれに武江より舊里にわたりて、洛の東花坊に遊び、湖南の木曾塚に納涼して、文月の初再び伊賀に歸りて、親しき人々の魂など祭りて、九月のはじめ又難波津のかたに旅だつ、此秋この別れありとしらば、頼むべく爲すべき事も多かるべきに、と有りて、七月十五日「家はみな杖にしらがの墓參」と見えたり○宇陀法師に此玉祭と成りがたき故に墓參とは申されけれ詞書に盆會をいとなむと出して後難をのがれ給へり(下略)句は、杖に白髮や、と見えたり○秘蘊集にこれ前書にて題を入れられたり。墓といふは題にも季節にも用ひがたし。依て前書を加へて盆の句とはなりけり。墓參りはあつかうては秋になるなり○行狀記にも元祿七年の句の趣に見えたり。詞書に故郷盆の間と見えて「一家みな白髮に杖や墓參」とあり○古今抄に

按ずるに季吟の增山の井に墓參と七月の季立にも出でたり、許六が記考ふべし

和漢文藻に白髪吟並に序と題有りて見えたり

無名の切「一家皆杖に白髪の墓參り」の一章を無名切の證句にならべたるは、是は白髪哉と歎息のやを用ひて、何の子細も有るまじきに、西麓庵の遺稿には白髪の吟といふ序詞有りて、發句の切とも定かならねば「まいる心のかゞみながらに」と云ふ下の句をいひつぎて、俳諧の歌にや侍らんと有り。さらば此句に歎息のや哉はいかで故翁の覺悟せざらん。滅後の不案より今名類にはあげたれど、是等はまして衆議によるべきなり○評林に云、此句の事色々と諸集に出して句解有り。夫にもとづき、あらましを記し、古人の志を補ふ。白髪の吟、芭蕉傳にも文月の玉祭る頃、武陵より古里に歸るに、二十とせの月日も夢なれや、北窓の萱草も霜枯れて、今は其餘やゝなかりしが、何事も昔に立かはりて、はらからの髪白く眉しわみて、つれなき命ありとのみ、いひ出づること葉もなきに、このかみの守り袋ほどきて、母のしら髪拜めよ、浦島が子の玉手箱、汝が眉もやゝ老いたりと、年月のおこたりはかたみに泣きつゝ「一家みな杖にしら髪の墓參まゐる心のかゞみながらに」東花坊が説示して本朝文藻に俳諧歌なりと有り○宇陀法師にも此句の事有り。前書なくば後ほど心もとなき事ありや。東武集に墓參りは季なしとて、何となく此句の事を打つ判者あり、今は昔其人も古人になりたり、大根引といふも前書有る格なるべし。考ふべき事なり○按ずるに和漢文藻に白髪吟とあり。文は貞享元年野ざらし紀行に「手にとらば消えん泪ぞあつき秋の霜」の句を「一家みな杖に白髪の墓參りの句の詞書とせる事、支考がとり合せしものにや。其文の中、北堂の萱艸も霜がれ果て、と有るからは、秋の霜の句相應なり。一家みなの句は盆中いまだ殘暑あるべきの句なり。猶考ふ可し○和漢文藻に此句の評に曰、此吟は遺稿の夜話に題類の評論有て其文の略文に、故翁嘗て官を辭し給ひ、古郷を隔つる事二十四年にして、或年此懷舊あり。されば天

和漢文藻の書損じなるべし本朝文鑑の方にては有るまじ

和の始とぞ。其後伊賀の西麓庵にて例の文稿を改むるとて、今思ふに白髮の玉祭りは其日の感情は演べたれど、發句は然る姿にあらず。此故に參るの字を以て歩行の樣を形容せしに、當季の詞も慥ならず。まして切字の入所なし。此等や有樣體と云ひて、まゐる心のかゝみながらに、と下の句を云ひ、次で俳諧の歌も然るべきやと云へるに、實にも前書の咏嘆より墓參りの哀腸を評せば、玉屑にいへる璽璽の悲み有つて吟の一字を題せんには、漢家の社陵が三字を假りて白髮の吟と題せしなり。

發句集元祿四年とす

むかし聞け秩父殿さへ角力取

何の年の吟にや未知、小文庫に「むかしきけ」と假名にて有り○古今抄に卽興體、景清も花見の座には七兵衛「むかしきけ秩父殿さへ相撲取」、右二章は一座の談笑にして、本より切字の論には及ばず。前章は七兵衛の平懷ををかしがり、後章は殿の字の慇懃を崩す。爰を俳諧の骨折と知るべし。しかるを追善の格といひ、卽興の體といふは、假りに是等の名目より是をもて、それを知らば言語のあそびにして、世法を扱ふ禮式には寬猛の變を知れと也○古今著聞集に、鎌倉前右大將家に東八ケ國のうちすぐりたる大力の相撲出來て云、當時長居に手向ひすべき人覺え候はず、畠山庄司次郎ばかりぞ心憎う候、それとても長居は容易くいかでかひけはとり侍らんと、詞も憚らずいひけり。大將聞き給ひて、此言妬ましう思ひたる折ふし、重忠出で來たり、白水干に葛袴、黃なる衣をぞ着たりける。下略○句解にも此角力の事を云へり○おきな草にも此句見えたり。

此勝負長居が肩をおさへて尻居にへしすゑたり、長居氣絕したりけるが、肩の骨碎け、かたはものに成りてすまひ取る事も叶はざりけるとかや

曾良は腹を病んで伊勢の國
長島といふ所にゆかりあれ
ば先立て行くに「行き〳〵て

曾良は信州下の諏訪の住、名は惣五郎、管弦抄に長島は桑名の向ひ木曾川の邊なり、同抄に雙飛は雙飛の誤なるべし

たふれ伏すとも萩の原」と云

ひ置きたり。行ものゝ悲しみ、

殘るものゝ恨み、双鳧のわか

れて雲に迷ふが如し。予も又

今日よりは書付消さん笠の露

元祿二年の吟なり。此詞書の趣、此紀行に見えたり。句は、けふよりや、と有り○宇陀法師にも、けふよりや、と有りて、疑のやと見えたり○菅菰抄に前漢書に、蘇武が李陵に別るゝ詩に、雙鳧俱北飛。一鳧獨南翔、子當留此館、我當歸故鄕、と此意を取れるなり、雙は音、職にて、說文に鳥一枚なりと云、正字通に凡そ物兩ならざるを隻と云ふ、俗のカタ〳〵と云ふにて、雙の字とは音義別なり。

發句集貞享五年とす

畫讃

西行の草鞋もかゝれ松の露

何れの年の吟にや未知、笈日記大垣の部に畫讃と見えたり○泊船集にも有り○或る行脚の僧の言、松に草鞋の懸りたる圖の讃とす。

西上人の草の庵の跡は奥の

院より谷のかた二町ばかり

分け入る、かのとく〳〵の清

水は昔に變らずと見えて、今

もとく〳〵と雫落る

露とく〳〵こゝろみに浮世すゝがばや

吉野山に西行の庵室の跡並に苔清水有ること貝原が和州順見記に出でたり

貞享元年の秋、吉野行脚の時の句なり。野ざらし紀行に見えたり。其文略す○とく〳〵の句合に「とく〳〵の水招かば來ませ初茶の湯　素堂、自判に曰、西行法師を慕ての句合なれば、第一番に、汲みほす程もなき住居哉、と詠じ給ふ、吉野の奥の苔清水を出されけるにや○五元集に霜月二十七烏侯于黄門光圀之御茶亭題「周山之佳景」とある句の中に「炭屋岩間こかしの清水あとく〳〵と」と云句あり。其角の前書に、西行堂、道のへの清水あはれなり彼法師吉野山に閉てとく〳〵と落つる岩間の苔清水汲みほすほどもなき住居哉と云ひしをよせて、と前書有り○百庵が梅花林藪に、苔清水の歌西行の詠にあらざること前條春の上卷「凍解て筆に汲みほす清水かな」の條下に委し、故に略す○枯尾花の序に貞享初のとしの秋、知利を伴ひ、大和路や吉野の奥も心殘さず「露とく〳〵こゝろみに浮世すゝがばや」○甲子吟行の序に、素堂曰、とく〳〵の水に臨みて洗ふに、塵も無からましを、試みにすゝぎけん、此翁年頃山家集を慕ひて自から粉骨のさも似たるを以て、とりわき心とゝまりぬ。思ふに、伯牙の琴の音、志高山にあれば、峨々と聞え、志、流石にある時は流るゝが如しとかや。我に鍾子期が耳無しといへども、翁のとく〳〵の句を聞けば眼前の岩間をつたふ雫りを見るが如し○或人覺書に初案は「試にうき世すゝがん苔清水」。

一見の浦にて

硯かとひろふやくぼき石の露

何れの年にや無所見○西行一代記に、忝くも天照御神の庭に侍りて、後世菩提の事を祈り申さばやと思ひて、同じくは名に負ふ所なればとて、二見の浦に庵を結びて、と有り○和漢文樣に、西行上人の住み給ふ所は二見の西吹といふ里なり。岩に扇を敷きて文臺とせし其跡今に有りと見えたり○十論爲辨

貞享句集貞享元年とす

抄に、西上人二見の浦にて扇を文臺とせし事西行談抄に有りと見えたり○西行談抄に曰く、西行上人二見浦に草庵を結びて濱荻を折り敷きたる樣にて、あはれなるすまひ、見るもいと心澄むさまなり。大精進菩提の庵の草を坐とし給へりけるも、かくやと覺えき。硯は石のわざとにはあらで、もとより水入る所などくぼみて硯のやうなる、筆置く所などもあるを置かれたり。和歌の會の文臺は或時は花がたみ、或時は扇がやうの物を用ひき。下略。

關越ゆる日は雨降りてみな
雲に隱れたり

霧しぐれ富士を見ぬ日ぞ面白き

貞享元年の吟、野ざらし紀行に、其文に曰、貞享甲子の秋八月江上の破屋を出づるほど、風の聲淒ゐ寒げなり。「野ざらしを心に風のしむ身哉」「秋とゝせかへつて江戸をさす故郷」「關越ゆる日は雨降りて山皆雲に隱れたり」と有りて此句見えたり。しかれば箱根の關なるべし。

朝がほに我は飯くふをとこ哉

天和元年の虛栗に前書和角が蓼螢句と見えたり。其角が句は同集に「草の戸に我は蓼くふ螢哉」と有り○泊船集に此句前書も虛栗と同じ○芙蓉文集に芭蕉より其角に敎訓の書あり。其文に云、飲酒一枚起請、もろこし我朝にもろ〳〵の上戸達の沙汰し申さるゝ酒盛にもあらず、又かちんを喰ひ茶をのみて飲る酒にもあらず、たゝ往生極樂のためには南無阿彌陀佛と申して疑ひなく往生するぞと思ひとりて、一杯飲むより外別の仔細候はず。但三獻四種の肴など申す事の候は、酒宴も決定して珍らしき肴もとめあたると思ふうちにこもり候や、此外に奥則詠集に　道信中將
あさがほを何はかなしと思ふらん人なし花はさこそ見るらめ、
按ずるに法然上人の一枚起請を引直したるなり

深き大盃は二尊の御あはれみにはつれ、本性を失ひ候、九獻を愛せん人はたとひ一代の法を學ばずとも、一文不智愚鈍の身にして、下戸にも常に振舞はせて、唯一向に酒を飲むべし。右飲酒一枚起請は尊朝親王御作のよし承り候、尤さる人の許に御直筆にて掛物にして床にかゝり有之候、あまり〳〵面白き御作故、一寸寫し來候、貴丈常々大酒をせられ候故、此御文句を寫して大酒御無用存候、仍而一句「朝がほに我は飯くふおとこかな　芭蕉」いかゞくはしき事はやがて御目にかゝり萬々可申述候以上、十七日、其角丈　はせを○句解に曰、世は只朝顔の朝な〳〵に起きて物くひ、枕を高うして宵寢する身のいたづらを觀想の句なり。男哉とおける所妙所と云ふべし。袖日記曰「久かたの光長閑けき春の日にしづ心なく花の散るらん」といへる、手爾波を知らざれば此句聞く事難し。口受○去來抄に「朝がほに箒うち敷く男哉　風宅」○魯町云、此句或人の長點なり、如何、去來曰、發句と云はゞいはれんのみ。杜年曰、先師の「朝がほに我は飯くふ男哉」といかなる所に秀拙侍るや。去來曰、先師の句は和角蓼蓋句といへるにて、飽くまで巧みたる句答なり。句の上に事なし、答ふる所に趣あり。風宅が句は前後表裏の見るべき物なし。如何。句は口を開けば出づるものなり。誠に作して見せん、題を出されよ。魯町則ち露と云「露落ちて尻こそばゆき木陰哉」、又菊と云ふ「菊咲いて屋根のかざりや山ばたけ」と、十題言下に賦す。もし孕句の疑もあらん、一題を乞うて十句せん。魯町砧と云「娘より嫁の音弱き砧哉」「乘掛の眠りをさます砧哉」をはじめ、十句筆を置かず。予は蕉門連吟第一の名あるすら此の如し、況んや集にも出でたる先師の句なれば、格別の所ありと知らるべし。此言自分照よふに似たり。然れども當時世間に作者朝顔の句或は「道端のむくげは馬にくはれけり」なども句體のまゝ侍るに迷ひて淺ましき句をはき出して芭蕉流と覺えた

る族あり、其輩に知らせんために是を記し侍る○山家集に「露もありつかへすがへすも思ひ出てひとりぞ見つる朝顔の花」○説叢に句解を難じて曰、たゞいたづらに年月を送る觀想ともいひがたし、又此の如にては男哉といへる所妙處にあらず、朝な〳〵起て飯くひ宵寢するは人情の今日にして、何の妙所ならんや○句解わからずといふべし、予按ずるに此句意は朝顔の花の果敢くもろきに、我はかく息災にて、筋骨も健に生ひて食物もしたゝかにくふ男なりと、果敢なき草の花に對して一層手强き所を取り合せたる十成の俳諧なり、活法尤も凡ならず、微妙の場なり、男といふ字眼なり、世の人は朝顔といへば早くもいや果敢なくも思ふのみ、夫れは古人の涎をなめ且つ糞を拭ふともいひて人の尻馬に乘るといふ人ならめ、翁は却て手强き人を向はせて、作意立凡例にあらず、されば朝顔のなほ〳〵果敢なくぞ見ゆるなるべし、是を句外の餘情ともいふなり○按ずるに、一句の上に事なし、答ふ所に趣旨有りと、去來抄にあれば、其角は我が句人知らず、我を知るものは時鳥などいひて、人並ならぬ氣象有り、されば我は草の戸に蟄くふ蚤哉と云へるを、芭蕉は我は朝顔に飯をくふ男哉と、只、今日の上をいふ、此答に趣き有るにや、又其角は酒を好み、芭蕉は下戸にて酒を好まず、是面々其の稟けたる性質、まして莊子齊物論にも民食芻豢、麋鹿食薦、蝍蛆甘帶、鴟鴉耆鼠、四者孰知正味、とも見えたり、又投子一椀の茶の平生の善なるをも考ふべきか。

朝がほは酒もりしらぬさかり哉

貞享五年の中夏美濃國岐阜の住落梧に與ふる十八樓の記は笈日記に見えたり、其記の次に曰、其年の秋ならん、此國より旅立ちて更科の月見んとて留別四句「送られつおくりつはては木曾の秋」「草いろ〳〵おの〳〵花の手柄かな」人々郊外に送

壬生二品上
人しれずかくるゝくひや我袖にくちぶの山の谷の埋木
風雅集　中務
匂ふ香のしるべならずば梅の花くちぶの山になりまどはまし

り出て三盃を傾け侍る「朝かほは酒もりしらぬさかり哉」ひよろ〳〵とこけて露けし女郎花」貞享五年更級紀行笈の小文に見えて、女郎花、送られつ等の句は見えて、此朝顔の句見えず○嬉野集にも見えたり。

閉關

朝がほや晝は錠おろす門の垣

元祿六年の句なるべし。元祿七年の炭俵にあり○風俗文選に閉關の説に、色は君子の惡む所にして、佛も五戒のはじめにおくといへども、さすがに捨てがたく情のあやにくにあはれなるかた〳〵も多かるべし。人知れぬくらぶの山の梅の下臥しに思ひの外の匂ひにしみて、忍ぶの岡の人目の關も守る人なくは、いかなるあやまちをか仕出でん。あまの子の波枕に袖しほれて、家をうり身を失ふためしも多かれど、老の身の行末を

古今集
うめの花匂ふ春べはくちぶ山やみに越ゆれど著くぞありける
杜律に
人生七十古來稀、
つれ〳〵草
しのぶの浦のあまのみるめも所せく、くちぶの山の守る人しげからんに、わりなく通はん心の色こそ淺からず哀とおもふふし〳〵の忘れ難き事多かるべし下略、
山家集に
とふ人もおもひ入りたる山里のさびしさなくば住みうからまし、
蒙求に
孫敬閉門、
杜五郎は大和國の隱者なり。雨中友と云ふ書に出でたり

むさぶり、米錢の中に魂を苦めて、物の情をわきまへざるには遙かにまして罪ゆりぬべく、人生七十を稀なりとして、身の盛なる事は僅に二十餘年なり。はじめの老の來たれる事一夜の夢の如し。五十年六十年の齡ひかたぶくより、あさましうくづれて、宵寢がちに朝起したる寢覺の分別、何事をかむさぶる。思かなる者は思ふ事多し。煩惱增長して一蕊すぐるゝものは是非の勝るものなり。是をも世のいとなみにあてゝ、貪欲の魔界に心を怒らし、溝洫におぼれて生かす事能はずと南華老仙の唯利害を破却し老若を忘れて閑にならんこそ老の樂とはいふべけれ。人來れば無用の辨あり。出でゝは他の家業を妨ぐるもうし。孫敬が戸を閉ぢて、杜五郎が門を鎖さんには、友なきを友とし、貧を富として、五十年の頑夫自書みづから禁戒とす「朝顔や晝は錠おろす門の垣」芭蕉○按ずるに芭蕉翁五十一歳にして元祿七年難波の旅店に歿す。閉關の説に五十年の

頑夫と見ゆれば此説元祿六年ならんか。枯尾花の序に、華やかなる春は頭重く、眼濁りて心うし。泉石冷々たる納涼の地は殊に濕氣をうけて夜も寢られず朝むつけたり。秋はたゝ悲びを添へて腸をつかむばかりなり「ともかくもならでや雪の枯尾花」と無常閉關の折々はとぶらふ人も便なく、立歸りて、今年就中老衰なりと歎きあへり。下略○芙蓉文集に、芭蕉より山水へ文通あり。こなたよりも愚墨進覽の處、其元よりの預御音問辱對顔の心地にて拜見仕候、愈御堅固被成御座候旨千萬目出度奉存候、竹助殿御沙汰いづれの御狀にも不被仰下候、御成人わるさ日々に募り可申奉存候、歳旦三物の事は先書申上候愚句御感心のよし珍積より被告候、年々は口にまかせ心に浮ぶ計に申捨て候へども、もはや是を歳旦の名殘にもやと存候て、少しは情を出し申候所、御耳に留り候へば、甲斐ある心地せられて、悦びに堪へず候。一、幻住庵上葛被仰付候由珍重奉存候、浮世の沙汰少々遠きは此山の事折々の寢覺難忘、露命取つゝき候はゝ、二たび薄雪の曙をと被存候、一、風雅の道筋大かた世上三等に相見え候、盡夜を盡し勝負を爭ひ、道を見ずして走り廻る者あり、彼等は風雅のうろたへものに似申候得共、點者の妻子の腹をふくらし、店主に金箱を賑し候へば、僻事せんには增りたるべし、又其身富貴にして目に立つ慰は世上を憚り、人事いはんにはしかじと、日夜二卷三卷點取り勝ちたる者も誇らず、負けたるものも强ひて怒らず、いざ今一卷など又とりかゝり、線香五分の間に工夫をめぐらし、事終りて卽點など興ずる事ども、ひとへに少年のよみがるたにひとし、されども料理を整へ酒を飽くまでにして、貧なる者をたすけ、點者を肥えしむる事、是又道の建立の一筋なるべきか。又志をつとめ情を慰め、あながちに是非をとらず、是より實の道にも入るべき器なりなど、遙かに定家の骨をさぐり、西行の筋をたどり、樂天が腸を

あらひ、杜子が方寸に入るべきやから、わづかに都鄙にかぞへて十の指をふさず、君も則ち此等の指たるべし、能く〳〵御つつしみ御修行御尤奉存候。一、路通事は大坂にて還俗いたしたるものと推量いたし候、其志三年以前より見え來りたる事に候へば、驚くに足らず候、とても西行能因が眞似はなるまじく候へば、平生の人にて御座候、常の人の常の事をなすに何の不審か可有御坐候や、於拙者は不通仕るまじく候、俗成候て成りとも、風雅のたすけになり候はんは、昔の乞食よりは増り可申候、曲水樣　はせを、と見えたり。此書の奥書に、東花坊云、此書は元祿のはじめ壬申の年癸酉の年ならん。壬申歳旦に「人も見ぬ春やかゞみのうらの梅」、癸酉歳旦「年々や猿に着せたる猿の面」、坊かつてうけたまはりぬ、壬申の歳旦には乘桴の歎息ありて、武の深川にあとを隠せしとや。しかれば書面に名殘の詞有りて甲斐ある心地など聞ゆ。是は決して鋭の梅なるべしと有り○按ずるに閉關の意、枯尾花の序幷に此書備支考奥書にて可察にや。

嵐雪が繪書きしに讃望みければ

朝がほは下手の書くさへあはれなり

元祿三年の俳番匠に前書ともかくの如く見えたり○泊船集にも見えたり。

二上山當麻寺へ詣で、庭上の松を見るに、凡千とせも經たるならん、大かた非情といへども佛縁にひかれて、斧斤の罪をまぬかれたるぞ幸にし

て尊し

僧朝顔いく死かへりのりの松

貞享元年野ざらし紀行の句にして、前書ともかくの如く見えたり。されども大同小異あり。大いさ牛を隠すとも云ふべけん、かれ非情といへども、と見えたり○和州巡覽記に、當麻寺は又禪林寺と云ふ。用明帝第四皇子麻呂子親王の建立也。二上ヶ嶽の下、まりこ山の麓にあり。寺は南に向けり。本尊は觀音なり。本堂の下に大きなる松あり、根南北に長して東になし、怪松なり。

白露をこぼさぬ萩のうねり哉

元祿六七年の句なるか。三上吟集に「白露もこぼさぬ萩のうねり哉」とからびたるあらましを書贊してたうびける。七とせ先の書畫を見ぬ世の友と思ひなして「繪ごころのしはめるさま

尊吟は芭蕉門人の僧な

り、句選拾遺に餞別の辭芭蕉の文有り

續虛栗貞享四年選
鹿島詣眞蹟當陸國小川里自準家に有り、
蓋工自準道節
俗名本間道意、風俗文選にも此紀行あり、
鹿島詣の眞蹟今は江戸松頼蕉所持

や枇杷の花　尊吟と有り○按ずるに此三上吟は芭蕉七回忌の句なり。依てたゞ七とせ先の書畫といへるにや。されども書てもらひたるはいづれに六年か七年かなるべし。さもなくては此文面白からず。一句の上も其頃の句姿に聞ゆ○類柑子に自畫贊と有りて、白菊も、と見えたり○鳩の水には、月かげを、と五文字あり。

萩はらや一夜はやどせ山の犬

貞享四年鹿島詣の吟にして其紀行に有り○續みなし栗にも見えたり○泊船集にも同じく見えて、此句續虛栗の頃なり。又「狼も一夜はやどせ萩がもと」とかやうにも聞え侍りけり。笈日記には、蓋がもと、と有り○笈日記桑名の部に「狼も一夜はやどせ蓋のもと」阿叟の吟なるよし、漂泊の間なるべしと見えたり○按ずるに鹿島詣の内に見えたれば、桑名とおもへる笈日記

誤れるや。句も盧栗と鹿島詣同じければ、旁鹿島詣の方しかるべきか○按ずるに狼豺兩案ある事は、其物には論有るべからず。臥猪の床など云へる事の有るに、豺狼のおそろしきも是には一夜やどせとや。

加賀の小松にて

ぬれて行く人もおかしや雨の萩

何れの年の吟にや未だ知らず。泊船集に前書もかくの如く見えたり○按ずるに元祿二年の奥羽行脚より加賀に到り、小松といふ所にて「しほらしき名や小松ふく萩すゝき」の吟あり。小松にて萩の吟二度有りしにや。疑らくは此奥の細道の時の吟ならんにや○雪丸に、凱水亭雨中會、と有りて此句次に「こゝろせよ下駄のひゞきも萩の露　曾良」「かまきりや引こほしたる萩の露　北枝」と見えたり。

雪丸は曾良が延宝頃の集なり

元祿八年如行選後旅集に百ケ日會先年越より拾ひ來りて分け置かれし手元のしたはしくて梅が香にさらす眞蘇枋の小貝哉　洞口

菅菰抄に天屋家號は今も敦賀の町に多し、其中に今俳名大翅といふものゝ祖父祖が濱へ翁を伴ひたりと云ひ傳ふ、八重垣にある所菅菰抄

小はぎ散れますほの小貝小さかづき

何れの年の吟にや不知。泊船集に見えたり。按ずるに元祿二年紀行奥の細道に、越前遊杖の文に曰、ますほの小貝拾はんと種の濱に舟を走す。海上七里あり。天屋何某と云ふもの、破籠小竹筒などこまやかにしたゝめさせ、僕あまた舟に取乘せて、追風時のまに吹著きぬ。濱はわづかなる海士の小家にて、侘しき法華寺あり。爰に茶をのみ酒をあたゝめて、夕暮のさびしさ感に堪へたり「寂しさや須磨にかちたる濱の秋」「浪の間や小貝にまじる萩の聲」○按ずるに此文にますほの小貝の事をいひ、又句にも小貝に萩のとり合せ、小盃といへるも、天屋何某が法華寺にひらきたるうつりを考ふれば、此時此句有りけるにや○菅菰抄にますほの小貝は假名の誤りなり。ますうと書くべし。眞蘇枋といふ事にて、貝の色の赤き事まことの蘇枋の如しとい

にいへると同じしかれども貝の事にあらず、ますうの蹄と二つとも海の蹄なり

山家集にますをと有り、ますうは赤き蘇木の如きを云此歌に、汐の間に、と上五字あり

ふ心なり。ますほは十寸穂と書き、草の穂の長きをいふ。ますほの薄是なり、泥ずべからず。其貝は皆うつせ貝にて（みのなき貝を云ふ）朱貝、紅貝、山椒貝などいふ類の赤き貝をますう貝と云ふなり。西行の「汐そむるますうの小貝ひろふとて色の濱とはいふにや有らん」とよめるは此處の事にて、色のはまは則ち種が濱を云ふ。敦賀の入海の末、あら海の出崎なり○無名抄にますほの薄、ますをの薄ますうの薄とて、三くさ侍るなり。ますほの薄といふは穂長くて壹尺ばかりあるを云ふ。かのます鏡を、萬葉に十寸鏡と書けるにて心得べし。ますをのすゝきといふは眞麻の心。下略。

素堂の母七十餘り七としの秋七月七日ことぶきする、萬葉の七種をもて題とす、是に

つらなるもの七人、此結縁になれておのゝ〳〵又七叟のよはひにならふ

七株の萩の手もとやほしの秋

何れの年にやいまだ其集を得ず。是は秋の七種といへる小集有りし由、通天橋に見えたり○酌塞に前書かく見えて「七種の萩の手もとや星の秋　芭蕉」「織姫に老の花ある尾花哉　嵐蘭」「布に煮て餘りをさかふ葛の花　沾德」「動きなき岩なでしこや星の床　曾良」「けふ星の賀にあふはなや女郎花　杉風」「蘭の香にはなひ侍らん星の妻　其角」むかし此旧家隆卿の七そぢなゝのと詠じ給ふはみづからを祝ふなるべし。今我が母のまはひのあひあふ事をことぶきて、尙九そぢ餘り九つの重陽をも

通天橋は素堂道養集酌塞は元祿九年李由許六選

重ねまはしく思ふ事しかなり「めでたさや星の一夜も朝顔も

素堂」「通天橋には「七株の萩の手もとや星の緣　芭蕉」とありて、鈞塞と違ひ、句を解するにたより有り。杉風が句は鈞に同じ。又其角が句は「星の夜にはなひ紐とく藤ばかま」是は又鈞塞の方解き易し。又沾德句はあまりぞさかふ、と有りて「お」と有るより手爾波聞きよし。又嵐蘭が句は「松江の艫灘の露の星を釣る」と有りて、鈞塞の句よりいかめしくて、天和の頃の句調に聞ゆ。又曾良が句は鈞に同じ。素堂句は「蕣は朝な〳〵の御製哉」と有りて、是は後水尾帝の「朝がほはあさな〳〵に咲きかへて盛り久しき花にぞ有りける」の心なれば、賀にもよしといへども、前書もあれば鈞塞の方も又御製の心をこめて賀の句にも成り侍らん。かくまち〳〵なれば、いづれをか質とせん○七叟の事扶桑隱逸傳に曰、七叟は皆不知姓字なり、老翁七人、形甚憔悴、相聚嘆徒衰老共作和歌示志、下略○萬葉集第八「秋の野に咲きたる花を手に折りてかきかぞふれば七種の花」「はぎの花をばな葛花なでしこの花姫部志又ふぢばかまあさがほの花」

波の間に小貝にまじる萩の塵

元祿二年の吟にして、奥の細道に八月十日の吟なり、事は前條小萩散れの句の所に委し。句は細道に、波の間や、と有り○類柑子に、ますほの小貝ひろはんと種が濱に舟乘り出たり、法華寺に上りて酒のむ、と有りて、波の間や、と有り。

一家に遊女も寢たり萩と月

元祿二年の奥羽行脚越後にての吟にして、奥の細道の文に、親しらず、子しらず、犬もどり、駒返などゝいふ北國一の難所を越えて疲侍れば、枕引よせて寢たるに、一間隔てゝ西の方に若き女の聲二人ばかりと聞ゆ。年老いたるをのこの聲も交りて物

遊女は宝、江口、神崎などに有りて皆泊舟にかよひて人をなぐさむるもの故に、和歌にも其心をよみならはせり神崎、江口などみな湊なり、新潟も越後の海邊の町なり

語りするを聞けば、越後國新潟と云ふ所の遊女成りし、伊勢參宮するとて、此關までをのこ送りて、あすは古郷にかへす文したゝめて、はかなき言傳などしやるなり。白浪のよする汀に身をはふらかし、あまのこの世をあさましう下りて、定めなき契日々の業因いかにつたなしと物言ふをきゝ〳〵寢入りて、あした旅立つに我々にむかひて、行方しらぬ旅路のうさあまり覺束なう悲しく侍れば、見えかくれにも御跡をしたひ侍らん。衣の御情に大慈のめぐみを垂れて、結緣せさせ給へと、涙を落す。不便の事には侍れども、我々は所々にてとまる方おほし。只人の行くにまかせて行くべし、神明の加護必ず悲なかるべしと云ひ捨てゝ出づ。哀れさしばらくやまざりけらし、と有りて此句見えたり○菅菰抄に云、白浪のよする汀とは古今に白浪のはする汀に世をすぐすあまの子なれば宿もさだめず　讀人しらず、此歌を取りてうかれ女の名によせ申されし戒るべ

宿鄙州

涼しやと草むらごとに

しばふらかしはおちぶるゝ事なりと、徒然草の抄に見えたり。按ずるに雀の字にて、省略の意により落魄の事とするか。あまのこの世は則ち海士の子の言ひかけなり。業因は前世にてなしたるわざを此世へ引來たるをいふ。撰集抄に行平の事前條にも記し有之、依之略す○此句雪丸にも出でたり○或本に、萩に鹿、ともあり○白氏文集に夜聞歌者詩に夜泊鸚鵡洲、秋江月澄徹、鄰船有歌者、發調堪愁絶、歌罷繼以泣、泣聲通復咽、尋聲見其人、有婦顏如雪、獨倚帆樯立、嫂婷十七八、夜淚如眞珠、雙々墮明月、借問誰家婦、歌泣何凄切、一問一霑襟、低眉終不說。

小松といふ所にて

しほらしき名や小松ふく萩すゝき

元祿二年加賀國小松にての吟なり。奥の細道に、小松といふ所にて、と前書有り○雪丸に、北國行脚の時何れの野にや侍りけ

立ち寄れば暑さぞまさるとこなつの花

ん、暑さぞまさると咏み侍りし、なでしこの花さへ盛り過ぎ行く比、萩すゝきに風の渡りしを力に、旅の愁をなぐさめ侍る、と有りて此句見えたり○或曰、小松ぶしなり、小唄の名なりと○按ずるに此説いかに侍るべき。雪丸の詞書、風姿を云へるか。

ひよろ〳〵と猶露けしや女郎花

貞享五年秋尾張より信州へ行脚の紀行の中に見えたり○笈日記大垣の部に十八楼の記ありて、其末に留別四句の内の句なり。蕣は酒盛しらぬの句の所に記す。よつて畧す○按ずるに、句は、猶露けしや、と、こけて露けし、と替り侍れど、いよ〳〵貞享五年の句にて途中の眼前なるべし○泊船集にも、尚露けし、とあり○曠野も、尚露けしや、と見えたり○按ずるに句選の頭書に、ひよろ〳〵、とあるはいまだ見あたらず○句解に曰、續古今集に、何事をしのぶの岡のをみなへしおもひしをれて露けかるらん、○續五論に、旅は風雅のやつれなれば、旅の情見る事かたからん、たま〳〵風雅にやつれたる人もおのれが觀想にのみ落入りて、一句のすがたしづむに近し。吾が翁の、ひよろ〳〵とこけて、といへるも、足縦横に踏んで伊達の大木戸を越ゆると有るも、其人を思へば皆尊し○山家集に、今朝見れば露のすがるに折ふして起きもあがらぬをみなへし哉、折りぬより袖ぞぬれける女郎花露むすぼれてたてるけしきに、説叢に句解を難じて云、引歌是に限るべからず。いかほども古歌を引合さば有りもせんずれども、前に論せし如く翁句を吟ずる毎に必ず古歌をつまんとの念もなかるべし。折にふれ時に乘じては自然と叶ふも有るべし。女郎花に露けしとは古歌知らずとも解すべき詞なり。一句の粉骨の處を專評して可ならん。此句はひよろ〳〵の五文字の形容粉骨なり。此草の立ち延びて、花はふさ〳〵と重げにあるが、莖の疲せてかぼそきさま、實にもひ

よろ〳〵の姿盡せりといふべし。されや俳諧に遊ぶ人は一木一草をもあだに見過さずとかや。常に心を用ひざれば誤り多し。外の草にふれざる處、五文字の百線にあり。笈日記岐阜の部留別四句の内にも、こけて露けし、と見えたり。句選には、よろ〳〵とこけて露けし、と見えたり。よろ〳〵もたよわきさまにて、是又こけて露けしと穩なり。いづれも句意を害さねば好むかたにしたがふべし。今はさま〳〵向上の人出で是に決せり、彼はあやまりなど云へども、手前勝手の說々にして、句意をだに害せずば、どちらもおなじ風流なるべきなり。七十余年前の事、當め極むとも僻事なるべし。

玉川の水におぼれそ女郎花

いまだ其年を知らず○むかし女郎花といふ女小野頼風に契りしが、さはれる事ありて別れける。女うらみの餘り、放生川に身を投ぐる。頼風聞きて墳を築き、其後頼風も同じく身を投げむなしく成る。八幡山の麓女夫塚是なり。

ばせを野分して盥に雨を聞く夜哉

天和二年の武藏曲に、茅舍の感、と前書有りて此句芭蕉と見えたり○枯尾花集に芭蕉終焉の記あり。曰く、天和三年の冬、深川の草庵急火にかこまれ湖にひたり、苦をかつぎて煙のうちに生のびけん、是ぞ玉の緒のはかなき初めなり。爰に猶如火宅の變を悟り、無所住の心を發して、其次の年夏の半に甲斐が根にくらして富士の雪のみつれなければ、と、それより三更月下入ル無我ニ、といひけん昔の跡に立歸りおはしければ、人々うれしくて、燒原の舊草に庵をむすび、しばしも心とゞまる詠にもとて、一かぶの芭蕉を植ゑたり。雨中吟「芭蕉野分して盥に雨を聞く夜哉」と佗びられしが、堪閑の友しげく通ひて、おのづから芭蕉

翁とよぶことになん成りぬ。下略○按ずるに天和三年深川の庵燒亡、其次の年天和四年は貞享元年改元の年なり。其年深川に立歸り、庵に芭蕉を植ゑて此句有りと見る時は、此句貞享元年なり。然れどもはや天和二年の武藏曲に此句見えたれば、其角が書けるはたゝ其文章にて、天和二年にもせよ、其文の友のしげきをみんが爲に是を書けるにや○嵐蘭抄に、芭蕉傳には深川の六間堀といふ處に庵をまうけ、天和二年まで在住ありしに此間七ヶ年三十九年其冬回祿の災にあひて、しばらく甲州に赴き、彼國にて年をこえ、翌三年夏の末ならんか、深川の舊地に歸り、燒草の露をはらひ、芭蕉一もとを植ゑて「ばせを野分して盥に雨をきく夜哉」の吟あり。此句よりして住所を芭蕉庵と名づけ、人人も芭蕉の翁とは稱しけるとぞ見えたり○按ずるに傳記又天和三年の吟とす。其角桐雨共にたがひあるを見れば、いづれ慥ならねども、天和二年の選集に此句あれば天和二年とすべきなり○泊船集にも此句見えたり○赤草紙に、はじめは、野分して、と二字餘りなり、後になしかへられ侍るか。此類尙有るべし。皆翁の心の動きなり。味ふべし○說叢に曰、此句檀林の頃の吟にして、最初は、芭蕉野分して、といふ冠詞成りしが、後に、芭蕉を取捨てられしとかや。荒屋のさまいはんかたなし。五雜組曰、凄風苦雨之夜、擁寒燈讀書、時聞紙窓外、芭蕉淅瀝作聲亦有致、此處理會得過更無不堪情景、とかゝる事を聞き及び見及び置きて吟じ出されけんも知るべからず。和漢古今人情の感ずる所一毫も私なし。是なども彼好事者に見せば、はやしたり顏に書き出し、是に寄るか、是に叶へるかなどいはん。されば芭蕉野分しての冠詞も、また此語の血脈とも見え侍るにやと思はれ侍りぬ。三考に芭蕉野分して、御廟年經ても、狂句木がらしの身は、如此の類、三四章も有り。是序詞を加へて句となる一體、序句の法とも云ふべし○和漢文樣に、芭蕉野分して盥に雨をきく夜

哉、と、其世に響きたる發句にて、芭蕉の庵號も此時よりとなり。

船となり帆となる風の芭蕉哉

移徙抄は元祿五年御風選なり、此者播州住の僧なり、檀林の一派なり、淡々曰鶴樹門の御風に非ず

此句泊船集に翁の製なりとある人申されし、實否は知らずと見えたり○句解に一品が句なりとあり○按ずるに移徙抄といへる書に「船になり帆になる風の芭蕉かな　一品」とあり○或曰、京師の門人何某許へ送られし文の端に、深川の草庵も訪ひ來る人ありてやかまし、など書きて此吟あり。自筆の書通支考持つたへて後、雲裡にさづく。雲裡又仙臺の季桃といふもの に與ふ。桃同じ城下の何某に讓りて、其家に傳ふ○北平所持の其書翰に、飛脚使者申入候、過ぎし頃はこま〳〵との御受被下忝存候。彌御別條も有之間敷と押斗り存候、此許愚老無事居り申候、然ば此四五日已前與風此句いたし候故申上候「船になり帆になる風の芭蕉哉」石海風にて寺の芭蕉見ていたし候いか

守榮院は伊勢山田桜の路と云ふ所に有り寺は淨土宗にて名高き蘓鐵あり此所のならはせ路の字なセコとよむなり

かゝ可有、其許御連中へもよろしくたのみ入候、立ながら認め候故、あら〳〵申殘候、巳上、二十八日老草丈　桃青、とあり。

守榮院

門に入れば蘇鐵に蘭の匂ひ哉

貞享五年の吟にや、笈日記伊勢の部に、貞享の間なるべし。此國に抖擻ありし時「何の木の花とも知らずにほひ哉」の吟、其外「神垣やおもひもかけず」の句、或は「藪椿門は葎」の句ありて此句見えたり。此年の秋名古屋に滯留ありて、夫より更科に遊杖なれば其逗留の間にや○泊船集にもあり。しかし、蘭に蘓鐵の匂ひ哉と誤れり。

てうといへる女あが名に發

句せよと云ひて白き絹出し

四行谷、伊勢二見の浦に上人庵室住居の事一代記に見えたり

左傳宣三年
又蘆二十八年

けるに書付け侍る

蘭の香や蝶のつばさに薫す

貞享元年秋八月東武を立ちて野ざらし紀行あり。其文に云、西行谷の麓に流れあり、女共の芋洗ふを見るに「芋洗ふ女西行ならば歌よまん」其日のかへさ、或茶店に立寄りけるに、てうと云ひける女あが名に發句せよと白き絹を出しけるに書付け侍る、とありて此句見えたり○笈日記伊勢の部に美人の圖とあり○眞蹟集にも見えたり○赤草紙に此句はある茶店のかたはらに道やすらひして佇みありしを、老翁を見知り侍るにや、内に請じ、家女料紙持出で句を願ふ。其女の云、我は此家の遊女なりしを、今はあるじの妻になし侍るなり。先のあるじも鶴といふ遊女を妻とし、其頃難波の宗因此所に渡り給ふを見かけて句を願ひ請ひたるとなり、例をかしき事迄いひ出でしきりに望み侍れば、いなみがたくて、かの難波の老人の句に「葛の葉のおつるか恨み夜の霜」といふ句を前書にして、此句を遣はし侍るとの物語也。其名をてふといへばかくいひ侍ると也。老人の例に任せて書捨てたる、さのみの事も待らざればなしがたき事なりと云へり○徒然草に、世の人の心まどはす事色欲にはしかず。人の心はおろかなるものかな。句ひなどはかりのものなるに、しばらく衣裳にたきものすと知りながら、得ならぬ句ひには必ず心ときめきするものなり。久米の仙人は物洗ふ女の脛の白きを見て通を失ひけんは、まことに手足はだへなどのきよらかに肥えあぶらつきたらんは外の色ならねばさもあらんかし。

草いろ〳〵おの〳〵花の手柄哉

貞享五年の吟なり。笈日記岐阜の部に、留別四句の内朝顔は酒

盛しらぬの所に委し。依て略す○評林に古今物名の歌「みどりなる二葉草とて春は見し秋はいろ〳〵の花にぞありける」此歌によるなるべし○按ずるに古今集秋の部に、題知らず、よみ人しらず「みどりなるひとつ草葉と春は見し秋は色々の花にぞありける」物の名にはあらず、二葉草も違へり。

雞頭や雁の來る時猶赤し

元祿七年の續猿蓑に見えたり○泊船集に畫讃とあり○按ずるに大和本草雞冠とあり。又老少年雁來紅なり。九月其葉鮮紅一種六月葉紅なる物を十樣錦と名づく。本草青箱子の附錄に有り。此草は花なしといへども、其葉紅色にして花の如し。雞冠の類なり○わくかせわに雁來紅老少年と云ふ。葉鷄頭なり○伊勢物語の歌幷に聯珠詩格の詩略す。不當。

霧雨の空を芙蓉の天氣かな

或曰此句は宗房の時分の吟なりと

發句集に元祿二年の句とす

或人曰細川春庵俳名棟雪、今家業して眞蹟所持

年末知、韵塞又泊船集にも出でたり。

越後國高田何某にやどりて

藥園のいづれの花を草まくら

何年の吟にや、元祿二年の秋、越後の國に行脚の事、奥の細道に見えたれども、此句は見えず。泊船集に越後國高田の醫師何某を宿として、と前書あり○信丈坊が俳諧衆義に、越の高田なる醫師の許にて「藥欄にいづれの花を草まくら　蒭萩の籬をあけかける月　驚雪」と見えたり○發句集に高田醫師細川春庵にて、句は、藥欄に、と出でたり○按ずるに泊船集には藥園とあり、衆義には藥欄とあり、藥欄は其出所知らず。碧巖三十六舉、僧問、雲如何清淨法身門、云、花藥欄、僧使恁麼去時如何、云金毛獅子○雪丸に、細川春庵亭にて、と有て、句は、藥園、と見えて、脇「萩の籬を明けかける月　棟雪、爐けふりの夕を秋のいぶせくて　曾

良」にて、四句見えたり。されば元祿二年の吟ならん。

畫讃

枝ぶりの日に〳〵かはる芙蓉哉

元祿のはじめの句にや。後走集に「枝ぶりの日ごとにかはる芙蓉哉」此句自畫の芙蓉の讃に見えたり。元祿のはじめの吟なるべし、と見えたり○泊船集に、彦根談集に、日に〳〵、とあり。尤も畫讃○師走袋に畫賛と有り、定めて傾城か冶郎などの浮世繪の賛なるべし。芙蓉の花は一なれども枝ぶりの毎日〳〵代るよと、日毎に代る客の戯れにたとへたる趣向なるべし。

後醍醐帝の御陵を拜む

御廟年を經てしのぶは何を葱ぐさ

貞享元年芳野行脚の吟なり。野ざらし紀行に前書も此の如く

後走集は蹤後日田と云へる片山里の住、炎拙元祿十一年の選なり、風國序あり、彦根談は許六正德二年の選なり

續後撰集

順德院は承久三年讓位、しのぶは古き屋根などに生ふる草に似たる草なり、今いふしのぶにはあらず、伊勢物語にしのぶか草かと問ひたる事あり、似たる物にあらでは問ふまじ、又百敷は百官座を敷く故と云ふは俗說なり百官と定まりたるは孝德天皇より始まる事職原抄に見えたり、是より以前日本紀の歌のうちにも百敷の大宮人と賦す按ずるに宮居は大きなる物故百石木の大宮といふ事なりと、

出でたり○按ずるに百人一首抄に順德院御製「もゝ敷やふるき軒端のしのぶにもなほあまりある昔なりけり」百官座をしくゆゑに禁中を百敷といふ、末の世になればむかしを忍ぶはならひなれども、誠に五道衰へて一身の御上ならず、天下萬民の爲と思召す故なれば、上古のしのばしき事は中々いうてもいうてもあまりあり、昔を戀ひしのぶことたへぬと遊ばされたり、と見えたり○按ずるに此御製のしのぶを思ひ出て、帝王の御廟なればかく作れるにや○孤松集には前書、於吉野天皇の廟にまうで〳〵、とありて、此句上五文字、御廟千とせ、と見えたり○撰集抄に、新院の御墓所を拜み奉らんとて白峯といふ所に尋ね參り侍りしに、松の一むらしげれるほどにくきぬきし廻したり、是ならん御墓にやと、今更かきくらされて物もおぼえず、まのあたり見奉る事ぞかし、淸涼紫宸の間にやすみし給うて、百官にいつかれさせ、後宮後房のうてなには三十の花翠

のかんざしあざやかにて、御まなじりにかゝらんとのみしあはせ給ひしぞかし。萬機のまつりごとを掌に握らせ給ふのみにあらず、春は花の宴を專らにし、秋は月の前の興盡きせず侍りき。豈思ひきや今かゝるべしとは。かけて、もはかりきや、他國邊土の山中のおどろの下に朽ち給ふべしとは。貝鐘の聲せず法華三昧つとむる僧一人もなき所に、たゞ峰に松風の烈しきのみにて、鳥だにもかけらぬ有さま、見奉るに坐ろに涙を落し侍りき。始めあるものは終りありとは聞き侍りしかども、未だかゝるためしを承り侍らず。されば、おもひをといむまじきは此世なり。一天の君萬乘のあるじもしかの如くの苦みをはなれまし〳〵侍らねば、刹利も須陀もかはらず、官も藥屋もともにはてしなきものなれば、高位もねがはしきにあらず。我等もいくたびか彼國王ともなり給ひけんなれども、隔生卽忘して、すべておぼえ侍らず。たゞ行きてとゞまりはつべき佛果圓滿の位のみぞ床しく侍る、とにもかくにも思ひつゞくるまゝに涙のもれはて侍りしかば「よしや君むかしの玉の床とてもかゝらん後は何にかはせん」とうちながめられて侍りき。

鬼灯は實も葉も売も紅葉かな

何年の吟にや知らず。小文庫に見えたり○泊船集にもあり○萬葉集に「たちばなは實さへ花さへその葉さへ枝に霜ふれどいや常葉の木」

青くても有るべきものを唐がらし

元祿五年の吟なり。深川集に壬申九月に江戸へ下り、芭蕉庵に越年して、今年きさらぎの初洛にのぼりて風呂敷をとくと、洒堂が序有りて、深川夜遊と前書して此の句あり「提げておもたき秋の新鍬」　洒堂、暮の月槻のこつば片寄せて　嵐蘭「脇第三

ありて、岱水共に四吟の歌仙見えたり○むつちどりにもあり○古今抄のをまはしも公式の中の一名となして今の語句をあぐべきにや、たとへば、とありて此句見えたり、又庭の唐辛にも色さへ秋のくれなゐを稱し、下略。　山家集に「くれなゐのいろなりながら蓼の穂のからしや人の目にもたてぬは」。

無名庵

草の戸をしれや穂蓼に唐がらし

元祿三年の秋ならん、木曾塚薔薇にありて、蔽戸の人々に對す、と詞書ありて、笈日記湖南の部に見えたり。

道のべの木槿は馬にくはれけり

貞享元年の吟なり。野ざらし紀行に有り。此行脚秋八月東武を旅立ちて、大井川を越えて、旅中の吟、と見えたり、眼前とあり○

羊蹄、無倫門後沾洲門

伊達衣には、馬の食ひにけり、とあり○秘問集には句選の通りにて、其場其時の自然なり。唯正直にして更に曲なし。我に風雅の位ある時は、たとひ士は奴にせらるゝとも、其君をうらみず。變化の俳諧にしてしかも忠戰を守るといふべし○羊蹄曰「道のべのばたのむくげは馬にくはれけり」とあるは誤りなり「道のべの木槿は馬に食はれたり」滑稽傳に見えたりといへり。滑稽傳に談林を見破りて初めて正風體を見屆け、躬恒貫之の本情を探りてはじめて「道のべのむくげは馬にくはれたり」と申されたり○甲子紀行に、素堂の序有りて、文に曰、山路來てすみれ、道ばたのむくげこそ此吟行の秀逸なるべけれ。下略、と見えて、句は道のべ、とありて、下も、食はれけり、とあり○眞蹟集にも此通り見えたり。滑稽傳にのみ、食はれたり、とあり。外多分、食はれけり、と見えたり○評林に曰「とりつなげまくずかた野の放れ駒つつじがたけにあせび花咲く」あせびは馬酔木と書きて、馬の毒

なれば、道中につなぐとも心をつけよとなり。木槿も道ばたに咲く故にこそ人にも折られ馬にも食はるれ。たゝ出る杭のうたるゝといふいましめなるべし。馬醉木の事は下學抄に見ゆ。尋ぬべし○按ずるにあせびの歌さまで用なきにや。又羊素が評句は佞を好むか○去來抄に、道ばた、とありけり、と有りて、句體のまし侍るに迷ひて、淺ましき句を吐出し、芭蕉流とおぼえたる族有り○或問珍に、道ばた、と有り○師走袋に此句は木槿を朝顔となして、午時の日にしをれしは馬にくはれしよとの作意妙なり。此句面に深意あらはれざれば芳山が曉山集にも此句を載せて「路邊の柳は馬に食はれたり」と云へる、句には非す、一向野卑の雜言なりと譏れるも、ひとへに芭蕉の上戯弄を深く悟らざるなり○說叢に師走袋を歎じて、甚邪妄不可信用木槿を朝がほとなしてといふは心得ず。牽牛子は一時に榮え木槿は一日の榮えと古人も申されし、似て似ぬものなり。ましてや草と木との差別も有るをや。又日に凋みしを馬に食はれしとは例の無理無體の邪智也。かくあればとて何の妙なる事あらんや。此注こそ奇妙なる無理とやいはん。又曉山集を引捕へ云ふとも、渠が如き邪人の說出すにも及ぶまじ。古池やを山吹と置くかたよしと云へる程の不堪者なれば、それらの人のいかでか此句を聞き知る事あらんや。又評林に馬醉木の事此句の用にあらず。木槿と取ちがへたると見ゆ。甚可笑也。此引歌もあやまれり。堀川の院御時百首に俊頼朝臣「とりつなげ玉田よこ野のはなれ駒つゝじが岡にあせみ花さく」、又貞德の肝要抄に、玉田横野は奥州の名所なりと有り。しかれども玉田横野は備中國なり。高倉院大嘗會備中の國の歌新拾遺賀の部に出せり。又玉田横野は和泉國にて、新拾遺雜に歌あり。奥州と云へるは、つゝじがたけ奥州の名所かのよし八雲抄にあれば思ひたがへて云へるなるべし。あせひは誤りなり。あせみなり。萬葉

明詠集に、松樹千年終是朽、槿花一日自爲榮　白居易

此柳は寫誤りか又曉山集に證るか

にも出でたり。又道中の字も途中と書きて可然にや。馬酔木と木槿のわからぬ文語なり、食れけり、句選にもけりと有り。羊素問答抄に、此句の抄に、たり、とあり、手爾波の違なり。いぶかしと思へるに、許六集に、たり、と有り、尤可隨とあり。しかれども伊勢古雅談に、たり、とは手爾波違なり、翁の自筆の短冊に、けり、と有り、證とすべしといへり。按ずるに、たり、は、てあり、の假名にて、食はれてあり、といふ義なり。手爾葉違にはあらざれども、けり、に、て有るべし。殊に眞蹟にも、けり、と有るよし、いよ〳〵さこそ有るべき一體句のしたて、けり、にて面白かるべし。たゝ食はれきといふのみなり。句意は人は居所こそよるものなれ。世に諺に出る杭打たるゝといふ事有り。人おの〳〵身の分際に分量を守れかしとの事なり。此句においては趣意大秘訣あり、知る人決してなし。其解を知る程の人ならんには、翁の句いづれをも掌中に握るべし。知止の道、其止る所を知らざれば鳥にだもしかず。美濃の、五竹（後五筑と改む）坊も此句意おそらくは天下に知る人なしと申したるとかや。聞き及びしが、又或説に翁、根本寺の佛頂和尚の弟子と成りし時、折々ごとに行きかよひ勤學ありしに、佛頂はかたの如く俳諧を制せられ、綺語怪詞何の益ありやと毎度化られしに、或時近里に時齋ありて、佛頂翁をも伴ひ行きしに、道々も又俳諧の事をいひ出されしに、翁の曰、俳諧は只、今日の事目前の事にて候と申されしかば、しからば其處にある木槿にて一句せよとありし時の卽吟なりと。其時佛頂つらつら考へていはく、善哉々々俳諧もかゝる深意あるものにこそと、爰に感せられて後は制し給はずとかや。禪意にも叶へる所ありと見ゆと云云。此事跡も不審なり。此句は野ざらし紀行に出て、馬上吟と題あり。馬上にて佛頂と同道はせまじ、是不審。もしや佛頂の望まれし時、さきにせし句を噺し聞かせけんも知るべからず。野ざらし紀行素堂が序にも此度紀行二三句の

秀逸のよし見えたり。

花むくげ裸わらべのかざし哉

延寶九年の東日記に見えたり○東西夜話に裸子の木槿の花持ちたる畫の讃にして、從吾亭に掛物かゝり侍るよしあり○新古今春の部に「もゝしきの大宮人はいとまあれや櫻かざしてけふもくらしつ　山邊赤人」○吐綬雞集にも此句見えたり○按ずるに延寶の作なれば細かなる毛をムクゲといへば裸身にて吟じけるか。

東日記は官水選なり

吐綬雞集は洛の秋風が選なり

金昌寺庭中の柳ちれば
庭掃て出るや寺に散る柳

元祿二年加賀國金昌寺に泊りたる時の吟なり。奥の細道の文に云、秋風を聞て衆寮に臥す、明ぼのゝ空近う、讀經聲澄むまゝに鐘板鳴て食堂に入る。けふは越前國へと心早卒にして堂下に下るを、若き僧ども紙硯をかゝへ、階のもとまで追ひ來る。折節庭中の柳ちれば、庭掃いて出るや寺に散る柳」とりあへぬさまして草鞋ながら書き捨つ、とあり○句解に「世說曰、郭林宗每行宿逆旅輒自灑掃及明去後人至見之曰此必郭有道昨夜宿處也、これらの心かよひて句意尤も殊勝なり○菅弦抄にも此世說を引て又曰、釋氏要覽云、佛自執箒欲掃佛言掃地有五勝利、是等より出づる作意なるべし○按ずるに郭林宗が事旅宿には據ありといへども、寺に此作ありけるを思へば、寒山詩集に閭丘胤序、往國清寺止宿寺庫中有一行者名曰拾得下略。又其書の奥に天台山國清寺三隱集記あり。其文中に、拾得掃地、寺主問姓箇甚麼、住何處、拾得以箒叉手而主主罔測寒槌胸曰蒼天々々と見えたり。芭蕉庵栗の跋に、李杜が心酒を嘗めて、寒山が法粥を啜る、と書けるを思へば寒山子詩集を常に芭蕉見たるなるべし。

菅弦抄に金昌寺は加賀國の檀林なり

しかれば是等をも思ひよれるやと評せんは、蛇足の類ひにや。されど扁突に寒山の自嘲讃に「庭はきて雪を忘るゝはゝき哉」かく吟じたる事見え侍ればかくも思へるならし○東西夜話には、出はや、と出る○師走袋に此の句同行の人と別れて寺を出づる時の句と見えたり。句の意は我等は柳の如くちりちりに別るゝものなり。さあらば庭はにごさじと庭を掃きて出づべきとなり○説叢に師走袋を難じて、本説に非ずして、めつた的のあて推量なり。笑ふに堪へたり。又句解郭林宗が事似て似ぬものなり。是又本説をしらずして附會せしにや。奥の細道に云、大聖寺の城外全昌寺といふ寺に泊る。尙加賀の地なり。曾良も前夜此寺に泊りて「よもすがら秋風聞くやうらの山」と殘して、一夜の隔千里に同じ。我も秋風を聞て衆寮に臥せば、あけぼのゝ空近う、讀經の聲澄むまゝに、鐘板鳴つて食堂に入る。けふは越前國へと心ざし、忽卒にして堂下に下るを若き僧ども紙硯をかゝへ、階のもとまで追ひ來る。折ふし庭中の柳ちれば、とありて、此句あり。玄梅が鳥の道に出せしも此通り也。東西夜話に云、何がし全昌寺といふは、先師一夜のやどりを佗びて「庭掃て出はや」といへる其柳の跡もゆかしかりければと云々、かゝる事知れたる事ながら、袋の注の如き雲をつかむ虛妄を信せん人のために、慥に其證を出すものなり。無益と思ふべからず○考ふるに四分律行事鈔（釋道宣述）下三僧像致敬篇第二十、佛告女曰、掃佛地得五福、一心清淨、他人見已亦生清淨心、二爲他受、三天心歡喜、四集端正業、五命終生善道天下云云、又同卷道俗化方篇第二十四曰、凡以穢俗之身入寺踐金剛淨刹地、自多乖儀式、若去時須贖其過、隨施多少示有不空（若布緇香油澡豆華水下至掃地除穢）此入寺之法、中國傳之矣、余更略出護過要術云云、此說を證とすべし。門弟千那は律師なり。夜話などにも翁聞き證かれしにもあらん。郭林宗は俗にいふきれい好きにして、其質まめなればなり。逆旅

在家と寺院とは事替なべし。此律法去寺の法をもてすれば、翁の貧にして只掃地をもて一宿の恩をあがなひ給ふ事、いと殊勝にこそあるべけれ。何ぞ廓林宗に寄らんや。

盆過ぎて宵闇くらし虫の聲

何れの年にや未知。小文庫泊船集にも見えたり。

床に來て鮃に入るやきりぎりす

元祿七年九月二十五日湖南の正秀へ芭蕉よりの文通のうちに、重陽の朝、奈良を出て難波に到る「菊に出て奈良と難波は宵月夜」「又酒堂が予が枕もとにて鮃をかきしを、とありて、此句塾日記に見えたり○評林に八月戸にありといへるにや、衣かたしき、草庵の幽思といまらず、何となく凄く行ひすませし横川の僧都もあらなんと、秋情深く聞えたり。尙可考○赤草紙に「猪の床にも入るやきり〳〵す」此句は泊筆あり。初は「床に來て鮃に入るや蟋蟀」といふ句なり。なしかへられ侍るか○按ずるに評林むつかしくや酒堂がいひきに、きり〳〵すの聲変りたるなり。

横川の僧都の事源氏手ならひの卷にあり

白髮ぬく机の下やきり〳〵す

何年の吟にや未知。泊船集に、まくらの下や、と見えたり。机枕書きあやまりにや、枕のかた解き易し○詩經蟋蟀在堂、歳聿其莫○舉白集「きり〳〵す雨夜のねやもうちしめり鳴くや枕にたえずたえずみ」○白氏文集に書牀鳴蟋蟀琴匣網蜘蛛○或云、古き筆の「きり〳〵すに成るといふ又筆つむしの名あり○按ずるに机枕何れにや、いまだ全き書を得ざれば一決しがたし。

太田の神社に詣て實盛が甲
錦の切あり、樋口次郎が使せ

奥の細道を按ずるに七月末か八月にや此後に名月の句有り

し事まのあたり緣記に見え
たり

むざんやな甲の下のきり〴〵す

元祿二年の吟、奥の細道に加賀國遊杖の文に見えたり。其事此前書の趣なり○むつちどりにもあり、宇陀法師、猿蓑、泊船集にも出でたり○去來抄に「雪うすし白魚しろき事一寸　芭蕉」「漉あり蓮の葉に暫く雨もいたきしか　桑堂」是などは詩か歌か文字數不合のみにあらず、又合ひたるにも「散る花にたゝらうらめし暮の鐘　幽山」此句は謎なり。俳諧歌に謎の體も有る事にや。是等は皆俳諧歌體より出す、察し見らるべし。魯町云、先師も出さる風侍るや、去來曰、奥羽行脚の前はまゝあり。此行脚の内に工夫し給ふと見えたり。行脚のうちにも「あなむざんやな甲の下のきり〴〵す」といふ句あり。後に「あな」の二字を捨てら

る。是のみにあらず、異體の句ども省き捨て給ふ多し。此年の冬初めて不易流行の敎を說き給へり。下略○菅菰抄に云、太田の神社は八幡宮にて、小松の宿より一町ばかり南、道の傍に在り。此句は詩十月蟋蟀入我牀下とある趣向として、實盛のうたひ物に、あなむざんやな齋藤別當にて候ひけるぞや、といふ詞をとれるなり○評林に曰、此句は妙々の手柄ありて、五文字よりきり〴〵すまでのはたらき、一字一點の遊字なし。うたによそへてきり〴〵すなからましかば外の虫ならばいかにせん。わざと評はのこす○按ずるに歌によそへてとは「きり〴〵す鳴くや霜夜のさむしろに衣かたしき獨かも寢ん」にや。是むつかしからん。去來抄に云へるを見るべし。是等も異體なるが故に、あなむざんやな、を直したるとなれば、それらの言語の論にて、句の善きとは云ひがたからん。詞のくさり手をこめたるを譽むる事芭蕉の意に叶へるや知らず○粟津が原に北國行脚の

頃、越前の太田の神社に詣づ。寶盛が鎧甲什物に有りける。此寶物を見て「むざんやな甲の下のきりぐす」中七文字より下五文字は誰もあるべき句ながら、上五文字の頓作、時に取つての仕合ながら、能く初一念、寶盛にはよく寄せて秀作の部なりと見えたり○按ずるに頓作時に取ての仕合ながらと云ふ所聞所ならん。もとめて是を好むにはあらじ○唐詩選杜甫詩略。

蓑虫の音を聞きに來よ草の庵

貞享四年の頃盧栗に、聽閑、とありて此句見えたり。其次に前書聞きに行きて、何も音なし稲うち喰うて蚤哉　嵐雪とあり○泊船集に聽閑の前書きありて、此句いづれの集にか、伊賀芭蕉庵、と前書あれど、是は深川の庵なるべし○評林に秋情の中に父よ〳〵と鳴く虫の聲を誰か來て閑情を助すべし藻に住むむしのわれからと蟲の子の宿も定めずさびしけれ○按ずるに評林むつかしからん。嵐雪に送りたる句なるべし○又或人の家藏（淺草寺町古杉風孫平野屋茂四郎方に芭蕉眞蹟所持なり）一軸、柚木に蓑虫の畫、英一蝶筆にて、芭蕉の讃に此句あり、翠簾翁書招に應じて虫の音を書ノ本ノ素堂主人と有りて、風俗文選にある所の素堂の蓑虫の說あり。「蓑虫〳〵聲のおぼつかなきをあはれぶ。ちゝよちゝよと鳴くは孝に專なるものか。いかに傳へて鬼の子なるならん。淸女が筆のさがなしや。よし鬼なりとも醫嚢を父として舜あり。汝はむしの舜ならんか。みの虫〳〵、聲のおぼつかなくて且つ無能なるをあはれぶ。松虫は聲の美なるが爲に籠の中に花野をなき、桑子は糸を吐くにより、からうじて賤が手に死す。みのむし〳〵、無能にして靜なるをあはれぶ。胡蝶は花にいそがしく、蜂は蜜をいとなむより往來おだやかならず。誰が爲にこれをあまくするや。みの虫〳〵、かたちの少きなるを憐む。わづかに一滴を得れば其身をうるほし、一葉を得ればこれがすみかと

なれり。龍蛇の勢あるも、多くは人の爲に身をそこなふ。しかじ汝がすこしきなるには。蓑虫〳〵、漁父が一糸を携へたるに同じ。漁父は魚を忘れず、風波にたへず、幾度かこれをときて酒にあてんとする、太公すら文王を釣の謗あり。子陵も漢王に一味の閑をさまたげらる。みのむし〳〵、玉虫ゆゑに袖ぬらしけむ、田蓑の島の名にかくれずや、生けるもの誰か此惑ひなからん。鳥は見て高くあがり、魚は見て深く入る遍昭が蓑をしぼりしもふるつ事を猶忘れざるなり。蓑虫〳〵、春は柳につきそめしより、櫻が塵にすがりて定家の心を起し、秋は萩吹く風に音を添へて寂蓮に感をすゝむ。木がらしの後は空蟬に身をならふや、骸も躬も共にすつるや。又以男文字述古風、蓑虫々々、落入胸中、一絲欲絶、寸心共空、似寄居狀、無蜘蛛工、白露甘口、青苔粧躬、從容侵雨、飄然乘風、栖鴉莫啄、家童禁蓑、天許作隱、我憐稱翁、脫蓑衣去、誰識其終、貞享至南日誌丁亥卯蚊足書、草の戸さしこめて、もの〵詫しき折しも、偶々蓑虫の一句を云ふ、我友素翁甚だ哀れがりて、詩を題し文をつらぬ。其詩や錦をぬひものにし、其文や玉を轉ばすが如し。つら〳〵見れば離騷のたくみあるに似たり。又蘇新黄奇あり。はじめに虞舜曾參の孝をいへるは、人に教へをとれとや。其無能才を感る事から再びむしのたはぶれは色をいさめんとなりし。翁にあらずば誰か此虫の心をしらん。靜に見れば物皆自得すといへり。此人によつて此句を知る。昔より雓をもてあそぶ人の多くは、花に耽り實をそこなひ、實を好んで風流を忘る。此文やはた其花を愛すべし。其實猶くらひつべし。こゝに何がし潮湖といふあり。此事を傳へ聞きてこれを畫く。まことに丹青淡くして情重やかあり。心をとゞむれば虫動くが如く、黄葉落つるかと疑ふ。耳をたれて是を聞けば其虫聲をなして秋の風にそよ〳〵とさむし。なほ閑窓に閑を得て兩士の幸に預る事、蓑虫のめいぼくあるに似たり。

海郎の家は小海老にまじるいとゞ哉

元祿四年の猿蓑に見えたり○泊船集に、堅田にて、と前書あり按ずるに、韵塞に元祿四年十月明照寺にて「百年の景色を庭の落葉哉」の吟あり。しかれば芭蕉傳記には元祿二年北國行脚、太津にて年を越し、翌三年幻住庵にかくれ、四年の秋東武に歸ると見えたれども、十月まで平田邊に遊杖と見えたり。然れば堅田の前書を見るに、三四年中の吟なるべし○去來抄に猿蓑撰の時「病雁の夜寒に落ちて旅寢哉」「海士が家は小蝦にまじるいとゞ哉」「此内一句入集すべしとなり。凡兆曰、病雁はさる事なれど、小海老にまじるいとゞは句のかけりこと新しく、誠に秀逸なりと云ふ。去來が曰、いとゞの句は予が口にも出でん。病雁は格高く趣幽にして、いかでかこゝを案じつけんと論じ、終に兩句とも乞うて入集す。其後先師病雁を小海老などゝ同じ事に論じけりと笑ひ給ひけり○甕編輪に、いとゞ、カウロギ、一物二名、筑紫にてはキゝゴといふ。其形蛬の如くにして、首尖りて尖なり。足翼共に長し。竈の邊に穴居す。竈馬の字、イトゞカウロギと訓ず。暮秋深夜聲高く澄めり。

蜻蛉や取つきかねし草のうへ

何れの年にや未知、翌日記中瓜畠集に出でたり○泊船集にも有り○師走袋に行脚の時宿を求めかねたる句と見えたり。取つきかねしにて心見えたり。例の妄說。

小蝶にもならで秋ふる菜虫哉

元祿二年の吟なり。後の旅集に、元祿二年のはじめの夏、深川の庵も人に遺りて那須野の原に時鳥を待ち、蓬萊の墩褸の下にきり〳〵すを聞きて、千百里の嶮難終に頭べを白うして、美濃

後の旅集は元祿八年如新選

の國我里にうつり給ふ、句どもあまたあり。此事は奥の枝折に殘し給へば大かたは漏しつ「胡蝶にもならで秋ふる菜虫哉」芭蕉、たねはさびしき茄子一もと　如斯かくからびたる吟聲ありて下の句をすと見えたり○元祿五年の己が光にもあり。泊船集、陸奥千鳥にも見えたり○評林に、いかなれば汝造化の天遊を知らずや、一生を菜虫にて朽ち果てん淺ましさよ、下略○按ずるに評林は咎めたるあたれるや覺束なし○師走袋に此句芭蕉翁其身一代を形容する句と見えたり。菜虫は大概胡蝶と化するものなるに、我は菜虫の如くの身ながら胡蝶ともならず、化する事を得ずして、秋をふるとなり。此秋をふるといへる句にて、生涯風流の爲に其身の飭りをなさず、花月の爲にからびて、筋骨かくるゝ所なく一句に顯れたるは、尋常の人の云ひ得る所にあらず。

入日記は元祿十六年霞
餘選許六跋あり
此文眞蹟集にもあり

老の名のありともしらで四十雀

元祿六年の吟なるべし。入日記に許六へ芭蕉よりの書狀あり、云、保生佐太夫三吟に「老の名のありともしらで四十雀」、少將の尼の歌の余情にて、素堂菊園にあそびて「菊の香や庭にきれたる沓の底　野坡」といふもの四吟に「金屏の松の古さよ冬籠」、尙廣く他見被成間敷候、追而俳諧など可懸御目候、乍去當冬は相手に可爲もの無御座候得ば、俳諧も成間敷候廣き江戸に相手の無きも氣の毒に存じ候、當方無恙五句附點取に、脾の臓を捫む體に候此脾の臓もし破りたらん後、初而俳諧はやり可申候、何方へも久々絶書音候、膳所へ連帖一通、此帖のみに候、大垣大坂へも不致返翰候、落字文章の前後はゆつり御推覽可被下候、當年めきと草臥增り候、上方邊繪色紙未調申候由、重て可申遣候、下略○元祿七年の後猿蓑にも見えたり○古今抄に心切と

出でたり○評林に云、少將の尼の歌に「己が名につらき別れのありとだに思ひもかけず鳥の鳴くらん」是より己が名の尼とは世に知られたるよし、三十にして立ち、四十にして惑はずと云へる初老の覺悟なるべし、何となくをかしみ有て「から」の字感あり、尙可考○按ずるに「から」の字を感ずる事芭蕉の意に叶へるや知らず、其鳥の氣の若々しく、姿を見るべきか、許六への書狀にある所の素堂菊園の句は、續猿蓑に元祿辛酉とあり、則ち六年也、又己が名の歌の余情にて此吟ありといふ事は、目圍屬に見えたり、三十にしてよりの評は、評林論語にて書けり。

刈あとや早稻かたゝの鳴の聲

何年の吟にや、笈日記、尾張の部に、田中の法藏寺にて、と前書あり○泊船集にも笈日記の通り見えたり○回國納經帳、尾州法藏寺、勅願所檀林所、日本武尊由蹟、行基開山。

桐の木に鶉鳴くなる塀の內

元祿四年の猿蓑に見えたり○泊船集にもあり○古今抄の鶉の章は田莊の酒家といふ題ありて、こなたより其家の富貴を思ひやりたる樣なりとぞ、しからば五文字に句を切りて、桐の木やといふべけれど、さいふは桐の木の句ならん、是は桐にも鶉にもあらず、田家を稱するの句ならん、鶉鳴くなると句を切りて、塀のうちを隔つべきにもあらず、況んや鶉鳴くなるとは句法に古歌の裁入なるをや、今や、に、の字の働きを評せば、遠く田莊の白壁を見やりて、其桐の木に富貴を思へばと爰に心をめぐらすべきやさるをある人の難じけるは、發句は題をあつかふに動くと動かぬとの論あれば、此句は假の木の方ならんと、さいふは體用の論なきにや、是は鶉を體にして、桐は句體の用といはん、しかるを假の椿のと言へば、官家に檜皮の姿なら

んに、桐は田家の富貴なるものなり。まして今其日其家に此桐は時宜の即興と知るべし○師走袋に鑛有りて世に唐ひられず、寂莫と物淋しく暮す人への挨拶なり。桐の木は鳳凰の栖むべき木なり。然れども塀の内に有りて鶉鳴くなりと云たてたり。是夕されば野邊の秋風身にしみて鶉なくなり深草の里」を本として、今は塀のうちにもなくなりその作なり○赤草紙に此句いかゝ聞き侍るやと尋ねられしに、何とやらさまある事に思ふまし答へ侍れば、聊か思ふ所有りて歩みはじめたるなり○説幾に師走袋を難じて、一向の邪注に古今抄を引て盲人の邪説用ゆべからずと有り。

鷹の目の今やくれぬと啼鶉

何れの年にや未知。小文庫に、鷹の目も、とあり○二十五條に切字の論に、一句の中に「や」といひて「いかに」と疑ひ「らん」とはねても三字同意にて、切は一所なり。或は「鷹の目も今や暮れぬと鳴く鶉」といふ句は「と」の字にて押へたれば切字に非ず。此類はまた有りて、説抄に押へ字かゝへ字の穿鑿なし。切字百ありても切れぬこと多し。

夫木抄
いなすゞめむれ渡るな
りしづの家の門にのび
たる手くさやすむる
六條院宣旨

稲雀茶の木ばたけや逃所

元祿三年の秋、木曾塚の舊草にありて、蔵戸の人らに對す「草の月を知れや穂蓼に唐がらし」「稲雀茶の木ばたけや逃所」其後は武の深川にありしが、去年の秋再び舊草に歸りて「道細し相撲取草の花の露」「笈日記」湖南の部に出でたり。

ひいと鳴尻聲寒し夜の鹿

元祿七年九月八日和州猿澤の池のほとり吟行の句なり。笈日記には、尻聲悲し、と有り。其文に伊賀の部に云、九月八日難波津

の旅行、此日に定る事は奈良の舊都の重陽をかけんとなり、人人送り迎へいとむつかしとて、朝霧をこめて旅立ち出づるに、阿叟のこのかみも送り見給ひて、かねて引わかれたる身の、此後は逢はじ逢はじとこそあきらめつるに、衰へ行くほどに別れもあさましう覺ゆるとて、具せられつる者どもに介抱の事などかへすがへす頼みて、うしろ影の見ゆる限りは居給ひぬ、其日は奈良までと急ぎて、笠置より河舟に乘りて錢司といふ所を過ぐるに、山の腰すべて蜜柑の畑なり、されば先の夜ならん「山は皆蜜柑の色の黄に成りて　翁」と承りし句は、まさしく此の所にてこそ候へと申しければ、あはれ我が腸を見せけるよとて、阿叟も見つゝ笑ひ申されし、是は老杜が詩に青惜峰巒過、黄見橘柚來と云へる和漢の風情更に異ならねば、笠置の峰は誠に惜むべき秋の名殘なり、船を上りて一二里が程に日を暮して、猿澤のほとりに宿を定むるに、はひ入て宵のほどをまどろむ、されば曲翠子の大和路の行に誘ふべきよし、し給ひと申されしが、斯る衰老のむつかしさを旅にて知り給はぬ故なるべしと、自らも口惜しきやうに申されしが、況て今年は殊の外に弱り給へり、其夜は勝れて月も明かに鹿も聲々に亂て哀なれば、月の三更なる頃、彼池の邊りに吟行す「ひいと鳴く尻聲悲し夜の鹿　翁」次に支考「鹿の音の糸引きはへて月夜哉」の句あり○むつ千鳥に、びいと鳴くと濁りて有り、尻聲悲し、と見えたり○泊船集にも尻聲悲し、とあり○行狀記にも元祿七年の遊杖、奈良にての吟、尻聲悲し、とあり○眞蹟集に、杉風への書狀あり、其文に、夏より七月までの御狀、遲速御座候得共、段々無相違相違候久々伊賀に逗留故便りも不致候て無心元存候彌御無事御勤御家内相替事無御座候哉承度存候おしめ祝言當月中にて可有御座と推量申候定て御取込可被成候首尾能相調可申上御左右待入候、一、拙者先は無事に長之夏を暮し申候漸秋

282007

立候て頃日夜寒の頃に移り候いかにも秋冬の間無恙暮可申様に覺え申候間、少しも御氣遣被成間敷候追付參宮心懸候故先大坂へ向け出可申候去る八日に伊賀を出候て重陽の日南都を立ち則ち其暮大坂に到り候而酒堂方に旅宿、假りに足を留め申候、名月は伊賀にて見可申候發句は重而可懸御目候「菊の香や奈良には古き佛達」「菊の香や奈良は幾代の男ぶり」「ひいと鳴く尻聲悲し夜の鹿」いまだ句體難定候他見被成間敷候其許兩替町かすか町酒店にて稲寺屋十兵衛と申す者受元伊賀（イに）伊丹や屋長兵衛店にて候間早々御左右承り度候、子珊秋の集被催候哉、左候はゝ受元の一卷下し可申候、上方筋別坐敷炭俵にて色めきわたり候、兩集とも手柄を見せ候少しは桃隣にも師恩の貴きすべを解申候へと御申被成べく候、桃隣俳諧誠に壯（イに俄に答り上り候）上申候を尊ち沙汰にて候、急便早々以上、九月十日、杉風樣　はせを、

とあり○鶏突に、鹿といふもの歌の題にて俳諧のかたち少しひいと鳴く尻聲悲し、さは歌にも及びがたくや侍らん、南都の鹿は紅葉踏み分くる姿少し、尋常の犬のたぐひなればより所を有るべし、中々奥山の鹿は云ひ負せがたき題なるべし。

棧や先おもひ出す馬むかへ

貞享五年名古屋に逗留の時、更科紀行に見えたり○公事根源に、今日は信濃の勅使の牧の馬を奉る、六十疋なり、もとは十五日にて侍りしかども、朱雀院御國忌に當日によりて、十六日になさる、天皇南殿に出御なりて御馬御覽、下略、廿三日には信濃望月の馬二十疋、廿八日には上野の馬五十疋ひかる、さしたる事なし○增補題林抄に、こまむかへといふは年毎に八月十五日東の方より駒を奉る、殿上人あふ坂へ行むかへて是を奏して、九重のうちへゐて參るを駒ひきとも駒迎へともいふなり「いつよりか絶ぬためしに率き初て關のこなたに駒迎へせし」

早稲の香や分入る右は有磯海

嘗笈抄に四十八か瀬は下海際の往還にて、岩瀬通りと云ふを近道或は越中の海道能登の國などへ行く道筋なり、那古擔籠は皆越中の名所なり拾遺集たこのうらのそこさへ匂ふ藤浪もかざして行かん見ぬ人のため藤のかゞみとて今になほ江藤あり

元祿二年の吟、奥の細道に、黒部四十八か瀬とかや、數知らぬ川をわたりて、那古と云ふ浦に出で、擔籠の藤浪は春ならずともを初秋の哀とふべきものをと、人に尋ぬれば、是より五里磯傳ひして、むかふの山陰にいり、蜑の笘ふき幽かなれば、蘆の一夜の宿かすものあるまじといひおどされて、加賀の國に入る「わせの香や分入る右は有磯海」と見えたり○有磯海集に、分入る右は、と有りて、此句元祿二年奥羽の行脚に春夏を送り、秋立つころ三越路にかゝり、處々風吟ありける中に、當所の發句とて中し傳へける、と見えたり○むつ千鳥にも、分入る右、とあり○いつを昔にもかく有りて前書、加賀にて、とあり○類柑子には、わけ入る道、とあり○嘗菰抄に、有磯海は越中郡に有る名所なりと見えたり○擧白集に「さそはれておぼえず月に入る野邊の左は小萩右は松むし」○赤草紙に「早稲の香や分け入る右は有磯海」「一おねはしぐるゝ雲か雪の不二」此句先師曰、若大國に入りて句をいふ時は其心得あり、都方名ある人加賀國に行きてくんせ川といふ川にて、こりふむと云ふ句あり、たとへ佳句とても其位を知らざればなり、有磯も其心遣ひを見るべし、又富士の句も山の姿是ほどの氣にもあらでは異山とひとつなるべし。

秋之上 終

秋之中

粟稗にまづしくもなし草の庵

貞享五年戊辰七月廿日於竹葉軒長虹興行の「粟稗にとぼしくもあらず草の庵　はせを」鼓の中より見ゆる青柿　長虹」秋の雨歩行鵜に出づる暮かけて　荷兮」と脇第三ありて、其の外、一井、越人、胡及、鼠彈六吟の歌仙、秋の日集に見えたり○笈日記尾張の部に、松の竹葉軒といふ草の庵を尋ねて、とありて、七文字、まづしくもなし、と句選の通り見えたり○泊船集に、句選の通りに有り○評林曰、閑扉清貧ノ腸也、白氏文集に林下幽閑氣味深とあり、世の榮耀にもとづかずして、一瓢の飲の志なり、すべて柴室侘笠の風流はみな同じ事なり、猶可尋○杜律に錦里先生烏角巾、園收芋栗米全貧、慣看賓客兒童喜、得食階除鳥雀馴、秋

水總深四五尺、野航恰受兩三人、白沙翠竹江村暮、相送柴門月色新

蕎麥はまだ花でもてなす山路哉

元祿七年九月二日、支考は伊賀國より斗從をいざなひて、伊賀の山中に赴く。是は難波津の抖擻の後、必ず伊賀にも赴かんとなり。三日の夜彼所に至る。草庵のまうけもいとゝ心さびて、此句有りて、「松茸や知らぬ木の葉のへばり付く　翁」此松茸を其夜の卷頭に乞ひうけて歌仙あり。爰に記さず。笈日記伊賀の部に見えたり○續猿蓑に、伊勢の斗從に山家をとはれて、と前書有り○泊船集に、伊賀山中、とあり。

堅田にて

病雁の夜寒に落ちて旅寢哉

元祿四年の猿蓑に前書ともに斯くの如く見えたり○泊船集同じ○枯尾花の序に、こなたかなたの知るべ多く、鄙の長路をいたはる人々、名を乞ひ句をしのぶ事安からず聞えしかば、隱れかねたる身を竹齋に似たる哉と、風の吟行に猶々德化して、正風の師と仰ぎ侍るなり、近在隣郷より馬を走せて來り迎ふるもせんかたなし、心をのどめてと思ふ一日も無かりければ、心氣いつしかに衰滅して、病雁の堅田におりて旅寢哉、と苦しみけん、下略、と見えたり○去來抄に曰（此一段海耶が屋の小蝦の際に委し依て略す）○或人曰、病雁の句芭蕉病中の吟なり、海士が家の小海老の句と二句とも、江州堅田本福寺にての吟にして、院主は李由といふ、今に風流絶えず。千那、角上、未角、當住なり。

名月の花かとばかり綿畠

元祿七年の續猿蓑に、「名月に薄の霧や田の畷り、名月の花かと

古今、物名
桂の宮　源ほどこす
秋來れど月のかつらのみやはなる光を花と散らすばかりを

新拾遺、春　爲家
霞む夜の月の桂も木の間より光を花とうつろひにけり

見えて綿畠　はせを今年伊賀の山中にして、名月の夜此二句をなし出して、いづれか是何れか非ならんと待りしに、此間わかつべからず。「月を待つ高根の雲ははれにけり心あるべき初しぐれ哉」と圓位法師のたどり申されし麓は、霧横たはり水流れて、平田渺々と曇りたるは、老杜が、唯雲水のみなり、といへるにもかなへるなるべし。その次の、綿畠は言葉麁にして心はなやかなり。いはゞ今の好む所の一筋に便あらん。月の桂の宮はなる光を花と散らすばかりに、と思ひやりたれば、花に清香あり月に陰ありと、是も詩歌の間をもれず。しからば前は寂寞をむねとし、後は風興を專にて、吾が心何ぞ是非をはかる事をなさむ。只後の人なほあるべし。と支考が評見えたり○有磯海には、「伊賀山中に有りて、名月や花かと見えて綿畠、名月に麓の霧や田の曇り」と出でたり○古今抄には、名月の花かと見えて綿畠、花かと見えて綿とぬけば、いづれも中段に心詞の餘り無し。然れば心切にもあらねど、發句は例の發句ならんには、玄妙の名はいさ知らず。題せば無心の切といふべし○東西夜話に、先師一歳光りを花の歌をとりて、名月の花かと見えて綿畠、と申され侍りしは知らず。其花の地に落入ては、木綿の花と咲けるかと、おのれと作意を加ふるなり。

新續古今、賀
光明峯寺前攝政大政大臣
秋の夜の月の桂も幾千代か光を花のかがみとは見む

發句集元祿五年とす、句は、門へさし込、と有り、奥の細道に、敦賀にて、名月や北國日和定めなき、

名月に麓の霧や田のくもり

前章にくはし。扁突には、麓の霧歟、と有り○擧白集第四に「遠近の山もと白く立つ霧に鳥羽田の面は月ぞさやけき」

名月や門へさし來る汐がしら

元祿五年の吟なるべし。同六年の桃の實集に有り○三日月日記に、門へさしくる、と見えたり。其序に、素堂曰、我友芭蕉の翁月にふけりて、いつはとは分かぬものから、殊に秋を待ちわたり

越の水うみの文、細道に見えたり、石山幻住庵は元祿三年より四年の冬迄なり

て求めなし、或時は敦賀の津にありて、越の水うみにさまよひ、其先の秋は、石山の高根にしばし庵を結びて湖の月を詠じ、二とせ三とせを隔てゝ此郷の秋にともにあふなるべし、下略、斯くの如く見え侍れば、元祿五年の吟なるべし○小文庫に、さし込、と出でたり。

名月や池をめぐりて夜もすがら

丁卯貞享四年

雜談集　其角述、孤松集は貞享四年大津の尙白選なり

貞享四年の續虛栗に、池をめぐつて、とあり○雜談集に、丁卯年芭蕉庵の月見むとて舟催して、參りたれば、と有りて、池をめぐつて、と見えたり○孤松集、むつちどりには、めぐりて、とあり○葛の松原に、是又、めぐりて、とありて、芭蕉庵の月見なるべし、と見えたり○一字幽蘭集にも、池をめぐりて、とあり○評林に、水の面に照る月なみを數へて、定家卿の秋の半も過ぎぬべしと思ひ出でられたり、山谷が秋水清く底なし、と水澄みわたり、清光の隈なき樣も見え透きたり、句は眼前なり、山更けて人靜まりたるに、明け行く月を惜み、闇のひまさへと、昔は物思ひがちなるに、老をむかへては、かく我のみ佗びたる哉と、述懷の心あり、白居易が潯陽の江に盃をうかめ、東坡が赤壁もたゝ閑夜の清光なるべし○句解に、此句は言葉すら〳〵と云下して、はせを庵一夜の佳興なるべし、宵の程は竹のかこひ花やかにさし出づるより、おり立ちて句を求め、詩を吟ず、やゝ光半天にかゝりて、池水は氷をしける如く、盃を洗ふ客も思ひやらる、況て曉は士衆に光ををさめて、物の榮枯も觀ずべく、傾く月の惜しきのみかは、と詠める歌の心も籠れるは、是は句の外の意味なれば、無用の辯とて、高き人は叱り給はめど、我この事を思ひ立つるより、初學に古翁の粉骨を知らしめん爲にして、更に老俳の手に觸るべくも思ひ侍らねば、しりへに嘲りをかへり見ず、みじかき筆を動かし侍る、とあり○按ずるに評林にいへる述懷

新古今、　俊惠法師

夜もすがら物思ふ頃はあけやらで閨のひまさへつれなかりけり、

新勅選、　定家

あけば又秋の半も過ぎぬべしかたふく月の惜しきのみかは

の心覺束なし。又按するに、白氏に、東林寺白蓮詩に、東林北塘水、湛々見底清、中生白芙蓉、茜莖三百莖、白日發光彩、清飈散芳馨、況香銀甕破、瀉露玉盤傾、我瓶應埃眼、見此瓊瑤英、乃知紅蓮華、虛得清淨名、夏蕚敷未歇、秋房結纔成、夜深衆僧寢、獨起繞池行、下略。樂天は白蓮に池をめぐり、芭蕉は名月に池をめぐる。芭蕉白氏の詞を取る、池をめぐるの二字も是より出でたるにや○說叢に評林を雜じて云、文章を飾らんとして、却て雜々紛々句の餘情明かならず、摸羅含糊也、聞知る人更に無し。予が不才かと餘多の人々に見せしかど、殊にわからずと云ひしなり。又園のひまさへの一段、翁の心骨にあらず、獨寢をわぶる程ならば、もとより隱者とは成るべからず。是れ翁を知らざる妄評、後の人を迷はす妄見なり。佳興の風情景色文章に盡さんとすれども、此夜の風流雲を紙とし森を筆になして書くとも、やはか盡さるべき。されば景色のみの解にして、一句の意わけ難し。初學のをさをさ見得る事違かるべし。老俳の我等だに紛はし、まして初學の人の爲にはいかゝあらん。すべて上古より詩歌の註抄どもを見るに、文をつゝまやかに、質朴にして正しく記すを要とせり。さるによりて古抄どもは、能く〳〵人の耳に落ちて、其中より又發明する後哲達多かりしなり。終夜の詞にほれて、夜一夜を寢もやらず、池をめぐり、曉士峯にをさまるまで見るとはいかゝにや侍らん。又詩歌連俳いづれの月いづれの花か惜まざらんや。其詩歌を引出でんは、一生涯尋ねたりとも盡きざるべし。此句によらぬ詩歌も有るべからず。夫のみ强く評し解し、景色を文章にあらはさんとして、媚ぶる故に、却てあざやかならず。又終夜といふ詞より、曉まで池をめぐり月を詠めあかせしにも有るべからず。いかに月ををしみ花を眺むる人とても、刹那のひまも無からんは狂氣ならめ。古へも云はずや、「ながむとて花にもいたし首の骨　宗因」名月や見つめても居ぬ夜一夜

さ　湖春」是人情の誠の風雅にして、飾らざる天然を知るべきなり。徂徠譯文筌蹄に曰く、終夜は通宵ヨリ曉マデニ至ルヲイフ。歷史醫書ナドニハ誠ニ夜通シノ心ナリ。文章詩歌ノ上ニテハ、切ニ思ヒ、ツヨク夜ヲ更スコトヲ見セン爲ニ、終夜ヲト云也ト云云。初學の爲に是を擧げて知らしむ。翁を狂氣人にする事なかれ。句意は人々月を見る心もて推すべし。尙風雅に正統なる説を俟つのみ。

錦繡段　八月十四夜　孫明復銀漢無聲露暗垂玉蟾初上欲圓時清樽素瑟宜先賞明夜陰晴未可知

敦賀にて

名月や北國日和さだめなき

元祿二年の吟也。奥の細道に、十四日の夕暮敦賀の津に宿をもとむ、其の夜月殊に晴れたり、あすの夜も斯く有るべきにやといへば、越路の習ひ、猶明夜の陰晴はかり難しと、あるじに酒すすめられて、下略、十五日亭主の詞にたがはず雨降る。と有りて此句見えたり○菅菰抄に、敦賀は越前の大湊なり。

名月や坐にうつくしき顔もなし

元祿四年の吟ならん。泊船集に有りて、此句の説初蟬集に見えたりと有り○自得發明辨に云、初蟬集下卷に「明月や座にうつくしき、と有り。此發句にて一歌仙あり。予寫し置きぬ。名月の名の字に明の字いかが、名月は八月十五日一日也、明月は四季共に通ず、明の字書く事あるや、書かぬ事とは聞き侍りぬ○夕顔の歌に「古寺翫月月見する坐に美しき顔もなし　はせを、庭の柿の葉裝虫となれ　尙白、火桶ぬる窓の手際を身にしめて　同」と兩吟の歌仙あり○句解曰「回」頭一笑百媚生、六宮粉黛無顏色」よく此心に叶へり○發句集に、此句の頭書に、忘れ水に、湖水の名月なり、見達並ぶ堂の緣、又名月や海にむかへば七小町、として、よからずと

發句集元祿四年とす

名の字の論寫突離陳にあり、夕顔の歌は尙白追善集なり、享保七年宰陀選、尙白は大津の住にて醫藥なり、初め貞室門、中頃風不卜門後に芭蕉門となる、左咽に瘤あり、晩年に瘤破れて死す

て此句になる、とあり○按ずるに、七小町の句は、和漢文様に、月見賦、米くるゝ友を今宵の月の客、名月や湖水にうかぶ七小町、三井寺の門たゝかばやけふの月、の句、元禄四年の西雲集にも有るによつて、元禄四年なるべしとす。月見の賦の事、此末三井寺の句の所に委し○赤草紙に、此句湖水の名月なり、名月や兒達ならぶ堂の縁、としていまだならず。名月や海にむかへば七小町、にもあらず、座にうつくしき、といふに定まる。

四の盤集は則元禄四年の集なり、加州の丿松選、一笑が遺書なり

何有放人野盤子は支考が別號なり

名月や二つ有ても瀬田の月

元禄四年閏八月十八日、石山參詣の吟也。西の雲集に、何有放人野盤子が石山參詣の序有りて曰、元禄のことしは秋も三十日に重りて、名月の興も更なり、歌人詩僧もいとまなく、萩露荻風になやまされて、奇を好み怪を好む、是等は人の世の道なるにや、吾ともがら風羅翁に隨ひて、山色水光の月を見盡して、人々手をたすけ腰をおして、又石山に詣でぬ、此夕閏八月十八日なり、日は音羽逢坂の麓より暮れそめて、霧横たはり、水鳴る、其間幾ばくもあらずして、月已に雲衢にたゝずむ、嘆じて立てるものは轟路の鈴の音に驚く、水の間〳〵の蘆花も一しほ露にきらめき、殘水芦花の音も人の肌膚にしみ渡りて、靈感も艾むべに崇し、況はや失意の秀便は秋の月の水に映ずるが如く、一月もく尽たらず、萬水ものぼらず、其眼前の境界のみ難有き秘現の姿なるべし、しばらく用の盡に蹲りて首を傾くるものあり、顧を支ふる者あり、知らず心のうち何事にかあらん、兎角して川のほとりにやすらひ、帽火などうち並べたれば、瓠頭の舊酩も折にふれて面白く、雛むひしらふものも、自ら興に乘じ自ら飲盡して、各、小船に込みのり、櫂をかさね、手を叉む、其方のしらとり茶店のあるじなど、遥に呼び聲々にのゝしりて、後の赤壁を待つといふもをかし。名月はふたつ有ても瀬田の月　鏡、船頭は

塩竈ふらくは塩

瀬田の子どもぞ水の月　珍碩、瀬田の月又來る筈に定りぬ

盤子、月影や鮠の飛び込む瀬田の船　楚口、と見えたり○句解に、瀬田の橋と有りてイに瀬田の月と小書あり○按ずるに、西の雲に、支考が文を見る時は、月の方なるべきか○物の親に、吏登曰、百ばかり名月あらば千松島、誰やらが句なり、是等が名所の片題なり、松島のけしきをかしくいはんとて、月は埒もなくなりたり。鶯も海向いて鳴く須磨の里、此里なる哉、此島まで海向いて鳴く、と二つながらに光をもたせねば片題なり。名月は二有ても瀬田の橋、此句ははせを翁なり。松島の句に詞は似たれども、句意違ひてよく月を賞したる所を味ひて見給へ。是にて片題はわかるべし○按ずるに、瀬田の月閏八月十八日故に、名月は二つ過ても此瀬田の月とにや。物の親いかに。

夏かけて名月あつきすゞみ哉

元祿六年の萩の露集に、殘暑、と前書ありて、此句幷に「名月や俗も拱く橋の上　岩翁」「よそに聞く月見の夜弓靜なり　遠水」「うるはしき聲よ若手の月見船　龜翁」○小文庫泊船集にも此句あり。

三井寺の門たゝかばやけふの月

元祿四年の吟なるべし。則其年の雜談集に、於義仲庵、と前書して此句有り。其評に曰、其夜を思ひ合せ侍るにも、名月に對して月を見る思ひ出もなく、我々の口質に切字を入れて、集會を紛らし侍るも本意なし○和漢文樣に、芭蕉月見の賦に、ことし琵琶湖の月見むとて、しばらく木曾寺に旅寢して、膳所松本の人人を催すに、乙州は酒を携へて泉川に三日の名を傳へ、正秀は茶をつゝみて信樂に一夜の夢をさます、今宵は茶といひ酒といひ荷擔の人も二派に分れて、酒堂は灯にかたぶきて、其茶に

玉川は盧同が樣號

米くるゝの句、此つれつれの法師といへるにあらざるか、

新千載　兼好

すめば又浮世なりけりよそすがら思ひしまゝの山里もがな、

東坡　赤壁賦

有レ客無レ酒、有レ酒無レ肴、或曰、聚レ網得レ魚狀如二松江之鱸一

拾遺愚艸下

さゞ波やちりもくもらずみがゝれて鏡の山を出づる月影

躬恒

しら雲に羽うちかはし飛ぶ雁の數さへ見ゆる秋の夜の月

三體詩　楓橋夜泊詩

月落烏啼霜滿レ天

蘇居士は東坡

東坡　西湖詩

若把二西湖一比二西子一淡粧濃抹兩相宜、

神仙傳に蓬萊之地、陸二地一爲レ海、海水不レ增レ泛二羽毛一、

漢武故事に

聚二芙蓉一掌承レ露

仙術を學ぶ事なり、

竹林は七賢の寄せ

松江は晉張翰在レ洛思二松江鱸一の故事

玉川が歌を詠じ、炎草は月にうそぶきて其酒に樂天が詩を吟ず、支考は君く木節は老いぬ、智月は物のおぼつかなう、かつぎのあまのなま浮びならず、それが中にも惟然法師は酒におどろき茶に感じ、貧むるもそしるも空に風吹て、愛に三子者の志をためさゝらんや、まして其外の友とする人も、峨々洋々の志を知れらば、すべては飲中八仙のあそびならん、鰒やつれ〳〵の法師だに、心をつくろはぬ友えらびは、斯る月見の佗なるやと、思ひしまゝの草の庵に、浮世の外の風狂をつくせり、「米くる友をこよひの月の客」かくて三盃の興に乘じて、湖水の月に船を浮べんと、物好む人の風情をそへたるに、杖に瓢箪の唐子はなけれども、扇に茶瓶の若男あれば、赤壁の船のとぼしさにはあらざめり、さゞ波や打出の濱の名にしあふ鏡の山も、さなたにさしむかひ、日枝は横川の杉につらなりて、比良の高根は雁をもかそへつべし、うしろに音羽の峯高く、石山の鐘は粟津の嵐に呀えて、そこに楓橋の霜も置きぬらん、矢橋の歸帆は今宵をもてなすに似たるべし、「名月や湖水に浮ぶ七小町」されば我朝の紫式部は石山に源氏のおもかげを寫し、唐國の蘇居士は西湖に越女のよそほひをたとふ、いづれも風雅の名に殘りて、今のまぼろしに浮ばざらんや、實にそも和漢の名跡なりけらし、さて松本に船さしよせて、茶店の欄干に心をはなてば、自ばよし蓬萊の水をへだてゝ身はたゞ芙蓉の露にうるほふ、竹の林の酒も時ならで、松が江の鱸はこよひなるをや、猶はたかたおく月の名殘には、唐崎の松もひとりや立てる、古き都の名もゆかしければ、尾花川の明ぼのをこそと、千那尚白をおどろかしぬれば、夜はほのぼや五更に過ぎぬべし、「三井寺の門たゝかばやけふの月」鼓や推敲のむかしながら、船にこよひの遊を思へば、此座に韓愈が文章をもあざむき、賈島が詩賦をもゝどきぬべき、詩人文客に同しからねば、たとへ赤壁の前後といふとも、

唐賈島、騎レ驢得レ句、島、推ハルル宿池中樹、僧敲月下門、推敲未レ定、引レ手作二推敲ノ勢一、時衝二韓愈一行隊、島其道レ所レ得、愈曰、敲字佳、並レ轡踏、爲ス二布衣交一

その地に此人をはづべきやと、見ぬもろこしを相手にとりて、今宵の風流をあらそふほどに、月は長等山の木の間に入りぬ、と有り○むつ千鳥に遷宮とて「蛤のふたみに別れ行く秋ぞ」と云捨て、伊勢に殘暑を凌ぎ、又湖水に立歸り、名月の夜は三井寺の門をたゝき、と見えたり○是を見る時は、蛤の句は元祿二年の秋なり、此年の名月は北國に旅寢して、北國日和定めなき、の吟あり、依てむつちどりにいふ所は、元祿三年か○其便集に、月は幻住庵にて、と前書ありて此句見えたり○笈日記湖南の部に、是もむかしの秋なりけるが、ことしは月の本末を見侍らんとて、待宵は楚江亭に遊び、十五夜は木曾塚にあつまる、十六夜は舟をうかべて、さゝ波やかた田に歸ると詠める其浦の月をなん見侍りけるに、路通が待宵に月をさだむるの文あり、支考が名月の泛湖の賦あり、阿叟は十六夜の辨を書て、竹内氏の所にとゝむ、此三夜を月の本末と號して、成秀楚江が二亭に侍り、

其便集は元祿七年長崎の泥足選なり
幻住庵は元祿三年の夏より四年の秋迄住居

既望賦本朝文鑑にも出でたり

文しげければ爰に記さず、十四夜「うかるなよ跡に月待宵の興路通」『待宵はまだいそがしき月見哉　支考』十五夜「米くるゝ友を今宵の月の客　翁」『五器足らで夜食のうちの月見哉　支考』十六夜「やす〳〵と出でゝいざよふ月の雲　翁」『十六夜や海老煮るほどの宵の間　同』其夜浮見堂に遊吟して「鎖あけて月さし入れよ浮見堂」○按ずるに笈日記のおもてにては、此吟十六夜の辨同頭の吟と見えたり、其文は、小文庫に、堅田十六夜の辨、望月の殘興尚やまず、二三子いさめて舟を堅田の浦にはす、其日申の時ばかりに、何某茂兵衛成秀といふ人の家のうしろに居たる醉翁狂客月にうかれて來れりと聲々に呼ばふ、主思ひかけず、驚き喜びて、簾をまき座をはらふ、園中に李あり、さゝげ有り、鯉鮒の切目たゝさぬこそいと興なけれと、岸上に筵をのべて、宴をもよほす、月は待つ程も無くさし出で、湖上花やかに照らす、かねて聞く仲の秋望の日月浮御堂にさしむかふを鏡

山家集に
中々に折々雲のかゝるこそ月をもてなすかざりなりけり

新勅撰　定家
あけば又秋の半も過ぎぬべし傾く月の惜しきのみかは

梁興而行、興盡而返、世說王子猷が故事

山といふとかや、今宵しも猶そのあたり遠からじと、彼堂上の欄干によつて、三土水蓋の岡南北に別れ、その間にして峯引きはへ、小山嶺をまじふ、兎角いふ程に、月三竿にして黑雲の中にかくる、いづれか饒山といふとをわかず、主のいはく、折々雲のかゝるこそと客をもてなす心いと切なり、やがて月雲外には出て、金風銀波千體佛のひかりに映ず、彼のかたふく月の惜しきのみかはと、京極黃門の歎息の言葉を取り、十六夜の空を世の中にかけて無常の觀のたよりとなすも、此堂に遊びてこそ、再び惡心の僧都の衣もうるほすなれといへば、あるじ又云、興に乘じて來れる客を、など興さめて歸さむやと、もとの岸上に盃を揚げて、つきぬ横川に至らむとす、「鎖明けて月さし入れよ浮御堂　はせを」「やす〳〵と出でゝいざよふ月の雲　同」と見えたり○按ずるに、笈日記に、十六夜に、やす〳〵と、の句はありて、名月には、米くるゝの句有りて、三井寺の句見えずといへ、共名月の賦には、米くるゝの句も、三井寺の句も、同夜の吟と見えたり。是同時の吟と見る時は、笈日記の文に、此三夜の月見に、待宵に月を定むるの文を路通書きたり、とあり。路通元祿三年は奥羽行の年なり。勸進帳に、白川の關にて「名月や衣の袖をひらつかす　路通」と見えたり。路通元祿三年四月東武より旅立の日に「いでや空卯の花ほどは咲るとも　路通」句のうへ思へはる〳〵の旅　其角」脇あり。夫より六月のはじめ月山にて會覺阿闍梨に呂丸など催して、句合の判あり。則ち其名月白川と見えたり。しかれば三夜の月見は元祿四年なるべし○粟津が原に、湖水の月におの〳〵棹さして、「三井寺の門たゝかばやおぼろの月」「元月下門頓に移り、三井寺と湖水と睨みよく、列座感を催しける、是又人口にとゝまる。

勸進帳は元祿四年路通選

粟津が原は枕詞選

こよひ誰よし野の月も十六里

伊賀住
蓑虫庵桐雨
蜜柑の色集の選者、其序に其號あり

元祿七年八月十五日伊賀の古郷にての吟なり。笈日記伊賀の部に、八月十五日と有り。此行は元祿七年の五月東武を立て、古郷に玉まつりせし終焉の年なり○句解に、蓑虫庵、と前書有て評に曰く、新古今集に「こよひ誰篠ふく風を身にしめてよしの嶽の月を見るらん」頼政の歌なり。蓑虫庵、祖翁の古郷伊賀の山中なり。此句の十六里は山中より芳野への行程なるべし○評林に云、新古今頼政の「こよひ誰すゝ吹風を身にしめてよし野のたけの月を見るらん」此歌によるなり。二千里の外を十六里になして、よしのゝ嶽の高程を行歩の趣向にや。此歌の心は芳野のたけの月を誰かは見るらん我ばかりこそ心をとゞめて一輪の靜なる夜光を見るなれ、と自讃の心なるよし、法印玄旨の說なり。發句も是にもとづくなり。深意可尋事なり。後の人心に有るべし。予才無く聊かたどり難し○說叢に、評林を難じて云、引歌はあたれり、二千里の外を十六里にして高程を行歩の趣向とは文段一向に聞えず、いかゞなる意にや、いぶかし。町間を打人の股から見ても知れず。又高程の字解せず。もし行程の誤りか。又はよし野の嶽の高程とあれば、高き程の心にや、何ともいぶかしくこそ。句解あたれり。但すゝ吹風に身をしめてとは、てには相違なり、書誤りなり、證歌などは能くもたゞして記すべきをや。新古今聞書宗祇註云、すゝ吹とは、ちひさき竹の事（すゝは小竹なり、萬葉に篠の字本に誤りて薄とす）此よし野のたけの月を誰か見る、我こそは身にしめて見れ、とよめるといへり。然れば我のみかゝる所の月を見ると、自讃のやうなれば、よし野の嶽の月を思ひやりてよめる、と見て然るべきをや。此心にて猶作者の心おもしろきをやと云々。句意は今宵の月の清光を誰人かよし野にて見るらん浦山しさよ、近くあかせば我もおとらじを。十六里へだてぬれば容易からずと、只其夜の芳野の月を思ひやりたるなるべし。思ひやりて吟せしと見て可然也。尙作者の心おもし

ろきをや。

米くるゝ友をこよひの月の客

元祿四年の吟なるべし。月見の賦前の三井寺の句に委し○此句泊船集にも見えたり○古今抄にを廻しの證句に「青くても有るべきものを唐がらし」「米くるゝ友を今宵の月の客」と有て、東花坊曰、此二章は湖南の遺稿にありて、前は其庭の唐がらしの色にさへ秋のくれなゐを稱し、後は三井寺の名月に貧閑を興ぜられし俳諧の亭主ぶりなり○評林曰、徒然草に益者三友の事あり、一には物くるゝ友なり、それを月見の賞翫として佗びられたる風流なるべし○つれ〳〵草に、友とするにわろき者七有り、一には高くやんごとなき人、二には若き人、三には病なく身つよき人、四には酒を好む人、五には武くいさめる人、六には虚言する人、七には慾ふかき人、よき友三有り、一には物くるゝ友、二にはくすし、三には智惠ある人、と有るに、鐵槌抄に云、論語、益者三友損者三友とあるにもとづけりと見えたり○頓阿集に、世の中のしづかならざりし頃衆好が許より、よねたまへ錢もほしといふ事を沓冠におきて「よもすゝし寢ざめのかりほ手まくらも眞袖も秋に隔てなき風」「返し」「よねはなし、せにに少し、よるもうしねたくわがせこはては來ずなほざりにだに暫しとひませ」。

雲をり〳〵人を休る月見かな

貞享三年の春の日集に、やすむる、と有り○續虚栗に同じ○孤松集には、休める、と有り○扁突又同じ○泊船集句選に同じく、假名なく、休る、と見えたり○東西夜話に、求聽文通に、雲をりを人を休る月見哉、御紙面之通り先師に此類三四句ありて度度連歌師にねらはれ、我等も心むづかしく、定めて是等も雲に

蕉椒の句は深川塢に有て酒堂元祿五年深川の庵なとひし時の吟なり

つれ〳〵草の邪、月見賦の註、和漢文操に見えたり、

論語、季氏、孔子曰、益者三友、損者三友、友レ直、友レ諒友レ多聞、益矣、友レ便辟友レ善柔、友レ便佞損矣

古今集
世の中にたえて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし

休むは月の不賞翫と申事に而可有候、さる格式にほだされたる人は芭蕉もよほどつくされたりなど同じ妄昧そしり合はば煎茶ふるまひ早くいなせたるが能御座候、それ月は目にて見るべからず櫻はたえてなからましかばといふ人は物のあくまで見るまじきいさめにて可有候、世の人おのれが女房に見あきたるも絶ゆる所なければ戀しからず、男女の情も羽子板の夫婦にならひたらんは、云事も盡きぬべし、雲折々の休らひに人目の關を越えかね、又はほのかに相見てし心の嬉しさいはん方あらじ、花は終日にながめ月は夜すがら見むといふ人ならば、戀の部におきても、なめくじりの浮名とりぬべし、或人曰、此句は何がしの歌にてせられたりといふげに候へども、連歌などには古詩古歌にもたれてする事も有るにやあらん、我俳諧は我心の物ずきにいひちらすに、跡にて其詩に其歌に似たりと云は、見る人の評判なれば、是非なくそのとほりに御座候、古詩古歌を知らねば、此發句は濟まぬといふは、古人の粕をねぶりて不自由なる事にて可有候、先師の心は月のひたすら隈なきはをかしからぬに、雲の折々かくれば、眠もやすみて面白いといふ事なり、それに何の古歌もへちまも入まじき句なり、されば雪月花時鳥は天にもあらず地にもあらず、我たものなぐさみものなり、糞とも味噌ともいひ、人參附子ともあがめて、四季に心やすき出入のものと思ふべし、譽めてをかしき時は賞め、そしりてをかしき時はそしりて遊ぶべし、ほむるもそしるも心にとゝめざれば、あれは氣一物の人なりとて、月花も腹はたゝぬものなり、すべて格式は馬の綱なり、脇道に行くまじくは綱つけて何しに苦しめん、道を知る時は、老聃莊周釋迦孔子も道のための奉行なり、文章を知る時は、人丸赤人宗鑑宗長も文章のための日傭なり、我等も芭蕉より俳諧の上手あらばやがて師匠を乘かふる合點に而候、彼月見の句難じたる

目圍に此歌なとりてせしと有り、杉雨が發明にはあらず

山家集に
なか〳〵に時々雲のかかるこそ月をもてなすかざりなりける

少してには遊へり
又同集に
なか〳〵にくもるとみえてはるゝ夜の月はひかりのそふこゝちする、
姓司馬、號道子、謝重字景重、世說

人によろしく御心得たのみ入候　求聽丈　東花坊、と見えたり○評林に、西行「中々に時々雲のかゝるこそ月をもてなすかぎりなりけれ」との歌にもかなひ侍らん○說叢に、再考するに、世說に曰、司馬大傅、齋中夜坐、時天月明淨、都無纖翳、大傅歎以爲佳、謝景重在坐、答曰、意謂乃不如微雲點綴云々。是和漢人情の風流おなじ。此事ありて西行の歌も出で、兼好つれ〳〵の四季の段にも、西行の詞を汲みとりし也。翁は古の人々の云ひし糟をなめず、月をも人をも休ませる、こゝを古今獨步の粉骨と賞すべき事なりけらし。扨此世說の古事引出すにも及ばぬ事に侍れど、斯くの如くの穿鑿せば、いか程も古事は取合すべけれども、翁の風骨にあらざる媚人のしわざと知るべし。今の句解どもいづれもかゝる無益の事多く記し出だすに准じて了解あるべし。予此古事を出して無益の解の手本とする事然り○或人曰、此句は上總國市原郡五井村自昌院にて、自分の像を自ら

真享四年鹿島紀行　佛頂和尙
折々にかはらぬ雲の月かげもちゃのなかめは雲のまに〳〵、
鹿島詣は芭蕉の眞蹟にして常陸の潮來の住、本間自準が家につたへ其孫齒江は祖父自準が業を繼て醫師なり、俳諧は柳居門人なり、其紀行近世に出板、伊勢の彥滿後序を書く、此芭蕉の眞蹟の末に真享丁卯仲秋末五日と有り、則ち此八月の吟なるべし、丁卯は真享四年なり

書し、此發句を書てあり。院主の物語に、さいつ頃芭蕉こゝもとに來りて、二三日逗留、月あかき夜此書讃有りけるとなり、信疑未決。

寺に寢て誠がほなる月見かな

真享四年の續虛栗に、鹿島詣しける頃、夜根本寺、と前書あり○鹿島詣芭蕉の文に曰、洛の貞室須磨の浦の月見に行きて、松陰や月は三五夜中納言、といひけん狂夫の昔もなつかしきまゝに、此秋鹿島の山の月見んと思ひ立つ事あり、伴ふ人ふたり、ひとりは浪客の士、一人は水雲の僧、僧は烏の如くなる墨の衣に三衣の袋を襟にうちかけ、出山の尊像を厨子にあがめ入れてうしろに背負ひ、柱杖ひきならして無門の關もさはるものなく、あめつちに獨步して出でぬ、今ひとりは僧にもあらず俗にも非ず、烏鼠の間に名をかうふりの烏なき島にもわたりぬべ

くて、門より舟に乘りて行德といふ所に至る、舟をあがれば馬にも乘らず、細はぎの力をためさんと、歩行よりぞ行く、甲斐の國より或人の得させたる槍もてつくれる笠を、おの〳〵いただきよそひて、八はたといふ里を過ぐれば、かまかひの原といふ廣き野有り、秦甸の一千里とかや、目も遙に見渡さるゝ筑波山むかふに高く、二峰ならび立てり、彼唐土に双劒の峯ありと聞えしは廬山の一隅なり、「雪は申さず先づ紫の筑波哉（イに山）」と詠せしは我門人嵐雪が句なり、すべて此山は日本武尊の言葉を傳へて、連歌する人のはじめにも名付けたり、和歌なくば有るべからず、句なくば過ぐべからず、誠に愛すべき山の姿なりけらし、萩は錦を地に敷けらんやうにて、爲仲が長櫃に折り入れて都のつとにもたせたるも、風流にくからず、桔梗女郎花刈萱尾花亂れ合ひて、小男鹿の妻戀ふ聲いとあはれなり、野の駒所得がほにむれありく哀なり、日既に暮れかゝる程に利根川のほ

無言抄曰、
夫連歌、人皇十二代景行天皇四十年日本武尊東夷征伐の時甲斐國酒折宮にて新治筑波の嗣より起れり
日本紀卷の五
耳比慶利苑玖波塢須擬（ニヒハリツクハテスキ）氏異玖用加禰苑流（ディクヨカネツル）
諸侍者不レ能レ答、時有二乘燭者一續二王歌之末一而歌曰、

伽餓奈倍氏用珥波虚虚（カガナヘテヨニハココ）能用比珥波苫塢伽塢（ノヨヒニハトテカヲ）

根本寺開山佛頂和尚は芭蕉の師なり

とり、ふさといふ所に着く、此川にて鮭の網代といふものをたくみて武江の市にひさぐものあり、得の程其漁家に入てやすらふ、夜の宿なまぐさし、月隈なくはれけるまゝに、夜舟さし下して鹿島に至る、壹より雨頻に降りて、月見るべくもあらず、麓に根本寺の先の和尚今は世をのがれて此所におはしけるといふを聞きて、尋入てふしぬ、頗る人をして深省を發せしむと吟じけん、しばらく清淨の心を得るに似たり、曉の空いさゝか晴れけるを、和尚起しおどろかし給ふれば、人々起き出でぬ、月の光雨の音たゞ哀なるけしきのみ胸にみちて、いふべき言の葉もなし、はる〳〵月見に來たる甲斐なきこそ本意（ほい）なきわざなれ、彼何がしの女すら郭公の歌得詠まで歸りわづらひしも、我ためにはよき荷擔の人ならんかし、折々にかはらぬ空の月影もちゞのながめは雲の間に〳〵　和尚『月はやし梢は雨を持ちながら　桃青『寺に寢てまこと顔なる月見かな　同『雨につれ〳〵草に、月はく

まなきたのみ見るものかはの段
椎柴しらかしなどのぬれたるやうなる葉のうへにきらめきたるこそ身にしみて心あるらん友もがなと都こひしく愁ゆれすべて月花をばさのみ目にて見るものかは

發句集元祿二年とす蓑笠の種は元祿七年猶今選

寢て竹起きかへる月見哉　曾良『月さびし堂の軒端の雨しづく　宗波』○風俗文選に、此文ありて、月はやしの句はあれども、此寺に寢ての吟は見えず、雨に寢ての曾良が句は見えたり○泊船集に、此句は鹿島にまうで給ひて根本寺にての口號なるよしと見えたり。

月見せよ玉江の芦を刈ぬへき

元祿二年八月十四日越前にての吟なるべし○蓑笠の種集に、一とせ芭蕉越路に至り古き名所を尋ねて月の十句を或人語りければと、過ぎ行く年月の程經て覺束なし、耳の底に纔に殘る三四句を記してとめぬ、『淺水橋、あさむつや月見の旅の明はれ』『玉江、月見せよ玉江の芦を刈らぬ先』其外三句見えたり○奥の細道紀行に、名月は敦賀の湊にと旅だち、等栽も共に送らんと裾をかしうからげて路の枝折と浮かれ立つ、漸白根が嶽

菅菰抄方角抄に
雁がれの花飛びこえてかへる山霞も峯にのぼるものかな是等の歌よりして初雁を聞くとは申されしなり、
玉江は攝津越前兩國にあり、越前玉江は、三嶋江の玉江の蘆なしめしよりおのがとぞおもふいまだからねど　人丸

かくれて比那が島あらはる、あさむつの橋をわたりて、玉江の芦は穗に出でにけり、鶯の關を過ぎて湯尾峠を越ゆれば、燧が城かへる山に初雁を聞きて、十四日の夕ぐれ敦賀の津に宿をもとむ、とあれど、此句は見えず○按ずるに、泊船集に、刈ぬさきと假名見にくし、よつて句選見あやまりて、刈ぬへき、と書けるにや○菅菰抄に、玉江の橋は、此順道にて見る時は、あさむつより前に書くべし、福井と麻生澤との間に有り、福井の町を上の方へ出はなれ、二丁ばかり行けば、赤坂といふ所あり、是を過ぎて往還に石橋三あり、其中の橋の高欄の付きたるを、玉江の橋の跡として、此川を古の玉江なりと云。後拾遺『夏かりの玉江の芦を踏みしだき群れゐる鳥の立つ空ぞなき　重之』○按ずるに、新續古今に『月影もやどり定めぬしら露の玉江の芦に浦風ぞ吹く　稱名院入道內大臣』。

座頭かと人に見られて月見哉

何れの年の吟にや、泊船集に見えたり。

十六夜はわづかに闇のはじめ哉

元祿七年の續猿蓑に見えたり○鄙の會紙に、蕉庵、と前書あり て、句は、とり分、と見えたり。脇に「鵜舟のあかをかゆるさび鮎 濁子」「近道に鶏頭畠をふみつけて 岱水」と第三ありて、依々馬 莧曾良凉葉共に七吟の歌仙あり○鞠塞にもあり。句は、とり分、 とあり○句選頭書に、泊船集に、とりわけ、と記せるはたがへり と。此頭書誤れり。泊船集に、わづかに、と見えたり○山家集に「世 の中に心あり明の人はみなかくて闇にはまどはぬものを」、惜 しからぬ身を捨てやらでふるほどにながき闇にやまた迷ひ なん」○古文前集に、盧同が詩に、娟々姮娥月、三五盈又缺。

我句集に元祿六年とす、按ずるに七年五月上方行脚東武を立つ、さすれば六年の吟ならん

いざよひもまた更科の郡かな

貞享五年名護屋より越人と共に更級の月見に遊杖の時の吟 なり。笈の小文の末に見えたり○曠野名所の部に有り○いつ を昔、小文庫、俳番匠、泊船集等にも見えたり○按ずるに笈の小 文に、此時越人が句に「更科や三よさの月見雲もなし」と見えた れば、其清光おしはかられ侍る○壬生山の金龍庵に芭蕉の眞 蹟一軸ありて、しなの丶國さかきといふ所にて、と前書見えた り。

壬生山家集は下總國東金雨林選なり

うち出の濱にて

いざよひや海老煮るほどの宵の闇

元祿四年に湖上の住何某茂兵衛成秀亭の吟なるべし。笈日記 并十六夜の辨の趣、三井寺の句の所に委し○類柑子に前書句

選の如く見えたり○十七ヶ條には、下を、宵の影、と有り○師走俳に、是は魏志に、南海中に國あり、日暮れて羊の腸を煮てはつかに熟すれば則ち月を見る、といへるを取て、いざよひの月はわづかに海老煮る程の宵闇なりと、羊腸を海老にかへての作なり○按ずるに此説あたれるや知らず。

杜律に、九日詩明年此會知誰健」

いざよひのいづれか今朝に殘る菊

嵐雪かくれ家の句あら野に出でたり

貞享五年の句なるべし。笈日記武江の部に、素堂亭十日菊、蓮池の主翁又菊を愛す、きのふは龍山の宴をひらき、けふは其酒のあまりをすゝめて、狂吟の戯れとなす、尚おもふ明年誰か健ならん事を、と言葉書ありて「十六夜のいづれか今朝に殘る菊はせを」「殘菊はまことのきくの終り哉　路通」「咲く事もさのみ急がじ宿の菊　越人」「きのふより朝霧深し菊ばたけ　友五」かくれ家や嫁菜の中に殘る菊　嵐雪」「此客を十日の菊の亭主ぶり　其角」「さか折のにひはりの菊とうたはゝや　素堂」中略○芭蕉庵十三夜月をもてあそびてたゝ月をいふ、越の人あり、筑紫の僧あり、誠にうき草の殘らず水にあへるが如し、主も浮雲流水の身として石山の盃にさまよひ、更級の月にうそぶきて庵に歸る、未だいくばくもあらず、菊に月に催されて吟身いそがしい哉、花月も此爲に暇あらじ、思ふに今宵を賞する事滿つればあふるゝの悔あればにや、中華の詩人わすれたるに似たり、まして百濟新羅に知らず、我國の風月にとめるなるべし○「もろこしに不二あらばけふの月見せよ　素堂」「影ふた夜たらぬほど照る月夜哉　杉風」後の月たとへば宇治の卷ならん

菊に月にもよほされてこの文前の十日菊ないへるなるべし

素堂の句、あら野にも見ゆ

越人「あかつきの開もゆかりや十三夜　友五」「行先へ文やるはての月見哉　僧水」後の月名にも我名は似ざりけり　路通」「我身には木魚に似たる月見かな　僧宗波」「十三夜まだ宵ながら最中哉　石菊」「木曾の痩もまだ直らぬに後の月　芭蕉」○句解

に、此句月の部に入れたる集あり。素堂亭殘菊の句なり、可考○按ずるに、句解の説あたれり。笈日記のおもて見るべし。此句貞享五年とする事は此年八月の末東武に歸庵のよし芭蕉傳に有り。又笈の小文にも、貞享四年冬東武を旅立ちて「旅人と我名呼ばれんはつ時雨」の吟、夫より伊賀に年取りて、翌五年越人同道よし野を經、更科に月を見て東武に歸る。依て十三夜に、木曾の痩もの吟あり。又贅野集は元祿二年の選、貞享五年則ち元祿改元の年、其選に、嵐雪杉風素堂の句見えたれば、かた〳〵貞享五年の句なるべし。翁草には、いつしか今朝に、とあり。

やす〳〵と出でゝいざよふ月の雲

元祿四年の吟なるべし、三井寺の句の所に委し、見合はすべし、古今抄に中の切「猫の戀やむ時闇の朧月」「やす〳〵と出でゝいざよふ月の雲」やむ時何々、出でゝ何々とそこに心詞を殘す故

いざよふなみ
合瓶
俳徊波

に心切にかゝはらねど、此切は一句三節なるを、句絶の處を切らずして、七文字の中を二段に分る故に、中の切とは別名せり、和歌にも斯る句續ありて讀師の人の習ひとやらん有職の人には聞傳へ侍りき○此句小文庫にも見えたり○或行脚の僧云、こゝにて附あり、脇「舟をならべて渡す霜　成秀」

木曾の痩もまだ直らぬに後の月

貞享五年の句「いざよひのいづれか今朝に殘る菊」の句の所見合はすべし○乘燭談に曰、九月十三夜中秋と同じく月を賞すること其所以を詳にせず。徒然草に中秋と同じく婁宿なりと云ふ。○抄物に吉備公の傳など云ふ説有れども確かならず。五雜俎天文部に、九月十三晴釘靴挂斷繩と云ふことあり、此日晴れば久しく晴ると云ふことあり、先人大府清公此月の會に詩を乞ひ給ふによりて此事を用ふ。然れども明の時田家雜占の晴

保延は七十五代崇德院年號、寛平は宇多天皇號、五十九代

雨にしるすの藷語にて、さして明月にあづからず、前年山本通春と云浪士あり、考彰館より寫し來る由にて、中右記の内にて抄出して、示さる。保延元年九月十三夜曰、今夜雲淨月明、是寛平法皇今夜明月無双由被仰出仍我朝以九月十三夜爲明月夜也、此文にて其始め明かなり。さのみ深き義理有るにあらず、一時天子の叡賞により後來永く例と成して期とするなるべし、下略。其終に云、釘靴と云は今京師にて鄙人のはく靴、つなぬきと云物にて、天氣よきに因て壁に挂けて置くとなり○又東見記に、九月十三夜翫月の事は延喜の時に始まると云事、建仁寺の三益和尚十三夜の詩の序に書之。又北野天神の縁起にも、去年今夜侍清涼と云句も流罪の前年の九月十三夜と見えたり。

住吉にて

升買うて分別かはる月見哉

元祿七年の吟也。笈日記難波の部に、前後日記に、去年元祿の秋九月九日奈良より難波津にわたる、生玉の邊より日を暮して菊に出て奈良と難波は宵月夜　翁今宵十三夜の月をかけて住吉の市に詣でけるに、壹の程より雨降りて吟行靜ならず。殊に暮々は惡寒になやみ申されしが、其日もわづらはしとてかいくれ歸りけるなり、次の夜はいと心地よく哇止亭に行きて前夜の月の名殘をつぐなふ、住吉の市にて、と詞書有りて此句あり○按ずるに其十月十二日は難波の旅宿に終りて此日記に見えたり。されば元祿七年の吟とす○句解に曰、莊子に斗斛成而天下人始爭、是等に叶へり。升買うて物はかる事を思ひ、隱士の分別の替り所もかゝる所より出づべしとぞ。誠に句情尊むべし○わくかせわに、住吉寶の市十三日夜升市なり。買求めたる升を以て日用を達する者は富家に成ると云ひつたふ、故に、寶の市と名づくと云々○糸切歯にわくかせわを難じて曰

莊子胠篋篇に爲二之斗斛一以量レ之則并二與斗斛一而竊レ之、爲二之權衡一以稱レ則并二與權衡一而竊レ之又曰、剖レ斗折レ衡而民

く、寶の市十三夜とはいはん、是芭蕉翁の、升買うて、の句より夜と心得られたるが誤りなり。通俗志には、寶の市非夜分と有り、又苧環に住吉相撲會市（十三日寶の市ともいふ）と有り、是をだまき正説なり。いづれにあらず。竹亭存命ならば嘸をかしかるべし。此御神事は角力會と申すなり。往古は種々の寶の市有りしとなり。今は升のみなり。下略。又曰、寶の市は諸國市のはじめ當社に市を守る神在り。日の宿禰の室の市姫の命是を守る神なり○師走袋に、是世人は住吉の市にて升を買うて世渡りを斗るならひなり。我も世につれて升買ひけるが、月のおもしろきを見て、升買うたる時の分別とは替り、一入月を見る心になりたるとなり。升買ひしは世間氣、月見るは風雅、ふりかはりたる翁の風情推量るべし○説叢師走帋を難じて曰、一向の妄註取るに足らず。翁の心何とて世間風雅氣と二あらんや、ありては翁にあらず。世渡屏の僧などのなす所なり。凡俗の上より註をまうくる事甚不埒なり、句解はあたれり、莊子誠に然り○去來抄に曰、此句如何、去來曰、分別のかはるといふ中の七文字見難し、發句は殊更に其人の身に當て見るべし、升といふものは世帶の道具なるに、此升買うて後は鍋もほしく桶もほしく世の中の隱居此筋よりあやまるを鑑には申されしにやと云々。

三日月や蕣の夕べつぼむらん

天和三年の庵栗に、朝顔の夕、と見えたり○泊船集に、夕と見ゆれども字形慥ならず。此句は延寶の末天和のはじめの吟なりし、とあり○句解に、三日月の出づる頃を此花の夕と見て、蕣はしぼみ、槿花は含むらんといへる俳諧の手づまなり。或集に、此句を「三日月やあさかほの名べつぼむらん」と出せり。夕と名との書寫の誤りにやあらん。

三日月の地はおぼろなり蕎麥畑

三日月日記は羽黒の呂丸所持同國竹江につたへ、又佐川氏李夕に傳へ遊二龍人となつて享保十五年出版

大和物語
みな人は花の衣になりぬなり苔のたもとよかわきだにせよ

元祿五年の吟なるべし。三日月日記に、素堂の序に、我友芭蕉翁月にふけりていつはとはわかぬものから、殊に秋を待わたりて求なし、ある時は敦賀の津にありて、越のみづうみにさまよひ、其さきの秋は石山の高根にしばし庵を結びて琵琶湖の月を詠じ、二とせ三とせをへだて丶此心の秋に共にあふなるべし。文月のはじめは蚊のふせぎも靜ならず、玉祭る頃は是にかたらひ、有明の頃下弦の頃も雨のさはりのみして、初秋は喜れぬ、中の秋に至りて、はつ月のはつかなる頃より、夜毎に名月の思ひをなし、曇りみ晴れみ扉をおほふ事稀なり。我庵近きわたりなれば、月にふたり隱者の市をなさんと自ら申しつることぐさも古めきて、入來りたる人々にも句をすゝむる事になりぬ。二十日より隱の實ありて、名の世にあらはるゝ事月の頃なるべし。我身はくもれと捨てられし西行だにくもりもはてず、苔の衣よかわきだにせよとかくれましますゝ遍昭も隱れはてず、人の呼ぶに任せて僧正とあふがれ給ふも、猶風流のためしならずや。此翁のかくれ家も必ず隣あり、名もまた呼ぶにまかせらるべし。隱にして進むも哀れ三日の月　素堂「三日月や地はおぼろなる蕎麥畑　はせを」と見えたり。

何事の見たてにも似ず三日の月

真享五年の吟なるべし。笈日記尾張の部に、大曾根成就院の歸るさに、と前書有りて、句は「有とあるたとへにも似ず」と見えたり○曠野には、句選の通り見えたり○按ずるに、芭蕉真享元年の野ざらし紀行は、同二年夏東武歸庵にて「夏ごろもいまだ虱を取り盡さず」の吟あり。真享四年に笈小文紀行、冬十月東武を立て、旅人とわが名呼ばれん初時雨」の吟有りて、翌五年名護屋遊杖、それより越人同道にて、八月さらしな紀行有り。其頃の吟なるべし○泊船集にも大曾根成就院にて、と有りて「ありにあ

句選てには迄へり

納經帳
伊賀國にも成就院と云あり、同名にて別院か、曠野は元祿二年の選、元祿二年は奥羽行脚、其年、二見にわかれ行く秋の吟あり、此年にては有るまじくや

磯の鳳
かすむ夕の遠山まゆすみの色に三日月の影を舟にもたとへたり又水中の遊魚はつりばりと疑ふ空上の飛鳥は弓のかげとも驚く

るたとへにも似ず」と見えたり○本朝文粹、菅三品文時、機月賦に、游魚疑沈餌於碧浪、旅雁驚虚弓於紫烟。

嵐蘭初七日詣墓

見しやその七日は墓の三日の月

元禄六年の吟なるべし。嵐蘭は元禄五年の秋芭蕉庵にて酒堂許六と深川集の吟有り○裏若葉に嵐蘭の誄有り、金革を掛としてあへてたゆまざるは士の志なり、文質偏ならざるを以て君子のいさをしとす、松倉嵐蘭は義を骨として質を腸にし、老荘を魂にかけて風雅を肺肝の間に遊ばしむ、予とちなむ事十とせ餘り九とせにや、この三歳ばかり官を辭して、岩洞に先賢の跡をしたふといへども、老母を荷ひ稚子をはだしとて、いまだ世波にたゝかふ、されども榮辱の間に居らず、日々風雲に坐して今年仲の秋中三日由井金澤の波のまくらを月をそふとて、鎌倉に杖をひき、其歸るさより心地なやましくて、終に息絶えぬ、同じき二十七日の夜の事にや、七十の母に先だち七歳の稚子に思ひを殘す、いまだ惜むべき齢の五十年にだに足らず、公の爲に腹おし切でも悔むまじきうつはものが、はかなき秋風に吹きしをれたる草の袂いかに露けくも口惜しくも有るべきと、今はの時の心さへ知られて悲しきに、老母のうらみはらからの歎き、したしき限りは聞傳へて、ひとへに親族の別れにひとし、今年曉月ばかりに、稚子が手をとりて、予が草庵に來りて、彼に號得さすべしと云ふ、彼王戎五歳の眼ざしうるはしければ、戎の一字を合せて嵐戎と名づく、其悦べる色今目のあたりを去らず、生ける時むつましからぬだに、なくてぞ人はしのばるゝ、習ひ、まして父の如く子の如く手の如く足の如く年頃馴れむつびたる面影愁の袂にむすぼれて、枕も浮きぬべきばかりなり、筆をとりて思ひを述べんとすれど才拙く、いはん

四行談抄
ある時はありのすさみ
ににくかりきなくてぞ
人は恋しかりける

とすれば胸ふさがりて、只おしまづきにかゝりて夕部の雲にむかふのみ、「秋風に折れてかなしき桑の杖」、初七墓にまうでゝ「見しやその七日は墓の三日の月　はせを」長月三日なればなり。此悼の詞は、翁存生の時病心をなやまして書きつゝりけれども、とて懐中し來り給ひて、追善興行の事共まで相談に及びし時、予が机の端に殘されたるなり。下略○笈日記雲水の部に悼の文此二句見えたり○風俗文選には、此文と秋風の句ばかり有て、三日月の句は見えず○按ずるに、嵐蘭は東武の住にして、元祿五年の秋冬深川の庵に於て、洒堂許六と共に深川集の吟あり、是を見る時は元祿六年八月二十七日沒して其九月三日の吟と見えたり○山家集に「名殘さへ程なく過ぎば悲しきに七日の數を重ねずもがな」

常陸へまかりける船中にて

明ぼのや廿七夜も三日の月

貞享四年孤松集に、明行や、と有り、詞書はあらず○泊船集小文庫共句選の如く見えたり○つれ〴〵草に、花はさかりに月はくまなきをのみ見るものかは、の段、望月のくまなきを千里の外まで詠めたるよりも、曉近く成りて待出でたるがいと心ふかう青みたるやうにて深き山の杉の梢に見えたる木の間の陰うちしぐれたる村雲がくれの程またなく哀なり、亦同草紙に、松の絶間よりはつかに月のかげろひて見えけるを「影うすみ松のたえ間をもり來つゝ心ぼそくや三日月の空」。

深川の末五本松といふ所に船をさして

川上と此の川しもや月の友

元祿七年の續猿蓑に、前書ともに斯くの如く見えたり○泊船

集にも同じく有り○按ずるに、葛飾の素堂を思ふにや、王子猷が戴安道を思ひて雪夜の月に舟を浮べし事も有りしにや、

淺水の橋を渡る時俗あさうつといふ清少納言の橋はと有一條あさむつのと云る所なり

あさむつや月見の旅の明はなれ

元祿二年八月十四日の曉に越前國淺水の橋にての吟なるべし。奥の細道紀行に、名月は敦賀の湊にと旅だつ、等栽も共に送らんと裾をかしうからげて路のしをりと浮かれ立つ、漸白根が嶽隱れて比那が嶋あらはる、あさむつの橋を渡りて玉江の芦は穗に出にけり、鶯の關を過ぎて湯尾峠を越ゆれば燧が城かへる山にはつ雁を聞きて、十四日夕暮敦賀の津に宿を求む、と有り。然れども此記行中に此句見えず○元祿三年の其袋に見えたれども前書はあらず○蚤寢の種に、一年芭蕉越路に至り告き名所を尋ねて月の十句を或人の語り（此文段玉江の宵の何の所に記すされど月の句淺水と玉江のみあり て五句の所三句のこれり依之）湯尾峠月を名をつゝみかねてやいもの神　砥山「義仲の寢覺の山か月悲し」　湯月のみか雨に相撲もなかりけり」と五句見えたり○按ずるに、奥の細道の文に此五句の名所のあれば、蚤寢の種の詞書といひ、かた〳〵奥羽行脚の吟なるべし○泊船集、句選の如く前書見えたり○清少納言枕草紙に、橋はあさむつのはしながらの橋あまひとの橋、下略。

山寒しこゝろの底や水の月

何れの年の吟にや未知、二十五條に見えたり○按ずるに秋の部に出せる不審、追而可考、夜寒なるか。

俤や姨ひとり泣く月の友

貞享五年越人と共に名護屋より旅立て更科の月見の時の吟なり。姨捨山と前書ありて、笈の小文に出でたり○俳番匠に、越人を倶して木曾の月見し頃、とありて、俤や、と有り○小文庫に更級姨捨の辨あり、曰く、あるひはしらら吹上と聞くにうち誘はれて今年姨捨の月見ん事頻りなりければ、八月十一日美濃國を立つ、道遠く日數少なければ夜に出でゝ暮に草枕す、思ふにたがはず、其夜更科の里に到る、山は八幡といふ里より一里ばかり南に西南に横ほりふして冷しく高くもあらず、かどかどしき岩も見えず、たゞあはれ深き山の姿なり、なぐさめかねしといひけんも理り知られて、そゞろに悲しきに、何故に老いたる人を捨てたらんと思ふにいと涙落ちそひければ、「俤は姨ひとり泣く月の友　はせを」「いざよひも又さらしなの郡哉

同」と見えたり○雜談集に、翁北國行脚の頃さらしなの三句を求め、いづれかと申されしに「俤や姨ひとり泣く月の友」といふ句を可然と定めたり、と申しければ、誠しかなり、一句人目にはたゝず侍れども、其夜の月の天心に至る所人の知る事なりと悅び申されけり、されば友吉が「さらしなの月は四角にもなかりけり」といふ句は、武藏野の月須磨明石繪島にかけても影同じさみだれにかくれぬ橋いかでいかで逢ふべきや○袖中抄に「我が心慰めかねつ更級や姨捨山に照る月を見て」顯昭曰、姨捨山とは信濃國に有り、年頃母のやうにて養ひ立てたる、妻の言につきて甥の男子の月明かりける夜負ひてのぼりて、更級山に捨てたりけるより、姨捨山とはいふなり、心悲しく覺えて詠めけるとぞ。又大和物語を見れば、信濃國更級といふ所に男住みけり、若き時に親は死にければ、姨をなん親の如くに、若くよりあひ添ひてあるに此嫁心いと憂き事に覺えて、此姑の老

古今雜上

古文前集

月到二天心一處、風來二水面一時、一船清意味、料得少二人知一

いかゞまり居たるを、常に憎み、此男にも此姨のみ心さがなく惡きよしを言聞かせければ、昔の事もあらず恐なる人多く、此姨の爲に來りけり、此姨はいたく老いて二重にて居たり、猶嫁これを所狹がりて、今まで死なぬ事と思ひて、持ていまして深き山に棄て給ひてよ、とのみ責めければ、責められわびて左してんと思ひぬ、月のいとあかき夜姨どもいざたまへ、寺に尊きわざする見せ奉らんと云へば、詣でんといひければ、掻負ひていと深き山の麓に住みければ、其山につる〳〵と入りて、限りなく高き山の峰に、下り來べくもあらぬに、置きて逃げて來ぬ、やゝといへども答へもせで來ぬ、さて家に來て思ひ居るに、言ひ腹立ちける時に腹立ちて、斯くしつれど、年頃親の如く養ひつゝ相添ひてありければ、いと悲しく覺えけり、此山の上より月はいと限りなく明うて出でたるを、詠めつゝ、夜一夜寢も寢られず、悲しく覺えければ「我心なぐさめかねつ更級や姨捨山に照る月を見て」と詠みてなん又行きて迎へかへして來にける、夫より後なん姨捨山といひける、なぐさめがたきなどいふぞこれがよしになん有りける○無名抄に云、此歌は信濃國に更科の郡姨捨山といへる山の有るなり、昔人の姪を子として年頃養ひけるに、母の姨年老いてむつかしければ、八月十五夜の隈なく明かりけるに、此母をすかしのばせて逃げて歸りにけり、たゞ獨り山のいたゞきに居て、夜もすがら月を見て詠みける歌なり、さすがに覺束なかりければ、みそかに立歸りて聞きければ、此歌を打詠めて泣き居りける、其後此山をば姨捨山といふなり、その先は冠山とぞ申しける、冠のやうに似たるとかや、夫より後月見て慰まずとは詠める也、今按ずるに俊頼の説と大和物語と大きにたがへり、物語は勝これは姪なり、彼は迎へて歸り是は捨てゝ止みにけり、尙物語の説に附くべきか、此姨捨てたるより後、此山を姨捨山とはいふべきなり、扨後人

此なぐさめ難き心を取りても、又只彼の月を詠めても、慰めかねつといふ歌をば詠ずべきなり。捨てたらん夜はをばにても嫁にても、山に照る月を見て、とは詠ずべからず。物語は由緣ばかりを書きては詮なければ、さもたよりある古歌を書けるも、定まりたる事なり。或は又新しき歌詠み加ふるも常の事なり。坂東には一に高き山國と、甲斐よりも上り、美濃よりも登り、又越後よりも上るなり。其國の中に姨捨山高ければ月はまことに明しと申す。

鎖あけて月さし入れよ浮御堂

元祿四年の吟なるべし。小文庫に十六夜の辨あり、前條三井寺の句の所に委し。○浮御堂は江州堅田湖水亭にありて、岸より橋かゝりて小堂なり、西向に有りとかや、藥師堂と聞傳へ侍る。

湯尾

月に名をつゝみかねてやいもの神

元祿二年奥羽行脚の時、越前國にて八月十四日の吟なるべし。事は淺むつやの句の所に詳し。此句も細道紀行には見えず。○菅菰抄に、湯尾峠はわづかなる山にて嶺に茶店三四軒あり、いづれも孫嫡子御茶屋と暖簾に記して、疱瘡の守りを賣だす、古へ此茶屋の主疱瘡神と約して、其子孫嫡家といふ事なるべし。

氣比の明神に夜參す

月清し遊行のもてる砂の上

元祿二年の吟なり。奥の細道に、十四日夕暮敦賀の津に宿を求む、其の夜月殊に晴れたり、あすの夜も斯くあるべきにやと云へば、越路の習ひ猶明夜の陰晴はかり難しと、主じに酒すゝめられて、けいの明神に夜參す、仲哀天皇の御廟なり、社頭神さび

て松の木の間に月のもり入りたる、御前の白砂霜を敷けるが如し、往昔遊行二世の上人大願發起の事ありて、自ら草を苅り土石を荷ひ、泥泞をかわかせて、參詣往來の煩なし、古例今にたえず、神前に眞砂を荷ひ給ふ、これを遊行の砂持と申侍ると亭主の語りける、と見えて、此句あり○菅菰抄に、けいは氣比或は筍飯を正字とすべし、義は下に記す、氣比は假名書なり、人皇十四代仲哀天皇行宮の蹟にて天皇の靈を祀る、當國の一の宮なり、古事記に云、故建内宿禰命率其太子仲哀天皇爲將禊而經歷淡海及若狹國之時於高志前之角鹿造假宮而坐舊事紀に云、二月幸角鹿卽興行宮而居之是謂筍飯宮是なり。鎮座は神功皇后十三年始祭筍飯神と云り。按ずるに、筍飯の字面に據る時は此地にて天皇午時飯の行厨を開き給ふ故の名なるべし○神社考に、氣比明神越前敦賀日本紀仲哀天皇二年立氣長足姫尊爲皇后、二月幸角鹿卽興行宮而居之、是謂筍飯宮、神功皇后十三年命武内宿

香椎社稱神功皇后廟、或稱仲哀天皇廟、無定、資綱と云、見于元亮一抄

禰從太子合拜角鹿、筍飯太神、大神名去來紗、別神○菅菰抄に、遊行宗は本號時宗と云、一遍上人を元祖とす、熊野權現の告に依て、諸國を遊行し、決定往生六十萬人の札を衆人に與ふ、故に俗遊行宗と稱す、本寺は相州藤澤驛にありて、藤澤山清淨光寺と號し、百石を領す、此宗儀は巡國の間を以て住職とし、藤澤の本山上人を隱居とす、二世の上人は一遍の弟子にて他阿彌陀佛と云（傳記不詳）是よりして代々遊行住職の僧を他阿上人と稱す、上人とは釋氏要覽に云古師の云内有智德外有勝行在人之上名上人、又車來が說に、日本にて僧綱を賜ふに、法印法眼法橋位の僧を上人と稱す、遊行は禁庭にて只遊行大道心と口宣あるのみ、位階の沙汰無し、今上人と呼ぶは一派の稱號のみ、然れども參内の式は甚だ嚴重なりといへり。淳は字彙に水止まるなりとあり、卑俗の云ゐこりの事なり。遊行の砂村は其後代々の上人廻國の時必ず此地に來り砂石を運び、社頭の前後左右に敷

き申さるゝ事今に至て断絶無し、さる故に此社の樓門の外に木履を多くならべ置き、參詣の輩はき來たるはき物を、此木履にはきかへて、樓門の内に入る、遊行の歌き給ふ砂石を蹈む故にはき物の穢を憚るなり

柴の戸の月やそのまゝあみだ坊

何れの年の吟にや未知、小文庫に「柴の庵と聞けば賤しき名ゝれども世にこのもしきものにぞ有りける」此歌は東山に住みける僧を尋ねて西行の詠ませ給ふよし山家集にのせられたり、いかなる住家にやと其坊なつかしければ、と前書有り○評林「柴の戸と聞けばいやしき名なれども世にこのもしきものにぞありける　空也上人」極樂ははるけきほどゝ思ひしにつとめて至る所なりけり」柴の戸のあみだとかゝりて、一入月のもれ來る閑室の安心も露清らかにして、秋夜の閑をよく申さ

發句集に元祿四年とす、

評林柴の戸、庵の書損か

拾遺集はるけきにとゝ聞しかとと有り、仙慶法師の詠、

千載集には空也上人なり是又聞しかとゝ有り

何解、たのもし、是は、このもし、の書誤れるか、

法然上人の傳に、熊谷入道を坂東のあみだ佛と唱へたる事有り、依之蓮生をあみだ坊と其頃いひたるにや、されども四行同時の人を上人と云事いかゞ、都圖會に東山靈山正法寺山下に法然上人の舊跡有りもし是をあみだ坊ともいひけるにや

れたるなり、去此不遠の心をとめたる發句なるべし、夜孤輪の月を澄すと玄眞僧都も思ひ出ておかし○句解に曰、柴の庵と聞けば卑しき名なれども世にたのもしきものにぞありける、西土人、例に山家集の詠をしたへる此更の觀想なり、又或書に曾て空也無水之地に多く穿井、井必甘冷、以其常唱彌陀號、俗名彌陀水、往々而在焉、荒原曠野每逢遺骨、若衆一越念彌陀名、よりて世の人あみだ坊と呼ぶ、又市上人ともいへり、句中のあみだ坊是にまるか○山家集に、いにしへ東山にあみだ坊と申ける上人の庵室にまかりて見けるに哀れと覺えて「柴の庵と聞けばいやしき名なれども世にこのもしき住居なりけり」○按ずるに、句解に漢文をもて書ける所は元享釋書の通りなり、其次よりて世の人あみだ坊と呼ぶといふ事釋書には見えず、於市鄙唱彌陀勸化人、人呼市上人、と見えたり、扶桑隱逸傳にも、空也の傳有り、是等もあみだ坊と呼びたる事見えず、又東山に住居

の事いまだ見あたらず。空也の古跡は六道の西六波羅蜜寺四條坊門堀川の東敵町に紫雲山極樂院光勝寺空也堂と號す。有或書とは何れの書にや追て考ふべし○說叢、評林を難じて云、柴の戸の阿彌陀とかゝりて、といふ、戸をあむの緣語を賞するにや。野卑の緣語にして、翁なんぞ此所に心あらんや、翁に罪を課するものなり、又阿彌陀の事知らぬまゝに紛かし評したるにや。空也の歌は誠に無益なり、釋家の道歌を引かんに限り有るべからず。又玄扉僧都いぶかしきなり、もしや玄賓の書誤りにや、檢校もせずして印板にせしは麁末のみにあらず、僞を初學に傳ふ、明らかに記せしかども、空也の別名のあみだ坊は此句にはよらざるべきか。つら〳〵思ふに、此句謂れあるべし。此柴の戸とざしたる所、たしかに無くては叶はぬなり、或は空也の舊地か、又は隱者僧徒の庵室など知るべからず。何ぞ由緣の有るべき句と覺ゆ。其事傳はらず、詞書も無し、惜哉不詳、この柴の戸のものわびたる月の風情、さながらあみだ坊のいにしへの住居にも似て、其世の人もゆかしにや云はん、唯にいづくにもあれ、柴の戸の月はあみだ坊に其儘なりといはんは、雪を掴み風を追ふ如くならめ、尙後の明哲の說を俟つのみ。然るに芭蕉小文庫に、しかと詞書あり、其詞書、柴の戸と聞はいやしき名なれども世にこのもしきものにぞありける此歌は東山に住みける僧を尋ねて西行のよまれたるよし山家集に載せられたり、いかなる住居にやと先かの坊なつかしければ、とあり。然れば翁も、西上人の歌によりてなつかしく、ふと吟せられたると顯然たり。句解に云、空也あみだ坊、若し東山に住せしにや、然れども時代遙に相違なり、空也上人は圓融院天祿三年九月十三日寂東山西光寺八十三歲、又東下野守常綠聞書に、空也世以テ皆延喜帝御子之由ヲ申ス全ク御子ニハ非ス延喜三年癸亥誕生天祿三年壬申七十歲ニテ入滅也ト云々○或人所持の眞

柴の戸にはあらず

蹟小文庫と同樣にて、山家集にのせられ給ふ、いかなるあるじにやとゆかしくて或草庵の僧に遣しける、草の戸の月や其儘あみだ坊」とあり。

梅村載筆、林春信述、

悼遠流天宥法印

其の玉を羽黑へかへせ法の月

何れの年の吟にや不知○泊船集に、羽黑にかへせ、と見えたり○梅村載筆曰、彼書記は東福寺の僧正徹といふ人なり、書記は出家の官なり歌をよく詠みたる人なり、軒號を招月軒といふ、普光院の時の人なり、或人屏風に梧桐と三日月とを書きたるに、霽を望みければ、散らせ風見ぬもろこしの鳥も癡ずきりの葉わかぬ秋の三日月」と詠まれければ、或人此歌は天下をそしりたる歌なりとさゝへたるによりて、流罪せられたり、配所にて七月十五日に詠める歌「なかく〳〵になき魂ならばふる郷へ歸らんものをけふの夕暮」と詠まれければ、天子此歌を聞召しで勅免ありけると云々。

發句集、貞享元年とす

我宿は四角な顏を窓の月

何れの年にや未知、小文庫に、四角な影、とあり、泊船集にも同じ、句選誤れるや○發句集夏の部に出せる不審なり、小文庫此句の前に史邦が秋の句あり、高光宰相の、斯くばかり經難く見ゆる、と詠み給ひけん九月十三日とかや承りて」身の秋や月にも舞はぬ蚊の力　史邦」と有て次に此句あり。

又玄は木曾殿と背中合する寒さ哉と吟ぜしものなり、桃の實集に見えたり

月さびよ明智が妻のはなしせん

元祿四年の勸進帳に、前書、伊勢國又玄が宅にとめられ侍る頃其妻男の心にひとしく物事まめやかに見えければ旅の心をやすんじ侍りぬ彼日向守が妻髮を切て席をまうけられし心ばせ今更申出でゝ、と有て、月さびよ、と見えたり○小文庫にも

此前書ありて、句は、月さびて、とあり○按ずるに、勸進帳四年の春の出版なり、されば二年か三年か。

秋もはやはらつく雨に月の形

元祿七年九月廿日頃の吟なり。笈日記難波の部に、其柳亭、と前書有りて、此句先に「昨日からちよつ〳〵と秋も時雨哉」といふ句なりけるに、如何に思はれけん、月の形にはなしかへされし、廿一日二日の夜は雨そぼ降りて靜なれば「秋の夜をうち崩したる嘶哉」此句は寂寞枯槁の場を踏破りたる老後の活計、何物か及ばんと、各感じあひぬ、と有り○古今集に「惜しむらん人の心を知らぬ間に秋の時雨と身ぞふりにける」奥儀抄に、是は象覽の王に始めて逢うて別るゝ時、貫之が別れを惜みたる歌のかへしなり、折く思ひける人の有りけるも知らで、年の老いにける、と詠めり、ふりぬと云はんとて秋の時雨とは云へる也。

燧山

義仲の寢覺の山か月悲し

元祿二年八月十四日越前國にての吟なるべし、されども此句奥の細道に見え侍らず、壺碑の種に詳しく見えたり。前條淺水橋の句の所に記す、泊船集にも此句見えたり○菅菰抄に、燧が城は湯尾の向ひ山にて、木曾義仲の城跡なり。

大坂、哇止亭、月下に送兒

月澄むや狐こはがる兒の供

元祿七年九月廿七日の句なり。笈日記に、哇止亭、今宵は九月廿八日の夜なれば秋の名殘をしむとて七種の懇を結題にして各發句あり、是は泥足が其便りに出だしたれば、こゝに記さず、と笈日記難波の部に見えたり○元祿七年の其便集に、泥足

曰、此集を續らんとするに、芭蕉翁は難波に抖擻し給へりと聞きて直に彼のあたりを訪ふに、晴々亭の半歌仙を貪り哇止亭の七種の糎を吟じて、予が集の始終を調ふものならし、と有りて、前書所思「此道や行く人無しに秋の暮　芭蕉」、嶋の畠の木にかゝる蔦　泥足」、月しらむ蕎麥のこぼれに鳥の寢て　支考」と脇第三、洒堂、游刀、之道、車庸、哇止、惟然、龜柳と共に十吟の歌仙有り、次に、哇止亭に於て卽興月下送兒「月澄や狐怖かる兒の供はせを」、寄鹿憶婦「篠越えて來る人ゆかし鹿の脛　洒堂」、寄薄戀老女「花すゝき嫗が懷寢てゆかん　支考」、寄稻妻妬人「稻妻や暗がりにさす酒の論　惟然」、深窓萩「双六の萩の葉越や窓の奥哇止」、寄紅葉慢遊女「逢はぬ日は禿に見する紅葉哉　泥足」、聽砧悲離別「洗濯の中に別るゝ小夜碪　之道」。

入月のあとは机の四隅哉

東順は日蓮宗にて、江戸二本榎上行寺に墓あり、

遠々云、近年の年回に我と子の二本榎のさかえ哉　梅室

其角が弟信州に有り、此秋七月より八月はじめ迄來て看病す、ほはき木の七とせ先に榎の陰の露と消えさしも、

柳は其柳か

元祿六年の萩の露集に、みづのえ酉仲秋の月、此月は待つ夜いざよひと指折して、一夜深川の芭蕉庵にかはらぬちなみを集め、一夜は露沾公の芳園にとり〳〵光を分て、年々歳々樂しみめづる事夜あかしなり、されば、これかれに引誘はれて、船河野山さま〳〵として、幾重の心を重ねつらん、そもといまる句々集毎に面目をあらはしぬ、あはれ今年こそと思ひあへる秋のはじめより、老父いたく惱みつきて、今日知らず明日又知らず、下略と、其角が文見えたり○風俗文選に、芭蕉述作、東順が傳有り、云、老人東順は榎氏にして、其祖父江州堅田の農士、竹氏と稱す、榎氏といふものは晉子が母方によるものならし、今年七十歳ふたとせの秋の月を病める枕の上に詠めて「花鳥の情露を悲しめる悲び、限りの床のほとりまで神亂れず、終に更科の句をかたみとして、大乘妙典の臺に隱る、若かりし時醫を學んで恒の產とし、本多何某の公より俸祿を得て釜魚甑塵の愁すく

らぬ俤思ひ出でゝはなぐさめかれし心なり、

信濃にも老が子はあり　北角
けふの月

かく書付けて病床をうかゝひ侍るにかへし、

于と姨ととりかへて見んけふの月

萩の露に見えたり

按ずるに槇の陰は二本槇のことなるべし、姨捨の歌をたち入れたるなり、

大陸、陸市、知幻則離なか〳〵に山の中こそ住みよけれ草木は人の事なりはれば
中々に市の中こそ住みよけれうき世の人を草木と思へば、

尚自行狀記に、乙州正秀許六酒堂が徒は師の門をくゞり出て翁に謁す

なし、されども、世路をいとひて名聞の衣を破り杖を折いて業を捨て、既に六十年のはじめなり、市店を山居にかへて樂しむ處雖をはなさず、机を去らぬ事十とせあまり、其雖のすさみ車にこぼるゝが如し、湖上に生れて東野に終りを取る、是必ず大隱朝市の人なるべし、とありて、此句見えたり○泊船集に、東順身まかりける頃、傳書きて此句を遣されしよし、句兄弟に見ゆ、と有り。

月し〻ろや膝に手を置く雲の宿

元祿三年の吟なるべし○泊船集に宵の宿、と有り○笈日記湖南の部に、正秀亭初會興行の時、と前書有り「萩しらけたるひじり行燈　正秀」と脇有り。其次に去年の夏又此ほとりに遊行して游刀亭に遊ぶとて「さゝ波や風の薫りの相拍子　翁」と見えたり。此去年といへるは元祿三年なるべし。正秀が名は元祿三年のひさごに始めて見えたり。されば元祿三年初會有りしなるべし。句は、宵の宿、と有り○句選の雲の宿心得難し、書誤ならん○師走袋に云、初會興行の句なり、亭主を月にたとへて、膝に手を置くは其身を卑下したる挨拶なり○按ずるに、たゞ其坐の風情か。

月のみか雨に相撲もなかりけり

元祿二年奥羽行脚の時の吟なるべし。されども此句奥の細道に見えず○蠶蛾の種に、一歳芭蕉越路に至りて、古き名所を尋ねて、月の十句を或人語りけれど、過ぎ行く年月の程經て覺束なし、耳の底に殘るを三四句記してとゞめぬ、と有りて淺水橋玉江湯尾燧山の句を書きて、末に、濱と一字題にて此句見えたり○按ずるに、奥の細道敦賀の所に、十五日亭主の詞にたがはず雨降る、名月や北國日和さだめなき、とは敦賀の湊にての吟

潭北は其角門
享保頃の者なり

なり。然れば此濱に十五日神事の角力など例年有る事にや。此詞書は敦賀の湊に泊りて、十四日の夜宿のあるじに、翌の夜もかく有るべきやと問ひければ、答に、越路の習ひ猶明夜の陰晴はかり難し、とありし詞にたがはず、雨降りけるよし、奥の細道に見えたり。此時の吟なるべし、○山家集に「晴間なく雲こそ空にみちにけり、月見る事は思ひ絶えなん○潭北が大意に曰く「明は又秋の半も過ぎぬべし傾く月のをしきのみかは」此歌をとれるか。

戸を開けば西に山あり伊吹山といふ

花にもよらず雪にもよらず

たゞ是孤山の思ひあり

そのまゝに月もたのまじ伊吹山

和爾雅
美濃國不破郡伊吹山
近江にも同名の山有り
是又和爾雅にあり、
後旅集は元祿八年如行
編、孤山は四湖の清境
後旅集、そのまゝよ、
と有り

元祿二年の吟なり。後の旅集に、元祿二年の初めの夏深川の庵りも人にやりて、那須野の原に郭公を待ち、蓬葎の敗屋の下にきり〴〵すを聞て千百餘里の嶮難終にかうべを白うして美濃の國我里にうつり給ふ、句どもあまた有り、此事は奥のしをりに殘し給へば大方はもらしつ「胡蝶にもならで秋ふる菜虫哉、たねは淋しき茄子一もと」かくからびたる吟聲有りて、我下の句をす、戸を開けば西に山あり伊吹といふ花にもよらず雪にもよらず、只此孤山の德あり、「そのまゝに月もたのまじ伊吹山、斜嶺硯を取り向へば、此句をとゞめらる○笈日記、大垣の部に、斜嶺亭、とありて、此前書見えたり、德ありと讀め侍る○泊船集にも、德ありと見ゆ。

見る影やまた片夏も宵月夜

何れの年の吟にや知らず。句選頭書に、「片夏いぶかし、泊船集見

合はすべし、かたなり、とも讀め侍る不審と有り○泊船集を見るに、かたなり、と讀め侍る○物の親に、更登曰、源氏玉葛の卷に、姫君はきよらにおはしませど、まだかたなりにて生ひさきぞおしはかられ給ふ、といふ所をつみて、七日八日の宵月夜より良夜の光を思ふ句なり○或行脚の僧云、此句膳所野理所持の短冊なり、宗房と名有り、椹林頃の句か。

九たび起きても月の七つかな

元祿四年の雜談集に、寢られぬ夜思ひ出せし句を書きとめて、朝になりて吟じ返して見れば、句のふりも聊かはりて心もたがひあるやうに覺えぬるは、陰氣陽氣の間か、句の浮沈覺束なし。莊子に陽の字を喜、陰の字を怒、と詠せしも一氣のはこびなるべし、『夜』『九たび起きても月の七つ哉　翁』「ほとゝぎす我や鼠にひかれけん　角」『旦』『起き〳〵の心うごかし杜若　仙化』

讀古今雜中務卿親王
あはれうき秋の夕のならひかな物思へとは誰教へけん

「七くさやあとにうかるゝ朝鴉　角」『蓋』『鳩吹や太山は暗き蓋下り　蕭山』『白雨の日にすかさるゝ疊り哉　楊水』『暮』『遣羽子に長ばかりの日暮哉　龜翁』『日は沒と暮れぬは梅の木曲哉　柏舟』物思へとは誰教へけんと詠まれし夕べ〳〵の思せめて哀ふかし。起きて今朝また何事を營まんと詠みし朝烏の動靜にかけて、句毎の起點をはたらきぬべし○泊船集に、前書も無くたゝ一句見えたり。

侘て住月侘・網笠の窓を家として

芭蕉の句にあらず、天和三年の武藏曲に、うかれ行月網笠の窓を家として、と角止が句なり○泊船集に有るを、句選其儘傳寫したる物と見ゆ○按ずるに、武藏曲、うかれ行月の句の次に並べて「侘てすめ月侘齋がなら茶歌　はせを」と有り。此上五字に、下を見あやまりたる泊船集の麁忽なり。

あの中に蒔繪書きたし宿の月

貞享五年八月更科の月見んと木曾路に旅寢の時の吟なり。笈小文に、いでや月のあるじに酒ふるまはんといへば、盃持出たり、よのつねに一めぐりも大きに見えて、ふつゝかなる蒔繪をしたり、都のものは斯る物は風情なしとて手にも觸れざりけるに、思ひもかけぬ興に入て琦琬王巵の心地せらるゝも所がらなり、と有りて此句見えたり。

橋桁のしのぶは月の名殘かな

元祿五年の己巳、光集に「粟稗の粥食盡す月見哉　之道」「こゝろみのあま干おろす月見哉　車庸」此翁の句以上三句は、後の名月石山にまうでゝ、とあり○按ずるに、粥くひ盡すといひ、甘干のこゝろみといひ、月の名勝といひ、九月十三夜が、元祿四年に閏八月有り、後の名月と有るからは、閏八月にや○句解に、此句は袖日記に石山吟行と見えたり○按ずるに、元祿四年閏八月十八日石山參詣の時、「名月は二つ過ぎても瀨田の月」の吟有り。此橋桁も瀨田の橋か○續後撰集下、「もゝ敷や古き軒端のしのぶにもなほあまりある昔なりけり　順德院御製」。

善光寺

月影や四門四宗も唯ひとつ

貞享五年八月尾張より更科月見遊杖其記行笈の小文に、此句句選の如く、善光寺、と前書あり○伽藍開基記曰、信州善光寺者本多善光所創也、本朝第三十主欽明帝十三年、百濟國聖明王使者貢獻如來金像、下略○按ずるに、四門は佛家にいふ發心修行菩提涅槃の四門にや、四宗は天台眞言禪律にや、其外法相三論華嚴等の宗名ありといへども、近世天台眞言の寺院に兼學すよりて宗名ありて無きが如し○都圖會に、京都泉涌寺は官寺

善光寺
本朝三十六代皇極帝元帝創至元祿二年一千四十七年四門四谷名目四敬名有四門不同故三藏敬意立四門不同也、一有門明見有得道唯觀諸法實有開聞也二空門明見空得道三亦有空門四非有空門
信州住馬禪長文通
北空山雲上寺の文字道而可紀